

2001

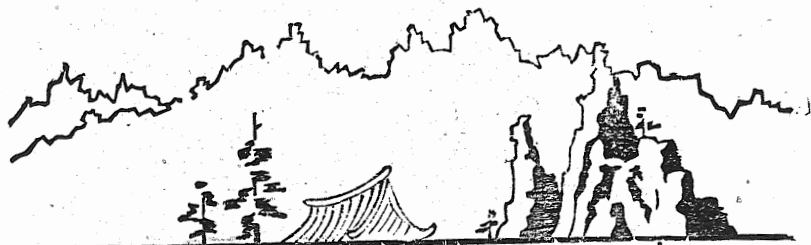
大正十三年一月二十九日(第三種郵便物認可)
昭和五年六月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人編輯



六月號

【號六十三百第】



金剛山日がへり

五月十五日より

金剛口〔末輝里〕迄電車開通

京城より日歸探勝

毎日 急行列車 運行
急行電車

毎土曜夜及休日の前夜は

直通寝台運轉

探勝券

單獨
團體(廿人以上) 三五割引

金剛山電車



うなぎ蒲焼

お座敷金端羅

川
長

旭町一丁目

金剛煎并金剛

開店二十五週年
紀念大賣出し中

何時も純白で
型の服はのびー モダンタイプ
の

マイゼアルカフス

京成何新大門口三丁目二八
マイゼアル朝日新聞社
電話をの三六七一番



續々御来店待入候

(店 商 木 藤)

金剛煎餅
金剛羹
金剛饅頭
金山

金剛山產松實松花應用品菓

金剛飴

龜屋商店

京二城本町

電話二七二七
本局四七五番

金剛柏子(秘傳の實)
金剛おこし
金剛柏子菓(朝の實菓子)
金剛しるこ

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和焼
三和焼
三和焼

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

ニリツトル入 貳圓五拾錢



金剛鶴は
芳醇無比
朝鮮最高級品



夏ノ好飲料!!!

六十マツへ以上の驚くべき多量の「ラヂウム」を含有
せる世界的優秀礦泉を瓶詰せる

クリスタル炭酸水
天然サイダー

常用清涼飲料たるのみならず熱性患者の止渴劑、血管硬化症、腎臟、肝臟及
糖尿症等に特別顯著なること専門諸大家の推賞するところであります各御家
庭の常備飲料としておすゝめ致します

京城南山町三丁目十一番地

營業所 中原商會

忠清北道清州郡北一面椒井里

製造所 天然炭酸水工場

キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン

絶對着色なし



達用御省内宮
社會式株酒麥麟麒

K3

守屋徳夫氏著

倫敦より紐育へ

定價一冊

金貳圓也

本書 體裁

四六版小形本裝釘瀟洒
表紙色クロス七百頁
寫眞銅版百十數葉挿入

著者今朝鮮殖産銀行調査課長の要職に在り經濟金融のことは即ちその本職といふべく、本書は著者が最近親しく歐米を視察し實地に開見精査したるところを記述したるものにして彼國の經濟社會狀態は、瞭如として紙表に在り。且つ著者は三葉子の雅名の下に一流の麗筆を有す。その文藝、藝術、演劇風俗を語りて詳なること素より言を俟たず。敢て江湖の湧くが如き御歡迎を望む。

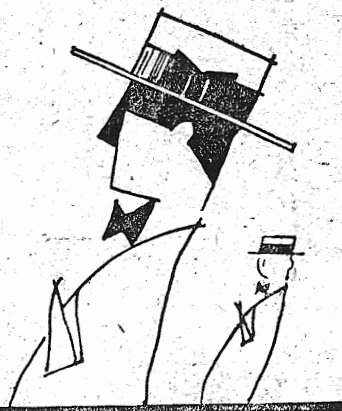
市内各書店にあり

丁子屋特製……

ストローハット

材料は優秀形態は清新いつまでも
型が崩れず冠り具合がとても素敵
な丁子屋のストローハットをお薦
めいたします。

特 價 六十銭 八十銭 一圓



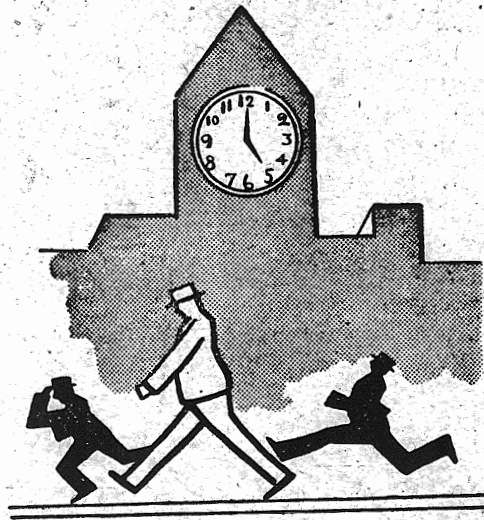
丁子屋

京城南大門通

ルービロポッサ



サクラビール



吾等の
午後五時を
急げ！
家庭の
サクラへ
カフエーの
サクラへ

5-20

御家庭には **サクラ 衛生ビール**

品 豊明殿の御宴……李 玉 職
川 雑記……中央朝鮮協會
中 篠田 治 策氏(二)
嶋 司氏(三)

次目號月六

品川雜記	薩南自動車行	九州所見(俳句)	無 冤 錄	文 化 病 弊	鮮 展 九 回 目	漫 筆 二 題	場 末 宿 の 風 景	讀 ん だ も の か ら	現 代 色 の 一 つ	G と W と 我	李 舜 臣 の 夢	岸 さ ん と 私	獨 マ サ リ ッ ク	服 裝 漫 筆	田 舍 風 俗	蛆 が わ く	め ぐ り 合 ひ	東 京 飛 行 記	公 明 な る 社 會	童 話	古 田 と 淺 川	君 萬 歲	人 間 不 滅	耳 と 私	天 才 の 天 折	鯛 の 香(短歌)	山 の 犧 牲	旅 から 旅 に	傑 作 縮 尻 漫 筆	眼 いろ	金 佛 笑 ふ	や ま と 歌	資 本 家 に お 辭 儀	易 の 新 境 地	郷 行 旅 雜 吟(短歌)	前 床 の 牡 丹(短歌)	傷 漢 城 客 中(漢詩)	五 月 の 空(短歌)	近 詠(俳句)	ヨ タ 吉 の 習 作					
李 玉 職	中央朝鮮協會	永 樂 町	京城婦人病院	利 根 川 齒 科	洋 畫 家	京城醫學部	京城醫學部	吉 野 町	東大門警察署	倭城台科學館	朝鮮史編輯會	仁川米豆取引所	三巴酒造合名	城大法文學部	丁子屋洋服部	城大法文學部	朝鮮新聞社	城大醫學部	京城日報社	京城師範學校	敬新學校	京城日報新聞社	三菱戰車鐵山	明 治 町	京城日報新聞社	洋 畫 家	遞 信 局	朝鮮銀行	校洞公立普通	心 の 友 社	南山吟社	明治町小唄販	鈴木運送店	尼崎伸銅會社	南米倉町	山口銀行支店	朝鮮銀行	櫻 井 町	朝鮮鐵道	城大醫學部					
篠 田 治 策 氏(二)	中 嶋 司 氏(三)	植 村 俊 二 氏(四)	植 村 孝 子 氏(五)	工 藤 武 城 氏(六)	利 根 川 清 治 郎 氏(七)	佐 藤 九 二 男 氏(九)	今 村 豊 氏(一〇)	飯 嶋 滋 次 郎 氏(一一)	松 岡 久 子 氏(一二)	古 賀 國 太 郎 氏(一三)	重 村 義 一 氏(一四)	中 村 榮 孝 氏(一五)	秋 山 滿 夫 氏(一六)	浦 田 多 喜 人 氏(一七)	泉 哲 氏(一八)	岩 鶴 嘉 雄 氏(一九)	小 田 省 吾 氏(二〇)	野 崎 眞 三 氏(二一)	小 川 蕃 氏(二二)	笠 神 志 都 延 氏(二三)	渡 邊 信 治 氏(二四)	濱 口 良 光 氏(二五)	別 府 八 百 吉 氏(二六)	高 橋 昇 氏(二九)	牧 野 二 郎 氏(三一)	附 田 巽 氏(三七)	山 田 新 一 氏(三八)	角 田 不 案 氏(三九)	津 田 常 男 氏(四〇)	長 谷 井 市 松 氏(四一)	廣 江 澤 次 郎 氏(四二)	山 本 吉 久 氏(四五)	大 浦 貫 道 氏(四六)	國 風 會 京 城 支 部(四七)	橫 山 巷 頭 子 氏(四八)	岡 村 介 石 氏(四九)	奧 永 政 輝 氏(五二)	淺 川 伯 教 氏(五二)	水 谷 九 二 吉 氏(五四)	角 田 芳 子 氏(五四)	久 留 米 三 郎 氏(五七)	木 本 房 太 郎 氏(五八)	德 野 鶴 子 氏(五八)	新 田 留 次 郎 氏(五九)	宮 松 夏 斗 氏(六〇)

豊明殿の御宴

篠田治策

(李 王 職)

【二】

は諸員最敬禮中に入御あらせられ諸員亦拜辭して退出するのである。豊明殿の御宴は、右の如くにして感激其物である。私は其御宴に陪する毎に、月俸一圓五十錢也の代用教員たりし一貧生が、今は長くも、勅語に所謂「諸大臣等」の列に伍して、天顔に咫尺し得るの光榮を想ひ、復た二重橋に於ける昔日の光景を追憶して、只管生を聖代に享けたる幸運を感謝する者である。

光化門閑話

三木一彦

○警察官講習所で、時々巡查の募集をする時、飛んでもない奇抜なことが持ち上るさうな。

○最近の話だ。大分縣の某といふ志望者が、『小生儀金一百圓を携へ、不日渡鮮するにつき、そのつもりであつてもうらいたい』といふ書面が、所長宛に来る。

○どういふ意味だらうと思ふことがつてゐると。

○『前の書面は取消し、改めて金百五十圓を持参するにつき、そのつもりで、お待ち受けを乞ふ』とある。いよく怪しんで、段々讀んで行くと、『小生の友人××縣巡查となりし時、その向へ五十圓差上げたり。また某は、△△府へ就職の時、その向へ七十圓進上せり。朝鮮は、加俸もあれば、百五十圓を適當と思ふ。到着の上は、何分よろしく』

○所員一同啞然として、『どういふ大體一エライ奴が来る。どうする』

五六年前のことであつた。宮中豊明殿の御宴終つて退出した時、迎への自動車が判らぬので、従弟の鈴木博士の自動車に便乗して二重橋を出たことがある。鈴木博士は農藝化學の大家として、ピタゴラスの発見者として、今や世界有数の學者であり、日本の國寶と稱せられて居る。

二重橋を出る時、鈴木博士は突然私に向つて、
オイ此邊だつたナ……
と感慨無量の面持で問ひかけた。思ひは同じで、私も只一言、
ウンをうだつたナ……

と軽く答へたのみで、後は無言のままである。されども二人の間には、此一問一答に千萬無量の意味があつた。

即ち我等は少年時代に相共に郷里を出奔した。私が十七歳で鈴木博士は十五歳であつた。東京に着いて未だ方角も判らぬ頃、兎も角も宮城二重橋の見物に出かけたものである。偶々宮中に儀式でもあつたと見へ、文武の大官が禮裝厳めしく或は肥馬に跨り、或は馬車を驅つて威風あたりを拂ひ、堂々として二重橋より退出するのを見た。田甫の間から出て来た我等は物珍しく眺めて居つたが、やがて吾も人なり彼も人なり、男兒立志出鄉關、學若不成死不還と思ふ様な感じが、慨然として起つたのであつた。此時の印象は今も尙ほ殘

つて居り、二重橋を出入する時、毎に懐ひ出さるのであるが、偶然にも二人が車を同ふし、復た其懐古の情を同ふしたのであつた。本年の天長節の御宴にも、亦御召の光榮に浴した。毎時もながら豊明殿の御宴は崇嚴無比にして、誠に感激の極みである。金色燦爛として蒔繪を延べたる如き合天井は、煌々たる無数のサンデリヤと相映して殆ど人目を眩せしめ、金ピカの文武百官亦畫中の人たるが如く、恍惚として吾れを忘れしむるようである。諸員の参列終れば天皇陛下は君が代の奏樂裏に、皇族及び列國使臣を從へて臨御あり金屏風を背景としたる玉座に就かせ給ひ、玉音朗かに勅語を下し賜へば、首相は群臣を代表し、首席大使は外國使臣を代表して忝しく奉答の辭を奏し、終つて宴に移れば、陛下には御機謙麗はしく玉杯を傾け給ひ、禮装せる舍人等は銀瓶を捧げ來つて参列諸員の大杯に酌く。美酒溢へて泉の如くにやあらん、酒量ある者は滿を引いて屢々之を傾ぐるも、諸員靜肅謹慎敢て雑語する者少く、瑞氣殿上に充ちて相共に聖壽の萬歳を壽き奉るのである。御料理は純粹の日本料理にして、酒も亦難の銘酒であるが、御料理は更なり、宮中の御酒は味ひ甘露の如く、一杯又一杯陶然として聖代の恩澤に浴するのである。既にして宴終れば、陛下に

出郷關、學若不成死不還と思ふ様な感じが、慨然として起つたのであつた。此時の印象は今も尚ほ残

は味ひ甘露の如く、二杯又一杯陶然として聖代の恩澤に浴するのである。既にして宴終れば、陛下に

○所員一同黙然として、『さう大變！エライ奴が来る。どうする』

品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

岸巖さん

京城雜筆五月號に岸巖さんの筆『此の頃のこと』、あれを讀んで思はず微笑させられた。

いくつになつても相變らず氣が若いのが岸さんだ。役者に齡がないといふが、岸さんにも齡がないと、岸さんは自から斷然確信して居るらしい。『四十になれば相當たまる筈の貯金が、一向たまる様子がないので見ると、四十になつた筈がなく』と岸さんは言つて居る。まことに岸さんらしい巧妙なトリックの使ひかただ。相當の貯金といふ其の相當とは、どの程度を指すのか知らないが、昔岸さんが鮮銀の東京支店に私等と机を並べて居た頃、まだ三十代の岸さんの特當預金はポリーナスの貰ひたてには三桁、少しすると二桁になつて岸さんを憂鬱にしたものだが自分

を讀むのに、めがねを用ふる『傾向にあるのを、敢て岸さんは『釋明』するにも當るまいかとも、失禮ながら私は思ふ次第であります。かく申す小生などは、愚息が今年から高等學校に入學したのだから相當のおやぢな筈だが、燈下に字書を弄するに、めがねは敢て要しない。従つて岸さんが四十台なら私はまだ三十台の若さと謂つてよからう。

分は『尋常六年の子供と兄弟に間違へられる種』若さを自慢の岸さんも、第三者には四十幾歳と數へられる今日、其の特當は仁川の汐と同様干満の差が大きく時に三桁二桁とすり落ちることはあらうにしても、年に二度の大潮時には必定四桁には上るであらう。これは岸さんに言はせると『貯金』ではないかも知れぬが、まあ此の不景氣の時節に、高潮時四桁のデポジットを擁する必然性の境遇に在るのだから『此の頃電燈の下で新聞

岸さんについては思ひ出させられる事が澤山ある。鮮銀東京調査局に梁山泊氣取りで一癖ある人間が集まつて居た頃からのお馴染で當時は無けなしの財布をはたいてよく飲み合つたものだ。芝浦の月見亭や、櫻田本郷町の登波や、白木屋横町の重亭、さては品川の三徳なんぞ、ちよいちよい數人連れで行つたものだ。一寸雁治郎式の顔の持主である岸さんは、今でもさうである如く昔から色男を以て自任して居た。さうして酔ふと必ず『館山』を歌ひ、東北辯のせりふを怒鳴つて『熊谷陣屋』の身ぶりを演じない事はなかつたものだがその頃の鮮銀調査局には、細貝大石なんどの豪傑が蟠居して居たので、銀行の引け際には誰れかが發議して『オイ行かう』と言へば必ず『ワン行かう』と来て、連れ立つたものだ。此の頃のモダンな連中が青い灯影にコソコソと女を相手にするのはちがひ、明るい座

敷で堂々と唄ひ踊り、女共をして呆然たらしめたものであつた。思ひ出しておかしくなる珍談がいろいろあるけれど、吹聴していか悪いかわからないので、茲に傳へることは止さう。

岸さんといふ人を大家の旦那ににして、みんなで取り巻いたら、さぞ愉快な事だらうと、私はいつも思つてる。大家の旦那でなくとも其の貯金が五桁まで達したら、一度はうんとおごつて貰はう。老眼鏡をかけてやにさがつてる岸さんを見ることも、また悪くない風景にちがひあるまい。

◆鐘路風聞記

三木 一彦

○京城名物の森鐘路署長も、今度いよく警察界から足を洗つた
○毎土曜日といふと、アノ魁偉な體で、ネヂ鉢巻をして、署員と一緒に、署内隈なく雜巾掛けをしてゐたが——そして我々にも、温情溢るゝやうな好いおぢさんであつたが——何となく寂しい氣持がする。

○新任の原署長は、堅實な、一流の主張を有つた——たとへば、柔剣道もいゝが、いざといふ場合警察官に最も必要なことは、火急の間に合ふといふことである。それには、早足の必要がある。——そして、原さんは、西大門署長として、何より驅ケ足を奨勵して來た。『ワチの署長は、驅ケ足署長ぢや』といはれた。一つの見識を有つた人といへやう。

○今後大にやつて貰ひたいものだ。

薩南半島自動車行

別天地指宿温泉

植村 俊 二

(植村病院)

我等の自動車は指宿街道をひた走り走る。指宿とは薩摩半島の南端鹿兒嶋市を南に去る十三里の地、未だ世に現はれざれども温泉の湧出量の豊富なること、泉種の多種多様なることに於て能く別府に匹敵する大温泉郷なりといふ事は以前より聞き及んで居た。それが又汽車と自動車により達しうる日本本土の最南端亜熱帯の位置にあつて自然界の景観も亦従て南國的な柔か味を持つといふので一層我等の遊志をそゝつたのである。

元より邊僻の街道、定めて寂寞舊東海道を往くが如しと思ひきや何んぞ知らん自動車、バスの往來織るが如く、鹿兒島より一部は電車をも通じ、又沿岸の一部は省線指宿線の軌道工事中である。道路は岸壁により西に削るが如き断崖を負ひ、東に碧水鹿兒島灣を湛へ空を摩する巨松の並樹の間に折くは櫻島の雄姿、遠きは雲霞の大隅半島を隱見する光景は、東海道にて富士の靈姿を樹間に仰ぐにも優りて眺め飽かぬ。途中谷山、喜入今和泉等の巨邑を過ぐ。何れも帯の如き海岸の平地又は緩傾地ありて通綿として人家盡きず、各戸富有にして輪奐整然、路傍の校舎など設備整ひ街路の一角に柱時計を装置し又校門の柱にも同様に倣込時計を装置するなど車上の瞥見

にだに眼をみはらしむるものが澤山ある。かゝる人文上の優越なる點は特色ある地文上の恩恵が齎した影響であると思惟せらるゝけれども、亦鹿兒嶋地方は封建の昔より幾多英明の君主の施政によりて培はれ、又維新前後に輩出せる俊才の推輓によりて育まれたる影響を見通すことは出来ない。

三月末といふに四周の光景は初夏に似たり、花は既に謝して新緑の候となり針葉樹並に常緑の闊葉樹は濃淡傾間なく山肌を覆ひ、噂に聞き及ぶこの地方の地色である緑の色彩を飽喫することが出来る今朝櫻島見物の折燈岩台の上にて遭遇せし驟雨は一旦其太かりし雨脚を收めたが、車今和泉を過ぎ宮の濱に達し指宿の標識たる魚見嶽の山脚海に没する様を展望し得る頃より再び降り出し、小粒より大粒にやがて風さへ加はり路傍の樹葉は車窓を打ち急傾斜の小流は瀬の音を立てる程に、實はこれから池田湖を迂廻し湖畔のドライブ、薩摩富士の展望を胸に描き來つた私共に妙ならず不安の念を起さしむる。

【四】

する。雲愈低く垂れ見上ぐる懸崖に雨は簾の如く繁く群樹の緑色ますく牙えて見ゆ。一鳥鳴かず木を打つ嵐の聲の中に自動車を驅る身は深山幽谷の裡にある思ひである。走ること二里、湖の西北岸頭に達す、直下二百メートル水煙籠糊たる湖面を臨む。雨は小歇みとなつたが暗雲低迷して對岸を見るに由なし、されば周圍四里の湖水も恰もはてなき大洋に面する如く結構却て雄大なるは嬉しかつた。若し快晴なれば端麗なる開闢嶽一名薩摩富士の倒姿は此の湖面に映ずべきに雲は山腰をかすめては散るか見えて又淡く濃く纏綿遂にペールの垣間見を許さなかつた。是れよりトンネルをくぐれば額

蛙村の海岸に出づべし、そこから三方海に面して山脚長く海に没するといふ開闢嶽の麗はしき姿を眺め得べけんも今日は到底其望みなし、依て更に迂廻山路を下り湖邊の坦路をドライブして開闢神社前を過ぎり山川港を経て指宿温泉摺ケ濱の借樂園に投じたのは暮色漸く鹿兒島灣頭に迫る頃であつた。地圖上の指宿と、温泉指宿とは想像以上の相違がある。指宿とは南に伸びた薩摩半島が大隅半島と相對して鹿兒島灣口を扼する地方一帯の總稱で、温泉指宿は其の灣の峽口に面せる海岸の一區に過ぎない。併し瀉口、港、摺ケ濱の三大部落を擁し、北は魚見嶽の麓より南は山川港に及ぶ一里餘の廣大なる地域を占め、尙ほ附近の温泉群を併せたなら夥しき範圍に達する。瀉口は最も早く開けたる地にして一番手前に位し、港は中央摺ケ濱は最南端に位する。港には港屋といふ劇場が設備されてある最も閑靜なるは摺ケ濱である。何

れも旅館は海岸砂地に接して建てられ、近きは波寄する知林島、遠きは煙霞縹渺の彼方に連なる大隅の山々、まことに飽かぬ眺めであ

べて簡素なるを取柄とする。附近には富士にも見紛ふ開闢嶽を有し之に池田湖、鯉池等の火口湖を配し、更に之等を粉飾せる常緑の樹

人物風景帖

北 漢 山 人

富有にして師範學校の一角に柱時計
など設備整ひ街路の一角に柱時計
を装置し又校門の柱にも同様に倣
込時計を装置するなど車上の警見

摺ヶ濱は最南端に位する。港には
港座といふ劇場が設備されてある
最も閑静なるは摺ヶ濱である。何

れも旅館は海岸砂地に接して建て
られ、近きは波寄する知林島、遠
きは煙霞縹渺の彼方に連なる大隅
の山々、まことに飽かぬ眺めであ
る。

一浴後女中との問答に先づ驚か
されたるは浴客は我が朝鮮及滿州
よりするもの最も多く且つ數ヶ月
長逗留の養生客多き占むといふこ
とである。設備は行届かざれど予

べて簡素なるを取柄とする。附近
には富士にも見紛ふ開閉鉄を有し
之に池田湖、鯉池等の火口湖を配
し、更に之等を粉飾せる常緑の樹
々の有するニウワンスヤトーンに
より南國的氣分を多分に持った此
温泉郷も交通の開くるに従ひ開闢
さるゝに相違ないが、靜養の温泉
場としては寧ろ現在の閑寂さとい
つまでも保ちたい心地がする。

人物風景帖

北 漢 山 人

○鷺梁津の燃料研究所の内田技
師は、アノ方面で有名な樂觀家で
『何、經濟國難！、馬鹿なことを
いひ給へ。政府が少し力を入れて
この朝鮮の地下埋藏物を掘り出せ
ば、日本は忽ち世界の大成金國さ
君、何を青い顔しとるんだ』

○ところで、同じ鑛業關係の、
總督府の鈴木技師(哲郎)と來る
と、何事につけても堅實主義。山
でもやつて見やうといふ先生が來
ると、『君、ポツ／＼やれよ。朝
鮮の山は、うつかりすると、内地
のとは、マルテ違ふんだ。成るべ
く自重し給へよ』、勢ひ込んで相
談に來たものも、歸る時は、足元
がヒョロ〜。

○面白いのは、この御兩所が、
義兄弟になつてゐること、奥様
同士は、ほんとの御姉妹である。
そして双方、『イヤ君、あれのい
ふ事など、當アになるものかい。
ウフフ』

○朝鮮第一の金鑛といはれた平
北の三成金鑛を、三井鑛業に賣渡
して、福々してゐる例の崔昌學さ
ん、それまでに儲けた金と、賣つ
た金とで、尠くとも五百萬圓は、
持つてゐるだらうとの評判。

○いつか三井の住井さんの漫談
に、『でずから崔君は、李朝以來
の大金持……どうかすると……崔
君以來の長者かも知れませんよ』
とある。

○ナル程、御本人が、『君、日
本の銀行で大丈夫だらうか』……
と心配する筈。

九州所見

植村孝子

博多より雲仙に向ふ

雨晴れて菜の花盛る山のひだ
山懐畑はれんげの夕赤し
雲仙や白帆見下ろし風光る
筑紫富士流るゝ硫黄や春かすむ
車の旅櫻咲く山海も見ゆ
櫻 島

熔岩を叩く大雨や春暈し
指宿街道
春の雨連なる峰の尙青し
指宿温泉
夕波に温泉壺小さし春淋し
薩摩富士
白雲に富士やつゝまる春のくれ
宮崎縣青島
春雨や熱帯樹々のめつらしき
青島海岸波蝕の奇窟
蜂の巢に似たる岩かな浪の音
宮崎より別府に向ふ
松並木旭登りつ沖長閑
山幾つ汽車送迎のつとくかな

無 冤 錄

工 藤 武 城

(京城婦人病院)

本ブラに於て、偶然にも久しく探して居た無冤録を手に入れた。科學の畑の我々に取つては、久渴の書籍を手に入れることけ、御婦人が流行の衣裳でも買った時の氣持にも較べやうか、兎に角嬉しものである。

無冤録とは、現代語で云ふ法醫學である。法律醫學などと眞正面から露骨に命名せぬ、東洋式のところが己に奥ゆかしい。

抑も此無冤録は、支那の元の武宗の時代、至大元年、即ち今日より六百二十二年前に、王興と云ふ人が、其時已に行はれてゐた、洗冤録及び平冤録の二書を折衷して編集したものである。

上下の二編より成り、獄事檢驗の法を詳述したもので、小生の得たものは、更らに此れに諺文の註解を添へたものが二冊附けてあるのが大に珍とするに足る。

世界中其時代に於て、法醫學専門の書籍にして、此程體裁を具へてゐるものは恐らく無いであらう。

此書が何れの時代に於て、始めて日本に渡來したか判然しない。

明和五年に刊行せられし無冤録述の跋に、『此邦嚮きに無冤録と云へる書を印行せり。これ元の王氏編輯する所にして、朝鮮國の諸學士音註を加ふる所なり。斯邦に諳刻せるは、何れの年、何某刻せると云ふこと審ならず。且つ版も丙壬の災に値ひけるにや、今は見

ること鮮なし』とある。

即ち百六十年以前に渡來したことを、日本に入れるものは朝鮮を通過せるものなるは確實である。

其當時に於て已に見ること鮮なしと云へる刊行物には、正統三年の序文がある。日本に於ては永享十年に當るから、足利義教の時代に當る。南北朝の戰爭酣にして、

其前年即ち永享九年に楠正成始めて河内に兵を擧げて居る。其中に於て足利氏は朝鮮とは親しく使節を來往して居るから、朝鮮註の無冤録が日本に來たことも異とするに足らぬ。然かも對島の宗氏が朝鮮と相通したのは其後五年嘉吉二年に始まつて居るから、直接に鎌倉に來たものと想像せらるゝ。

又た此書が音訓を施して世に出たのは、室町時代の末頃と考へたらば誤なからう。

洗冤録は宋惠父の編述であつて平冤録は趙逸齋の著である。共に一千年以前宋時代に出來た書物である。此が日本に入つたのは、朝鮮註の本よりも遙に後であつたのも面白い。

日本に於て無冤録が人に知られる様になつたのは、和泉の人、河合尚久が、徳川吉宗將軍の元文元年(百九十四年前)に鈔譯して梓行してからである。

無冤録の中で、吾々婦人科學者に最も興味があるのは胎傷死の一項である。此には收生婆(産婆の

こと)が官吏と共に立合ふことゝなつて居る。妊娠の有無、胎児の月數、妊婦の自殺、他殺の鑑別法など中々に面白い。

こんな書物を見るにつけても、日本が西洋に醫學を學ばねばならなくなつたことを、東洋の諸先輩に對して相濟まぬことと思ひ、つくづく情けなくなる。

易

小 村 岡
明 介 石

◆ 禪林風聞記

北 漢 山 人

○妙心寺の現住華山大義和尚は學德共に高邁といふ評判で、内地などから、續々雲水連がやつて來る。

○多い時には、一時に七八名も落ち合ふこともある。

○山門繁昌、まことに結構の至りだが、コ、に困つたことは、それがために、折々米櫃がガラン洞になることだ。

○ツイこの間も、和尚が來客と對談中、御飯時を前にして、心配で堪まらぬ納所クン、揉み手をしながら出現、『エー和尚様……米……』、『叱ッ、叱ッ』、しばらくすると、また現はれて、『あの

う、和尚様……米……』、『叱ッ叱ッ』

○和尚客に向つて、『どうも今年は不順で御座るのう。拙僧などは、この通り、トント體が着うてその癖妙に冷汗が流れ申すツイ、

へエン〜』

文化病弊

りと教へて之を捨てた。其結果日本人の頭、耳、目、鼻、齒、肺、心臓、腎臓、胃腸、肝臓に至るま

學士晉註を加ふる所なり。斯邦に
醜刻せるは、何れの年、何某刻せ
ると云ふこと審ならず。且つ版も
丙壬の災に値ひけるにや、今は見

行してからである。
無窮録の中で、吾々婦人科學者
に最も興味があるのは胎傷死の一
頂である。此には收生婆(産婆の

年不附て後國の...
は、この通り、トント體が著うて
その癖妙に冷汗が流れ申すワイ。
ヘン〜』

文化病弊

利根川清治郎

(利根川齒科醫院)

近代に於ける目覺しき理化學的
發明發見は現在の如き交通通信機
關の發達を促し遂に今日の文化建
設の基礎をなすに至つた。昔一ヶ
年を要せし世界一週も廿三日十五
時間餘にして達せられ、殊に「ラ
デオ」の發達は世界各地の事情を
數十分にて知るを得るまでに至り
迅速至便の世の中とはなつた。之
につれ、世界の民族と云ひ、國家
と云ひ、相接觸する機會が多くな
りし結果、數千年或は數百年間全
く孤立のまゝに特異の環境に置か
れて養はれ來りし一民族、一國家
一地方の特色が漸次失はれて、世
界共通の色彩を表はさむとする傾
向を示して來た。茲に現代文化に
依る善惡兩面の利害を表すに至つ
てる。本來地球上の生物は其緯度
の相違、氣候、風土、地形の異な
るにつれて皆多少の異なる黠を有
し同一であり得ない。猿でも米國
の猿と日本の猿とは甚だしく相違
の黠を有し居る如く地方々々の特
異の黠を表はしてゐる。即ち所變
れば品變るである、人間に於ても
赤道直下に幾百幾十萬年といふ永
い間生活を續けしものは黒色とな
り、溫帯に永く住むものは黄色、
其中間け稍々銅色を呈し、寒き地
方に行くに従つて色白く、北緯五
十度邊に永く生活せしものに今日
の白人を作つてゐる。之緯度の
差に依る變化である。然るに近代
文化の發達は此環境適應狀態を破

る傾向を持ち來した。斯くて不自
然なる環境の破壊は所謂地方に於
ける文化の病弊として表はれて來
た。例へば我國に於ては鎖國三百
年の夢破れて今や七十年、模倣に
急いで模すべからざるものまで模
して遂に政治國難、經濟國難、思
想國難を叫ぶに至り、歐米文化の
病弊漸く深からむとしてゐる。

然かも文化の根底たるべき我國
民の保健状態日に衰へて今や世
界文明國民中の最弱帝國となり、
保健國難に面して來た。之れ我が
國の緯度の差による地形、風土と
密接なる關係を有せる日本人に獨
特の調和せる衣、食、住に於ける
文化を捨て、調和すべからざる生
活を模せしが爲である。殊に健康
に最も關係あるは補物に於て肥料
に見る如く人間に於ては其食物で
ある。我國人の保健状態の低下は
日本人特有の食養文化なる神代な
がらの穀菜食を捨て、極端に動物
食を模倣し、砂糖を亂用し、益々
白きを好みて米の食べ方を誤りし
結果と言はざるを得ない。

然して北緯五十度の天地に發達
せる榮養學、醫學を直ちに北緯二
十乃至四十度の我日本に直譯せる
こと其端を發してゐる。即ち過渡
期の誤れる醫學は我國數千年の環
境適應を破つて動物性蛋白質を以
て滋養物なりと教へた結果、只管
經濟の許す範圍に於て動物食を實
行し、昔ながらの菜食を不消化な

りと教へて之を捨てた。其結果日
本人の頭、耳、目、鼻、齒、肺、
心臟、腎臟、胃腸、肝臟に至るま
で悉く病に胃され、人は病の器な
りとまで云はれ、今や健康なるも
の一人もなしとまでに至つてゐる
而して精神的には協同精神が次第
に衰へて世は不景氣なりと稱し産
兒を制限する如き愚を演じ、眞に
意義ある文化を建設せむとはせず
徒らに小智小才を弄して不自然に
走り、天の示す處を輕視せむとす
るの傾向を示してゐる。人爲的に
進めば進む程、自然より離れ去り
文化人の望む健康から益々離るゝ
に至つてゐる。

例之心勞が原因にて食慾不消を
來せる患者に對して其心勞を除く
ことをなさずして單に消化劑を投
與するは今日の醫學の行き方であ
る。全く心身不二、靈肉一致の根
本を無視してゐる、即ち病氣とは
人類が自然の戒律を守らざる爲に
起りし自然の復讐なりと見るべき
もので人爲的に本當に効果ある如
く人間史が考へてもそれが自然の
法則に適せざれば其期待せる効果
が上らないのは當然である。醫學
校が數多く建設せられ、醫者は急
激に其數を加へ、設備よき病院が
無數に建てられ、近代醫學が進歩
せりと稱せられても、病人、病氣
は益々多く、今や文化病なる名ま
でも見せらるゝの矛盾を呈するに
至つてゐる。我國民の平均壽命四
十歳にも及ばぬ現代である、生物
學上の人壽二百歳説あるに比すれ
ば眞に傷ましき事實ではないか。
私共の齒科醫學の如き過去五十
年間未曾有の進歩を遂げ、口腔衛
生が向上したと稱せられても、齲
蝕の罹患率が益々高く、實に古今
未曾有である。即ち臨床醫學が進

歩せりと云ひ得るならんも、醫學の根本たる生を衛るの術即ち豫防的醫術の實際に於ては昔時に比して確かに低下せりと云ひ得ることである。之は論よりも幾多の證據が雄辯に物語つてゐる。即ち古人は生を衛る術に於ては今日の人より優つた實行をなし居りしことは事實上否定し得ぬ。

世界の文明國人は齲蝕は非常に多い、非文明國人は齲蝕が少い。米國人は九五%、東京人九四、一七%、朝鮮人は一六%、支那人は一五%位である。而かも米國人、東京人は齲蝕豫防の爲に齒刷牙を使用し、爾來二十年乃至四十年を経過してゐる、而して豫期の如く齲蝕を豫防し得たであらうか。否事實は反對で益々其罹患率が増してゐる。即ち地球上の文明國が四十年乃至二十數年に涉り幾億萬人となく齒刷牙のみに齲蝕の豫防をたよつて來た其成績は失敗であつた。反對に齒刷牙などは使はず、只昔ながらの菜食主義で通して來た所謂非文化人のみが齲蝕に罹らないではないか。文化生活者又は上流生活者の食養が榮養學的に不合理、不完全であつて自ら墓穴に急ぎ居るものである。獨り之は齲蝕豫防の問題に止まらず結核、神經衰弱等、あらゆる文化病の原因をなすもので人類生活の根本問題である。

茲數年前よりの齲蝕豫防の新聞記事、學童齒牙衛生に關する「リフレット」「パンフレット」、將又講演等を見るに其九十九%が齒刷牙使用を最良の方法としてゐる。唯此一兩年に於て食養的に自淨作用を必要とする處より咀嚼を唱導するものもあるも齒牙發育を完全ならしむる食養上の根本に觸れてゐ

ない。結核菌は「コッホ」が生れない前からあつたのである。結核に罹るのは身體が弱いから罹るもので強い身体には結核菌も發育し得ない。と同様に強い齒には齲蝕が起らない。然るに近時小學兒童の齲蝕豫防を名として齒刷牙屋齒醫屋を利用して、小學校に兒童齒科診療所を寄附せしめて齲蝕を有する兒童に齒刷牙を使ふ事のみを教へて居る。是れ即ち本末を誤れる豫防であつて斯かる事に熱心な人こそ精神的文化病に罹り居るのである。斯の如き事に出す金が三千圓なり五千圓あつたら貧窮と戦ひつゝ、貴重なる食養的研究に没頭して居る學者に其の金を寄附してやつたらば、人類の爲、國家の爲どれ程効果があるか知れぬではないか。折角何々文化研究所と言ふ名を冠して居る實業家の社會奉仕も、其根幹に觸れて居ないのである。彼の「ロツクフェラ」研究

◆醫界風聞記

漢江漁郎

○京城醫師會の席上、誰か工藤先生の靴の、ナツパンなのを發見し、「諸君、我が會員中、斯くの如きお粗末なものを、穿いて居る男があるがどうか」、スルト全會員「ナル程、そいつはヒドイ。工藤さん、そのボロ靴は、何とか處分したらどうかネ」

○次ぎの會合の時、工藤氏新調の靴を、ピカピカさせ、「へへッ諸君、これなら文句はあるまい」スルト一會員、「イヤ、文句あり、諸君、まづこの工藤氏の靴子を御覽なさい。形状といひ、古

「八」

所のやり方や、又、野口博士の業績の如き純眞なる態度を學ぶべきである。

要するに近時の日本人の食養が余りに歐米模倣となり、過剰なる砂糖攝取の害と相俟つて「ウキタミン」「カルシウム」等の不足を來す。加之燐、鐵、「ソヂニウム」「ポッタシニウム」「マグネシウム」、硅素、沃度等の無機鹽類の不足を來し、新陳代謝を障害し、血液を酸性に導き、遂に其榮養障害は色々の文化病の流行をなしてゐる。而して美食は過食を生むの傾向を有し、精氣肥満を示し、見壯健に見ゆるも忍耐力に乏しく僅かの刺戟に依りてもろくも墮るゝもの多く、かくて酸性食品の過剩攝取は誤れる文化生活と相俟つて人壽を低下せしめてゐる。獨り日本人のみの問題にあらず、人類種族保存の根本問題である。

色といひ。按ずるに、ウイクトリヤ朝の初期のものと思ふ。百年使用したら、帽子もヒマをやつて然るべきでせう。」「ッ、賛成だ」

○ソコで、工藤氏また帽子を新調……不用になつたのを、庭掃除夫の朴書房にやると、朴さん三度お辭儀をして、「へへッ先生、これア頂いたも同然で……私には、コンナ新しいのが御座います」

社長 高橋章之助
鮮朝 教育新聞
發行所 京城西小門 一三六基社

鮮展九回目

可きでない。前にも云つた様に、門前の小僧習はぬ經を讀み得たか得ぬかに、進展、退歩の別を論議

唯此一兩年に於て食養的に自淨作
用を必要とする處より咀嚼を唱導
するものもあるも歯牙發育を完全な
らしむる食養上の根本に觸れてゐ

諸君、これなら文句はあるまい』
スルト一會員、「イヤ、文句あり
く、諸君、まづこの工藤氏の帽
子を御覽なさい。形状といひ、古

鮮展九回目
發行所 京城西小門
一三六其社

鮮展九回目

佐藤九二男

(洋 畫 家)

扱て、本年の鮮展を観るに、油
繪搬入點數六九八、内入選一八四
點と云ふ本年度に示された數は、
昨年七七三點對一三三點に比し
遙かに本年は、搬入數の減少と、
それに反比例して、入選率は非常
に増加してゐる。

これは一面、出品畫のツブがそ
ろつて來たとも見られる様である
が、併し、此の狭い朝鮮内で、僅
か八回と九回との八ヶ月の距離し
かない間に、株式相場ではあるま
いし、そんな速急なメタモルフオ
ースは考へられない、灰色のあく
がぬけて、やや白色に近づいたく
らいの事で、白いものが赤くなる
程の進展だとは決して思はれない
又僅か數ヶ月で安々と生れ變れる
ものなら、繪描き程樂な商賣は又
とない譯だ。

そこで、筆者は、本年度の鮮展
が大眾化し、普遍化したと見るの
が妥當の考へ方と思ふのである。
昨年は中學生等の出來心からの作
品は、其弊誠に大なりとして、そ
れ等の作品は絶對拒否する主張を
とつたと云ふ事は、當時新聞紙上
にも同はれ、一般熟知の事と思ふ
が、本年はそれ等の作品が、群を
爲して入選してゐる點から見ても
明らかな事である。併しその可否
論に就いては、色々の主張もある
事であらふが、當局の方針が斯く
あるを可と見認めての上であるな

らば、我々は何等其處に、差しは
さむブリテンションの要はない譯
である。之が好結果を齎らすもの
とするならば之に越した悦びはな
い。

本年の鮮展は、遠慮もひいき目
も無い處、事實僅かな作家をのぞ
いて、未だく作家自身の工夫を
要す可き、數餘の點が残されてゐ
る事を感じる。無論之は作家への
呈言のみでなく、筆者自身を鞭打
つ言葉である。

いかに中央畫壇からの、距離と
焦點を離れた土地柄とは云へ、其
處にはそれ相應の、吉無上の工夫
も仕事も爲されべき筈である。

九年目の本日尙ほ、千遍一律の
間を往來してゐる現狀態は(之に
は色々の因があるであらふが)悦
ばしき發表機關を有し乍ら、惜し
むべき事柄と思ふ。

作家が、已れに覺る所無く、只
いたづらに、門前の小僧習はぬ經
を讀むのでは、何年立つても、い
つも乍らの、もぬけの殻である。
追隨と踏躰に終止してゐる現狀
態を、決して非常な進展などとは
考へられない。

繼承された美術的價值が、創造
せられた美術價值と合一化して、
初めて其處に一つの進展を爲した
と云ひ得るのであつて、鮮展二二
の流行作家の追隨と踏躰を、器用
に出来るか不器用に出来るかだけ
の一事で、進展、退歩は決定さる

可きでない。前にも云つた様に、
門前の小僧習はぬ經を讀み得たか
得ぬかに、進展、退歩の別を論議
され可きではなく、作の優劣をも
決定さるべきではないと思ふ。

作家は、あく迄厳正に、あく迄
慎重に美術を取扱ふべきである。
筆者が昨年「素人では駄目だ」
と書いたのも、つまりは門前の小
僧習はぬ經を讀むのでは、無意味
であると云ふ意味に相通する譯で
ある。

お互ひに、只一つの鮮展を、嚴
正な繪畫批判の立脚地から奮起し
育くむて行きたく思ふ。

◆ 婆さん物語

漢 江 漁 郎

○ 殖銀の野田さんは、洋行中伯
林を足溜りにして、瑞典や丁株を
視察した。その視察中は、同行の
奥さんを、伯林の宿屋へ預けて置
いた。

○ 奥さんの退屈なこと、話にな
らぬ。どつちを見ても、異邦人ば
かり……歌舞伎の話、和歌生花の
話などをするつれば一人もない。
ソコで、夫人大に勇を鼓し、アッ
チの文部省や市役所の許可證をと
つて、毎日學校や育児院を視察す
る。

○ スルト宿のおばあさん(老主
婦)が大さう感心し、大勢の宿泊
客を捉えて、「皆さん御覽なさい
うちの日本娘は、マダこんなに若
いのに、何んと感心でせう。皆さ
ん褒めてやつて下さい……」

○ このお婆あさんは、シマイま
で、夫人を十七歳とばかり思つて
ゐた……。

漫筆二題

今村 豊

(城大醫學部)

贈物

これに種々ある。ほんの挨拶代りに軽い意味で贈るもの、勿論先方にそれに對する報ひを豫期しない。

非常に世話になつて心に負債を感じ、感謝を形であらはず場合もある。

先方からある有形無形の報酬ある可きを豫期してする贈物は罪惡である。お互ひにすべきものせらる可きものでなく、この贈物は贈物の方である。

子槻は自身食辛抱のせい、「贈物に直ぐ値の知れる如き賤しいものはない。貰つて嬉しいのは諸國の名物、珍味」と云ふ様な意味を述べてゐる。

成程交通取引の不便の明治の中頃の言葉としては適當であるが。今日大都會の百貨店に行けば、諸國の名物珍味なんでもある。

臺灣の果物、北海道の生鮭、朝鮮の林檎、長崎のカラスミ、青森の鮑、等々、交通取引の發達は諸國の珍味が珍味でなくなつた。日本中はおろか國外のものでも、スキスのチーズ、獨逸の腸詰、黒海のカビア、ブラデルの胡桃、カリフォルニアのオレンジ、スペインの葡萄等々。

しかも贈られ 容易に値の見當がつく。子槻を満足さす如き贈物はない

事になる。

そこで死んで廿年ばかりになる長崎の奇人にして學者の西道仙老人を想ひ出す。この人勝手口以下に歌が書いてあつたと云ふ。

『たまわらば、生者より松魚節菓子より砂糖、砂糖より金』

通

なんでも通と云ふものは窮屈なものだ。オヂンの通は蒲蕪ばかり食ひ。蕎麥通け汚いそば湯飲んでもり以外手を出して悪く。遊びの通は女を遊ばす氣持だと云ふし。履物、足袋、それ／＼の通となれば、江戸に一軒よりないとか云ふ不便な小さな老舗でもとめねばならぬ。

最も自由なる可きすしの立食ひさへも、一定の順序と方式を履むと云ふ。

通には獨創なく、進歩なく、甚だ保守的で事大主義である。その上に茶場より窮屈な型がある。保守的の證據は芝居通は必ず先代を褒める。當代の若かつた時と先代の圓熟した時の比較をそのまゝに信じてゐるからだ。角力通も亦同じ。

食通の名代を好む事、事大主義の證據である。勿論名代の家は變物の主人が買ひ出しに庖丁に自ら出る様な所多く。その名聲は單なる宣傳ばかりではない事もあるが代が代り板場が代つてもその様だ

かどうだか。

他に新しい競争者がそれ以上の道の精進してゐる所が必ずないと云へまい。

名代以外の隈なくならぬのは無難には相違ないが、味覺の進歩がない。

通は都會に育つた人に多い。我々田舎者は野暮と云はれ乍らも捕はれた所なく、誤つた先入主もなく、公平に自分の趣味、感覺を満足さし得る。

◆夜盗入來記

廣江 生

○私の近所にドロ坊が見舞ひ、貴金屬十數點を失敬して行きました。其翌々日の眞夜中、幽か乍ら折々異様な物音がするので私は跳ね起き玄關まで來ると入口の扉が二寸程明いて居る。湯殿を見ると一尺程戸が明いて冷たい夜陰の風がスーッ！

○ソーレ泥坊だと呼び、家族全体を非常召集するやら交番に電話をかけるやら、大騒動。宙を飛んで駆け附けたお巡りさんと家内中捜査したがドロ坊は雲を霞と逃げ去つて居なかつた。

○被害何如にと調査をすれば、一屋の抽出しはドロ公捜査の形各部跡はあるが、結局被害は赤靴一足と鶏卵五個に過ぎなかつた。而も泥坊自身の靴一足置き忘れて行つたから差引正味被害高鶏卵五個也
○威勢のいゝ時代なら被害數千圓に及んだかも知れぬが、ドロ公も近來の私には同情して歸つたのかと思ふと願ひて私は獨りで微苦笑……。

場末宿の風景

ゐた。さつき貴様に五錢貸したぢやないかと一人が怒鳴ると、なにけち／＼しやがるんだいと返答し

しかも贈られ 容易に値の見當がつく。
子規を満足さす如き贈物はない

出る様な所多く。その名聲は單なる宣傳ばかりではない事もあるが代が代り板場が代つてもその様だ

も近來の私には同情して歸つたのかと思ふと顧みて私は獨りで微笑……。

場末宿の風景

飯嶋滋次郎

(京・城醫專)

古風な提燈が下つてゐて、それに御宿金膏圓と朱の太筆で書いてあるので終列車が驛に着く時刻にはその宿屋へは北の方にも足溜りを失くしてじり／＼と後ずさりして来た人達が一人二人きつと蠟のやうに這入つてきた。鑛山師と云つても空漠な鑛區圖を持つた人や古典的に響く支那浪人と自稱してゐるが和服の胸を鷹揚に膨らませてゐるだけの冒險者達は物價の高い土地で寢床と晩飯を一回で得られるのでこゝろ云ふ場所を選んだ。

断片や長春の町の名云つたりして女性から中性に移つて行く人生觀と盲目的勇氣で浪人共はずつかり輕蔑されてしまふ。

ある時バスケットを持つた少年が泊つて翌日急にゐなくなつたので女中がそのバスケットを開けた講談本の猿飛佐助と催眠術云ふ本と小さな肥後守が一本出てきた。それから暫時はその少年は咽喉でも斬つてあるく化物のやうに噂された。そうすると偽悪癖のある亭主は大口を開いて笑ひながら、臺灣の花蓮港と云ふ所で人の頭を割つた話や、朝鮮の何處かで山人參を盗んだ冒險談をして終いに日露戰爭秘聞を云ふのを話した。上村提督が露國の艦隊を撃破したのは自分が鶴送ルと元山から暗號電報を送つたからだと言張した。だから自分は歴史を作る人だと自慢した。

◆本町風聞記

漢江漁郎

もつとも晩飯の菜と云つても鯨の酢味噌と云ふ不思議な料理かどう／＼した醬油で煮た餅であつた。それに通稱太郎と云ふ朝鮮人の板場のつくる御吸物と云つてゐる汁である。太郎はうす汚れた朝鮮ズボンに下駄を覺つかなく穿いて白湯を煮立てるとそれに醬油を流し込んで、鉄を浮かせて直に御吸物を作つた。腫物が頭に出来てゐる赤兒を女房が抱いて寝てゐるし亭主は太つた體に黒メリンスの帯を巻きつけて酒幕へ濁酒を呷りに行つてゐるので、白粉焼けして肩の毛がをそろしく抜けあがつた女中が膳を運ぶ。浪人が高官宛の紹介状などを懷中から出して氣焔をあげて、揚句姐さん何處ですと云ふと、うちほんの近頃内地からご當地に参りましたですわといろ／＼の地方の表現法をつき交せて挨拶するが、そのうちに支那語の

赤土の砂煙が裏の練兵場に揚がつて囃がみつしり低い天井に蜜集する頃になると一團の相撲が宿に泊つた。級も低く、骨格も整つてゐない人達ばかりであつた。しかし口け皆大きく發達してゐるので太郎は朝から飯ばかり炊いてゐた給金を拂つてくれないので客の財布を盗んだ揚句、警察に拘引されて、臂をしどく打たれて歸つて来たが、木遣りのやうな調子で朝鮮歌を唄つてゐると、相撲達は薄暗い四疊半に固まつて賭博を打つて

ゐた。さつき貴様は五錢貸したぢやないかと一人が怒鳴ると、なにけち／＼しやがるんだいと返答して喧嘩になりそうだったが、その中ぶつ／＼と咳と聲は秘密と緊張の籠つた響に變つて行つた。時々青桐の下に据つた桶から水を幾杯も飲んで『あゝえら』と云ふ男もあつた。

西洋の畫家は肥滿した裸婦を描いて『蒸着し』と題するが、力士達のあたりには大暑の氣が漂つてゐた。

○本町二丁目の靴屋さんの渡部久吉氏……決して唯の靴屋ではないさうです。

○音楽は、高勇吉氏の高弟で、京城では、唯一人のセロ弾きださうです。

○彫刻もやる。そして年々の鮮展彫刻部を、殆んど唯だ一人で背負つて立つてゐます。

○大の子供好きで、昨年なども濱口良光氏などと、『山と水に親しむ會』をつくり、多勢の子供と一緒に、仁川や清涼里邊を泳ぎ廻りました。

○イヤに頭の髪をモチャ／＼させ、一見氣取つたやうな、ブンとしたやうな、一種のスタイルであるから、『アレ……誰れ?』『知らないワ』『何んだか氣味が悪いのネ』『え……もう歸りませう』

……などといはれるけれど、よくつき合つて見ると、藝術家らしい無邪氣さ、淡泊さ、ほんとに憎めない我渡部久吉さんださうです。

此頃讀んだものから

松岡久子

(吉野町)

此頃ある人から頼まれて『しんじゆう』といふ本を讀んで居ますこれはドレーク氏の書いた、日本を舞臺にした英文の小説です。そこにかゝれた日本及び日本人の習慣や心持が眞實であるかどうかを調べて見て欲しいといふ頼みによつて格別面白いと思はずに讀んで居る譯なのです。

西洋人の持つ日本に就いての知識と云へば、先づラフカデオ・ハインの書物と、繪ハガキと錦繪と興味中心になされた旅行者の報告を、勝手にでつち上げて、櫻の下を繪日傘をさしてねり歩いてゐる舞妓のやうな女や、かむろのやうな子供を作り上げて喜んで居るのが普通です。此本の著者も御多分にもれず、時代錯誤やら、取りちがへやら、ありつたけの日本知識をはりませにしたやうな感があるのは是非ありません。

初めて刊行されたのが一千九百二十九年とあります。主人公は帝國ホテルに泊まつて居ます。日比谷公園があります。時は現代です。

文字といふ主人公、わかい娘です。美しい色とり／＼の服装をして日傘をさして歩いて來るのです。その下駄の音がから／＼とするとかいて居ます。近頃の下駄はよいものほど音がしないやうになりましたね。若い娘ならフェルトの草履か、下駄でも殆ど音がし

ないものが買はれて居ます。然し下駄の音はたしかハーンも面白くかいて居ますし、ドイツケンスも靴の音を『二都物語』のうちに面白くかいて居ますから、これはよほど興味のある事柄で、特につけ加へる必要を著者は感じたのかも知れません。

その娘は伯母さんと歩いて居ます。伯母さんけ齒を黒々と染めて居ます。一寸現代はなれのした圖です。

白根山中の、金比羅觀音といふ人里離れた山寺へ訪ねて行くことが書いてあります。金比羅觀音とは思ひ付きではありませんか。そこで食へた御馳走がまた面白いのです。

高脚の膳にごはん、豆腐のお味噌汁、魚と松茸その他の草の如きものゝ入つたまるで池から掬ひ上げて來たかとも見えるお清汁、赤魚のさしみ、頭と尾髓のついた鹽魚の煮肴、胡瓜、蓮根、大根等の野菜、漬物と云つた御馳走です。人里離れた山寺の御馳走とは一寸受取れません。

山へ行く道で制服制帽の學生に會ひます。文字の許婚の人と云ふので大學生らしい年輩です。その青年が『不倶戴天の仇』といふ話をしてどうしても復仇の志のある處を語る點なども、四十七浪人の物語を現代人ととりちがへた感があります。

【三】

斯うかいて來ると悪口ばかりになりませんが、西洋人らしいニューモアがたつぷりあつて、中々面白い處もあるのです。

長い道で向ふから知つた人が來る位やくくわいなことはない。いつ帽子をとつたらいゝか、どの邊で氣が付いたらいゝか、横を向いた下を見たりして近づいて行く滑稽さを面白くかいて居ます。

踵のない爪先ばかりのスリッパを穿くむづかしさ、爪先にうんと力を入れて、氷の上でも滑るやうに引ずつて行かないと、足はスリッパのあとから歩いて行くやうになることなども、靴下をはいて居る者にもみわかるあの、くすぐつたい足先の感觸を上手にかいて居ます。

兎にも角にも物の眞實を知ることのいかに難いかを、この本は教へて居ます。私達の知る西洋がこんなものでないやうにと思はずに居られません。

◆劍道風聞記

北漢山人

○朝鮮の目慢の一ツだつた劍道の大家持田盛二氏も、今度いよいよ東京へ歸る。

○宮内省、東京高師、及び警視廳の師範となるためだ。

○ところで、面白いのは、例の講談社の野間清治氏。この人ヒドク持田氏に惚れ込んで、『先生が東京へ歸つて下されば、朝鮮總督府がイクラ出してゐるか知らんがその邊け失禮ながら私一人で：』ニヤツと笑つたといふ評がある。○持田氏ばりは、全く惜しい。

現代色の一っ

都鳥

現代色の一つ

古賀國太郎

(東大門警察署)

その下駄の音がからころ／＼と
するとかいて居ます。近頃の下駄
はよいものほど音がしないやうに
なりましたね。若い娘ならフェル
トの草履か、下駄でも殆ど音のし

青年か「不傳」の位、いふ
をしてどうしても復仇の志のある
處を語る點なども、四十七浪人の
物語を現代人ととりちがへた感が
あります。

府がイクラ出してゐるか知らんが
その邊け失禮ながら私一人で「
ニヤツと笑つたといふ評がある。
○持田氏ばりは、全く惜しい。

都鳥
鳥 水
割 焚
京 焚
旭町一丁目
電本三三六六

鶴の蔭ほし

漢江漁郎

○京城の初等教育界の大元老横
山彌三郎氏も、今度いよく引退
した。

○何んしろ京城にまだ、小學校
がなく、倭城臺にたつた一つ寺小
屋のやうなものがあつた頃からの
横山先生だ。歴史的記念物といつ
てもよからう。

○横山さんの下で、三年訓導を
つとめると、日本全國ドコへ行つ
ても、名訓導と折紙をつけられる
と評判してゐた。初等教育の『ぬ
し』だつたのである。

○横山さんの記憶力の博大なの
には、誰でも頭を下げてゐた。自
校の職員は生年月や、原籍は勿論
のこと、他校の教師の就職時日や
辭令交付の日日まで、キレイに覺
えてゐる。そして『鶴の蔭ほし』
といける程、老ひ且つ置れてゐ
たが、意見はいつも進歩的で、一
歩も若いものに譲らなかつた。

○若い藝者のお尻を撫で、
「フツ、九十點／＼」と唸るほどの
酒脱味も有つてゐた。

現代色の特長を最も鮮明に表顯
して居るもの一つはスピード化
であらう。自動車の發達して居る
米國邊では彼の市街電車の如き交
通機關は最早過去の機關として早
晩撤去さるべき運命に逢着して居
るとさへ傳へられて居る。地上を
走る汽車の如き飛行機の發達に伴
ふて唯僅かに貨物輸送用としての
み其の存在を認めらるゝ時代の到
來も餘り遠き未來の空想でないか
も知れぬ。兎に角凡有社會のスピ
ード化夫れは現代文化の尖端であ
り其の程度如何は地方文化を測定
する一つの標準ともなり得るので
けあるまいか。

私は左様な見地から久方振の東
都旅行の序に銀座の舗装道の交叉
點に行んで現代文化の尖端を行く
と云はるゝ所謂モダンガールのス
ピード振を窺ふべく彼女等の歩速
測定を試みたのである。其の結果
は次の通であつた。

歩速 一分間一三〇步乃至一四

〇步

歩幅は測定することは出来なかつ
たが東都よりの歸途大阪で購ふた
文士新居格氏著現代明色の一節に
記述せる所に依れば、

歩幅 一步六六センチ乃至七七

センチ

となつて居る。

今之を従來婦女子の平均歩幅と
云はれて居る約五〇センチに比ぶれ
ば三割乃至五割の増加であり。尙

又軍隊及警察所定の操典の歩幅標
準七五センチに比較しても毫も遜色
なきのみか其の歩速に至つては之
が標準歩數一分間一四歩を凌駕
すること正に二〇、以てモガ連の
スピード振を知るべきである。

番茶の香り

三木一彦

○近年醫界の儲け頭は、大和町
の藤井虎彦氏(婦人科)で、この
五六年の間に、僅に十萬圓を突破
したらうといはれてゐる。

○佐々木四方志博士は、長年參
禪をやり「彼奴は、いよく／＼ホン
物になつた」と感心されてゐる。
だが、天稟の禪味は、到底我が池
田季雄氏に及ばざること遠しと評
されてゐる。

GとWと我

重村 義一

(恩賜記念科學館)

【一四】

自分は五年前海軍を去つて京城に來た。引繼ぎGも海軍を去り大連に行つて今滿鐵問題として仲々やかましい○○の社長になつた。翌年優曇華の花咲いて、極めて偶然にもWが現に大連の○○局長であることが判つた。二人が相擁して男泣きに喜んだ事は言ふ迄もない。早速Gは京城に來て其の奇遇を自分に通知した。Wから切なる手紙を自分に寄せて來た。

此の三月の中旬に、自分は大連に行く用事が出來たので、此の序を以てWを訪問した。彼は矢張り昔の彼であつた。彼は早速縣中の出身者を糾合して呉れて、とある旗亭に春宵を飲み且つ談した。宵は更けた、自分は大分酔ふた。少年同志鍾天。

斑白相逢渤海邊。
萬事蹉跎都是夢。
何如一笑倒樽前。
W答へて曰く
官海浮沈好任天。

不省鬢絲霜白邊。
四十年來快心事。
春風談舊酒杯前。

その夜大和ホテルに寝ながら、四十年間の出來事を省み、一生の間の波瀾重疊なる『世路日記』を追想した。G、Wと自分等が同じ机に培養され、分れてより四十年目に再會したのだ。佳人ならぬ奇遇に感きはまりなく、夢地はH市の山河を辿りつゝ、深き深き眠りに落ちたのである。

本町二丁目

龜屋食堂

電本四二四五

今より四十年前の郷里H市は、まだ電燈も電話もない。汽車も通ふて居ない。又市内に石炭の壘を吐く煙突は一本もなかつた。石炭を使用するところはなかつたのである。その當時の教育の最高機關は唯一の縣立中學校があつたのみだ。自分が大威張りで入學した時は、同期の健兒百人位も居たらうか。固より折縣のものも可成り多かつた。そして凡て三人で一脚の机を並んで用ゆる様になつて居た自分の机には一人はGで、一人はWであつた。二ヶ年間三人は仲良く交際を續けた。其の内Wは一番の年長者で、何にかと世話を焼いて呉れた。又繪が大變上手かつた。何時でも九十點以上を取るもので、皆から羨まれてゐた位だつた。まだ眼に残つてゐるのは大禮服の那翁が戰敗れてセント・ヘレナに恨を呑んで居る構圖である。

Gは金澤の出身である。父が陸軍の上長官であつた關係上でもあらう——H市には委任官は鎮台勤務の士官の外には指を折るに過ぎなかつたと思ふ——大變威張つてゐた。そしてヤンチャ者でもあつた。學問は良く出來た。体格も偉大で力も強かつた。その間に介在して自分は何等特色がなかつた。『佳人の奇遇』『世路日記』『浮城物語』等の小説は其時代にWから借りて讀んだやうに思ふ。

Wは政治家を志し、よく土曜日に有志の同輩通と寺の庫裏を借りて演説會を催した。——第一議會が丁度開かれて始めて代議政体が現實した時代であつたのも、其の當時の青年に演説の必要を鼓吹した動機であつたらう——誰れでも彼れでも、自由平等論や、四百餘州併呑の演説を辯じて、眼中人なしの概があつた。

自分は中學を去つて海軍の豫備校に入り間もなく江田島に行つた。夫れより三十年近く或は陸に或は海に或は外國の勤務に軍職に就いて餘念がなかつた。

Gは順序を経て東大出の工學士となり、海軍の技術官となり、最近迄海軍に籍を置いたが、不思議に自分とは海上勤務の外は勤務を同うして或は工廠に或は在外の監督官に、相俵して中學の延長を續けて居た。獨りWは中學を出たなり、その消息は不明であつた。時々Gと話し合ふ事もあるが『何處にどうしておじやるやら』位の處で依然として判らなかつた。

春風秋雨、實に四十年、日清役日露役、歐洲大戰を経て、H市には文化の急テンポが渦巻いた。停車場が出來た。水道が出來た。電車が敷設された。工業地としての大都市となつた。教育機關には高師が出來た。高工が出來た。高等學校が出來た。文理科大學が出來た。放送局が出來た。一躍昔の面目は一變した。

李舜臣の夢

の競争者であつた元均の術中に陥つて水軍の總師たる地位は握はれてゐた。然し均の大敗するや再び起用されることなるのである。

『佳人の奇遇』、『世路日記』、『海城物語』等の小説は其時代にWから借りて讀んだやうに思ふ。

Wは政治家を志し、よく土曜日を

等學校が出来た。文理科大学が出来た。放送局が出来た。一躍昔の面目は一變した。

電本四二四五

李舜臣の夢

中村榮孝

(朝鮮史編修會)

夢占ひは現代の科學文明の世界からして見れば迷信として簡単にかたづけられてしまふかも知れないが、それにしてもフロイド一派の心理學上の解釋なども出て來るもので中々さうばかりもゆかない。

この頃文祿慶長の朝鮮役に水軍の勇將として日本軍を惱まし、戦役の終局と共に華々しい戦死によつてその一生を終つた忠武公李舜臣が戦中自ら筆を執つて書き遺した日記を讀むと、中に夢の記事の多いのは特に目をひく。そして夢をみると大抵自ら判断を下して吉凶を占つてゐる。夢占ひとして興味あるばかりでなく、これによつて彼が朝鮮役のやうな空前の大事に處し得て成功した所以の一面を窺明する資ともなると思はれる。

面白くことには、英雄傳によくある誕生と夢兆も李舜臣傳には見えてゐる。母が夢に神人の教へによりその子の命名を得て舜臣と名づけ、そこに英雄としての機縁が生じたといふのである。この類の傳説は朝鮮でも決して珍しくないその一例を舜臣に於て見ることが出来るのである。

舜臣自身の夢は、極めて種類が

多い。或は戦況を憂慮し、或は故舊を偲び、或は國家を憂へ、或は時勢を慨し、或は奸物を詰り、或は妻子の病苦を念ひ、或は母の無事を念する、或はその身の得意を悦ぶなどあらゆる感情の發露するものがあつて、彼の人情味豊かな憂國の志士たる個性を遺憾なく發揮してゐる。

舜臣の日記は、流麗遒勁の文章と練達雄偉の筆蹟で記されて居ることに譯出しては却つて文意を損ずるから、一二その夢に關する部分を摘出してお目にかかることとしよう。

身南鮮に在つて水軍の將師として奮闘しながら、常に中央の戦況と政局とに注意を怠らなかつた舜臣は、屢々彼の推薦者で、一國の重望を擔つて領議政として活動してゐた柳成龍の夢をみた。對坐時局を談ずることも少くない。文祿の戦役發端の翌年秋八月一日の曉にもその一つがある。

曉夢、到巨鬪、狀如京都、多有奇事、領相來拜、余答拜、言及樂輿播遷之事、揮淚嗟嘆、賊勢則已息云、相與論情之際、左右之人、無數雲集矣と記してゐる。

慶長役の再び起るや、舜臣はそ

の競争者であつた元均の術中に陥つて水軍の總師たる地位は褫けられてゐた。然し均の大敗するや再び起用されることになるのであるが慶尙道の軍中にその輝かしい報知の到達し再び名將の名を専らにせんとするに先ち、彼には夢兆があつた。即ち丁酉八月二日の條にかう書いてゐる。

初二日庚戌、乍晴、獨坐戩軒、懷戀如何、悲慟不已、是夜、夢有受、命之兆

翌早朝はからずも宣傳官が來て教諭書を齎し、三道水軍統制使に命ぜられた。心替かに待つてゐた日は來た。彼は即日水營に向つて出發し、直ちに花々しい活躍は開始せられた。

舜臣は再び大命降下して水軍の總師となつた後著々と經營を進め日本軍撃破の機をねらつてゐた。終に一ヶ月半にしてその時は來た鳴梁の戦は即ちこれである。九月十六日早朝、見張船の報知を聞き直に碇を擧げて出陣し、百舟餘の日本船と戦ひ、舟一船を撞破して大勝を得たのである。恰もこの前夜神人を夢み軍略を授かつた。十五日の記事は次の如くである。

十五日癸卯、晴、乘潮水、領諸將移陣右水營前洋、碧波亭後有鳴梁數少舟師、不可背鳴梁爲陣故也、招集諸將、約束曰、兵法云、必死則生、必生則死、又曰一夫當選、足懼千夫、今我之謂矣、爾各諸將、少有違令、則即當軍律、小可饒貸、再三嚴約、是夜、夢有神人、指示曰、如此則大捷、如是則取敗云と舜臣の畫策を眼前に見るの感がある。(五・五・二二)

岸さんと私

秋山 滿 夫

(七川米豆取財所)

岸さんが鮮銀の支店長として仁川に來られてから約二年、同じ町内で目と鼻の間に住むのである。それに等しくアイヌの末孫と謂つても岸さんの遠祖は坂上田村麿か東北御巡狩の御給仕に奉仕したさる豪族の一人娘との間に生れ出でたる方から連綿として傳へつた家柄であつて、私とは生れなからにして門地を異にしてゐる。

祖先はどうであつてもお互に明治の聖代に生を享け略同じ曆日の下に経過して來たのであるから餘所様の御交際と違つて發音を矯める苦勞もなく縱横無碍に會話が出来るので一入の親しみが有り心易く附合つてゐると云ふと御先祖に對して失禮かも知れないから御懇情に浴してゐます。

岸さんとは公私の會合で落合ふことが頗る多いので額の皺が幾筋あるか迄知り合つてゐる間柄だ。その都度感服するのは岸さんの才氣煥發と多藝多能振り、殊に話に興が乗つて來ると這つたり立つたりゼスチユアの上手な上に端麗なる容貌と純真なる性情とが相映發して一段の光彩を描き出すことである。若しも岸さんをして學に志ざしめずして梨園に赴かしてゐたならば左團次や梅幸が果して今日の盛名を劇壇に恣にする事を許さなかつたことと想像せられる。

世に眞個不老の藥があるならば岸さんをしていつまでも二、三十

代の若々しさを保たしめたいと念願するもの豈御本人及奥様のみならずや 我輩も亦同感だ。然るに岸さんも御多分に漏れず此頃眼鏡をかける方が讀書をすても目も頭も疲れないで宜いよ、君も使用玉ひなどと頻りに私にも勸告する程ふんだんに婆心を持ち合せてゐる、その御親切は身に沁みて難有感涙を催ふしますが、私の目は未だ之を要求しないので此の點に付ては友情に反くことを甚だ遺憾に思ふのは私ではなくて岸さんのことです。

事程左様に岸さんは年齢に於ても身長、才能、酒量其の他凡ての點に於て私よりも遙に勝つてゐるので私は一目置いて兄事してゐる團君に付ても亦八木さんの公平なる審判に依ると二目の差であるのにこの兄事用一目を加算して三目置いて打つてゐる。夫れが爲め岸さんは毎度惡戦苦闘對局中電話が懸つたり用達しにでも行つて來てうっかり肝心のツギ目を忘れたりして時にしてやられることがあると岸さんの端正なる相恰が一時に崩壊します。私も友達甲斐に十遍に一度位はと佛心を起すのである。然るに岸さんは苦悶の裡にも謂ひ知れぬ快味があるものと見へて中々一目を讓步せず過去の記録など付御存じないものゝ如く嚴然として三目を要求し勝敗は全く度外視してゐる所など稚氣大に愛へ

すきものがある。

【一六】

其の稚氣が前月の雜筆で私をいたく老人にしてしまつた——からと云つて別段我輩の估券に關する重大問題でもないのに其儘にして置く積りであつたが、圖らずも或る暮會の席上でそれが問題になり即時裁判開廷の結果私の面譽を毀損し第三者を錯誤に陥れた罪に問はれ宴會常例大慘狀に依り一夕設宴を催ふし當日の出席者一同を招待すべしと八木名判官より宣告を下された。其の際岸さんはあれは筆者の誤りでなく永樂町人の修正が若しくは活版屋の誤植であると抗辯したけれども被告の申立不相立、二三の辯護人より不景氣の折柄でもあり岸も四十になればたまの蓄の貯金が此の年になつても一向たまらぬと云つてゐる。事實はP. 位だから暫らく執行猶豫の恩典に浴するやう哀訴嘆願に及んだ、然るに一度でも數多く岸さんの御顔を拜みたいと念じてゐる傍聽人の藝妓仲居さん達は大不平、神聖なるべき法廷で辯護士排斥の奇聲を發する始末裁判長は沈潜良久しふして嚴かに被告の人格才能は鮮銀理事の大器であり最適任者である事は内外の認識する所であるから早晚之が實現するに相違ない、際限なく長く待つと云ふ譯ではないから其折まで執行を猶豫するで判決確定。此上は岸さんの理事應任に依り賓客として盛宴に臨む日の早から串んを祈つてゐる。

峰岸清之氏主宰

拓務評論

月刊一部十五錢

獨 語

事になるであらう。今や旭町邊にも面白き對照物が岸山ある。薄利多賣は古き文句である。薄利多賣

たならば左團次や梅幸が果して今日
の盛名を劇壇に恣にする事を許
さなかつたことと想像せられる。
世に眞個不老の薬があるならば
岸さんをしていつまでも二、三十

謂ひ知れぬ快味があるものと見
て中々一目を譲歩せず過去の記録
などは御存じないものゝ如く嚴然
として三日を要求し勝敗は全く度
外視してゐる所など稚氣大に愛へ

拓務評論
月刊 一部 十五錢

獨 語

浦田多喜人

(三巴酒造合名)

喉元過ぐれば
緊縮問題も遂に國民に徹底せぬ
只失業者が生活の困難に徹底して
居ります。眞の裸賣りと云ふ聲を
聞くさい實に憐れな話である。

關東の大震災の時灘澤先生は
天譴なりと言はれた。其時の人心
は實に緊張したものでありました
化粧した婦人を見れば酸ぐれく
と云ふものありしが僅か半年た
ずに忽ちモトへ逆戻りしました。
この頃の婦人の驕態は實に憤慨
に堪へぬ。

主人が社會の爲とは言ふものゝ
實は我生活の安定を計るに一生懸
命に奔走して居るのに、嬢左工門
殿は何婦人會とか何慈善會とか、
イヤ音楽の、藝術のと内を外に
して奔走して居ます。家では子供が
がやぐと騒ぐ。主人が歸宅して
も夕食の仕度もしてないと云ふ有
様。主人は生活の爲めに奔走して
居るのに嬢左工門は金を浪費する
爲めに奔走して居る。ブルジョア
の奥様は別としても、それ以下の
嬢ア連が追従して何の寄付金とか
何の會費とか云ふて金をパツパと
濫費する(但しこの處山の神には
極秘々々)

喉元過ぐれば熱さを忘れて...

今の世相

面白き顯家とでも云ひたいが多
眠し居る人、緊縮に目覺めて新時
代に順應する人...

一は私方は老舗であるとして全盛
時代の賣價を維持して居れば、一
方は新時代に順應すべく新しい美
味なる品を老舗の半額で、しかも
迅速に氣持よく配達するの、舊
式の老舗は不味なる物を高く賣つ
て平氣で御座る。新人は新しいも
のを好み舊人も新しいものを好み
老舗は自然門前雀羅を張ると云ふ

貧乏問答記

金華山人

○或席上で平壤の福嶋莊平氏、
『民政黨は苦節十年で天下をとつ
たが俺は貧節十年にして、猶ほ未
だ春日麗光に浴する目度があつた
い...』としみじこぼした。

○スルト座に新田大朝子あり、
『貧節忍苦十年の御感想は?』と
お職務柄チャイナリスト氣分を出
したものだつた。

○と、福嶋氏憤然として、『ウ
ン、俺もくたびれたネ。何にしろ
坂の中で動きがとれなくなつた
大八車を、後から双手で支へて居
る様なもんさ。押手を緩めれば車
が逆か落ちして轢き殺ろされさう
だし、さればといつて何んなに押
したつて車が坂を上れさうでもな
し、交通巡査には怒鳴られるし、
全く油断もすきもあつたもんぢや
ない。徳川家の家訓には重き荷を

事になるであらう。今や旭町邊に
も面白き對照物が澤山ある。薄利
多賣は古き文句である。薄利多賣
では今は世人は承知せぬ、品質を
精選して而して技術を加味したる
ものを薄利多賣せなければ立行か
ぬ。もしそれ安くは賣らぬと言ふ
て居れば顧客は段々左向け左で
きます。武士は喰はねど高揚子で
は一日も生きて居られぬ。なんと
田舎作ドン働くより外に道はあり
ませんかな。
或人曰く、腫物を切開して漸く
膿を出し未だ全治せざるに又口を
嚙きたるが如き緊縮振では折角の
醫者の手術も何の効もなし、今の
世相はこれであると。賛成!

負ふて遠き路を行けるからまだ樂
だよ。自轉車、自動車、オートバ
イ、などの行き交ふ眞唯中に、ツ
イツと丹田に氣を凝らしつゝ、坂
の途中に觀念の眼をつむる事方さ
に十年なんざア少々罪が深か過ぎ
るよ!』

○丁度傍に徳野眞士氏あり『即
座にそんな比喩が湧き出す程の智
惠者が、何うして貧乏するだらう
か?』

○福嶋氏喟然として歎して曰く
さ。『ソコだよ、何うも貧乏の智
惠は亦別らしいね!』



マサリツク

泉 哲

(城大法文學部)

【一八】

であらねばならぬ」と。古來哲學者は賢人(哲人)のみが國を支配するの資格ありと説き、賢人と君主を同一視した事があるが、マサリツクは實に賢人であり且つ眞の政治家である。

◆南山町閑話

漢 江 漁 郎

○京城の大先輩山口太兵衛翁は鐵砲と碁とが唯一の道樂である。

○鐵砲の方は、三挺もあつて、折々手入れをしてゐるが、近年鳥打に行くやうなことは、殆んどないらしい。

○「碁は、いいものだ。心が靜かになる」といつてゐるが、この方も餘程いと相手と、その時の氣分でやるので、一年の中旬に對することは、二度か三度……。

○どうしてその日〳〵を暮らしてゐるかといふと、少々庭いぢりをするか、然らざれば、肅然と書齋におさまつて、好きな漢籍を默讀する。讀書は、老來非常に好きになつたらしい。

○話好きの翁は、好んで客を引いて、いろんな談話をするが、唯だ主人非常にお行儀がよく、いつまで経つてもチャンと正座し、洋服のお客様にも、トント「お平らに」とはいはない。高談三時間―それを拜聴して、すつくと起つと大抵なものが、眼がクラクとして、トスンと尻餅を突く。

○翁曰く、「今の若いものは、トント柔勢で……」

○因に、南山町の今の邸宅は翁が自ら設計し、且つ監督して作らせたもので、中々の御自慢らしい。

現代世界の偉人は誰であるかと質問せらるゝならば、先づ第一にチエツコスロバキヤ國大統領マサリツクを擧げねばならぬ。氏は一九一八年十月、新國家が組織せられた時、六十八才にて大統領に選舉せられ爾來今日迄十二ヶ年間其職務を完全に果し、今後も猶其任務を繼續すに足る健康と活氣と國民の尊敬とを有してゐる。本年五月七日に八十回の誕生日を迎ふる。うだが肉體と精神の上に高齡の影響は微塵も見へない。毎朝早起して冷水浴し、輕き朝食後二時間乗馬するを慣例としてゐる。そして精神的勢力は壯者も及ばない。

彼は埃國モラビヤの御料地に於て御者の家庭に生れ少年時代銀治屋に奉公した、仕事の餘暇に勉強して學校教師となり、更に進んでヴィン大學の教授となつて長き間哲學を講義してゐた。一時埃國の代議士となつたが大戦中政府の忌避に觸れ海外に避難してチエツク人の糾合を策し、聯合諸國の承認を得て獨立國家を組織して第一回の大統領となつた。

一九一四年十二月、マサリツクは獨立運動を開始する爲に私人の資格にて海外に赴いた。當時故國に於て密に運動してゐた數名の同志を除き彼を後援するものがなかつた。多數政治家は未だ歸趨を決し兼ね、只露軍のブラグ占領を希待してゐた。そして民衆は沈黙の

態度であつたが、チエツク軍は埃國の爲めに戦ふを厭ひ、全部が埃軍を脱走した。併し國內及海外のチエツク人は何等の組織なく、露國在住の多數チエツク人はマサリツクに敵意を有してゐた。斯る状態の下にマサリツクの成效は覺束なかつた。併し彼の忍耐と不休の努力は遂に勝利を占めた。海外に散居せるチエツク人は國民會議を組織し、續いて強國に依つて政府の承認を得た。埃軍脱走のチエツク軍人は新政府の軍隊となり、國民會議は一九一八年十月十日ブラグ國民委員會をジネーヴに於て組織した。二週間後の十月二十八日ブラグに於ける埃國の權力を流血なしに驅逐してチエツクスロバク共和國が生れた。

マサリツクは國家を組織し、國政を総攬するに當つて道徳と宗教を基準とした。彼の民主主義も亦是に胚胎する。大戦後歐洲の數國に獨裁政治が行かれたが、チエツク國に於ては國民革命委員會と國民會議が國民の統一と國家組織に充分であつた。革命の當初彼が海外に於て奔走中或は獨裁者を置かねばならぬやを疑がつた事もある併し其出現なしに済んだのも彼の民主主義に負ふ處が多い。

彼は嘗て云ふた事がある。『道徳的基礎を有せざる國家や政策は決して成效するものではない。而して政治の倫理的基礎は人道主義

服裝漫筆

服に白の附屬品ならば、クツキリと浮き出し、他の如何なるものよりもノーブルな感がある。

併し黒と白との配色の妙を心得

に於て密に運動してゐた數名の同志を除き彼を後援するものがなかつた。多數政治家は未だ歸趨を決し兼ね、只露軍のブラグ占領を希待してゐた。そして民衆は沈黙の

民主主義に負ふ處が多い。彼は嘗て云ふた事がある。「道徳的基礎を有せざる國家や政策は決して成效するものではない。而して政治の倫理的基礎は人道主義

○翁曰く、『今の若いものは、トント柔弱で……』
○因に、南山町の今の邸宅は翁が自ら設計し、且つ監督して作らせたもので、中々の御自慢らしい

服装漫筆

岩 鶴 嘉 雄
(丁子屋洋服部)

い。

或夜會に招かれたミスター、ソー、アソド、ソー、服装はと、招待状を見ると唯ブラックタイとしてゐる。早速新調の燕尾服に黒の蝶ネクタイで出かけた處、他の客は皆タキシードを着て來てゐる事がわかつた。其ばかりか先生すつかりウエーターと間違へられたと言ふ話がある。何故であらう?

七八年前と云へば可成以前の事であるが、其頃黒のアルパカ上衣に白セルズボンの全盛時代があつた。夏服の九十パーセントはこの服が占めてゐた。併しあれは特に日本だけの流行であつたらしい。元來アルパカは裏地の生地であるが、併しサラツとしてゐることと簡単に仕立て得る點で夏の上衣に申分ない生地である。併し弾力性がない爲め、ズボンには不適當である。其處で其地のズボンのかわりに白セルズボンを配して見ると仲々いい。暑苦しい黒に白を持つて來ると反對にスッキリとした感が出て來る。等々の理由でアルパカ大流行となつて來た譯である。

服に白の附屬品ならば、クツキリと浮き出し、他の如何なるものよりもノーブルな感がある。
併し黒と白との配色の妙を心得てゐるのは單に西洋人ばかりではない。或は我々日本人はソレ以上かも知れない。黒紋付に白襟を用ひるのは正式とされてゐるが、黒アルパカの上衣に白ズボンまではまだいゝとして、黒の三ッ揃ひは十數年來愛用されてゐる。併し黒い服を日中着るのは日本と伊太利とだけかと思ふ。伊太利人が黒い三ッ揃ひを着るのは或は黒シャツ黨の影響からかも知れないが、兎に角日本人も黒が好きである。黒の脊廣だけで納らず黒いネクタイを愛用したがる癖がある。家庭經濟の見地よりする時は黒いネクタイはよこれが目立たず、至極都合が良いが、人生の無常を服装で現はす積りなら兎も角もこれでは餘り沈み過ぎてゐる。

併し歐米では葬禮用の黒長ネクタイを平常着に用ひるのはまだしも、最も華かなるべき結婚式の、しかも花嫁が新調のモーニングに黒ネクタイを結んで納つてゐるのを見受けることがある。これでは餘り可哀想である。
尤も結婚は戀愛の墓場の積りなら兎も角も。

菊池長風氏著

朝鮮雜記

全十卷完成
一冊壹圓半
五月下旬第一卷
發行、以後三ヶ月毎に續卷配本

併し日本人の洋裝なるもの、中にはウエーターに間違へられ得るプロバビリティーの多分にあることを發見する。

尤も洋服だからと云つて何も毛唐其の眞似をする必要はないと云つてしまへばそれまでである。併し日本人獨特の洋裝を見て見るのも、あながち無駄でもあるま

併しアルパカ服にも流行を超越しての流行力は無かつたと見えて獨特の光澤や最初人氣をとつたサラツとした肌觸りが却つてゴワ／＼するとか着た時の線が固いとか云はれるようになって、今日では殆んど夏服の中に見えなくなつてしまつた。

アルパカ上衣と白ズボン風に、黒に白を持つて來る事は配色の點で最も容易であり、成功である。西洋の男の夜會服は燕尾服でもタキシードでも總て黒と白の色が配してゐる。どんなに精巧に出來た柄合でも電氣の光の下では、一こゝ見榮えがしない。この場合黒の

田舎風俗 見たま

小田省吾

(城大法文學部)

先日或る調査で黄海道の片田舎へ旅行して居る中に田舎風俗の漸次變化しつつあるを感じた。今その一二を記して見よう。

昔は朝鮮人が鶏を十數羽以上も棚に入れて之を背に負ひ市場に運び又賣りに歩いたのが、今は此の鶏棚を自動車の後付に付けて飛ばし行く。そうかと思ふと今度は彼の鶏棚と全く同形のものも背負ひ、其の内にはタオル、齒磨、石鹸、タオシ、婦人の櫛等日用品並にお菓子などを容れ、手には呼鈴を握りつつ田舎の村落をば此からそれへと行商しつつあるものも居る。之も従來見なかつたところである。最も奮つたのは、信川街道で見受けたのであるが、我々もフォード乗合自動車に乗つて行くくと、向ふから虎皮を屋根の上を覆ふた一臺の同じ型の田舎自動車がやつて來た。不思議に思ふてよく／＼其の内を見ると美裝した花嫁とそれに附添ふ人々が乗つて居つた。即ちこれは普通ならば虎皮を輿の上に置きゆう／＼とねつて行くのを、何分スピード時代であるから自動車に乗り、虎皮を其屋根にしぼりつけたのである。但し其の虎皮は眞の皮ではなく虎の皮の形をおいた朝鮮毛氈であつた。

見聞話 江湖百話 千山歌房

○近年富田儀作翁のころへ、いろ／＼の名儀で、書を書いてくれと依頼するものが多

い。○始めは、「滅相もないことだ。ウツカリ書くと、恥をかきます」と、體よく謝つてゐたが、どうしても謝絶出來ぬ向もある。

○ソコで、翁も「これア不可ん」と感じ小閑を利用して、ちよい／＼書の稽古をする。あゝいふ人だから、忽ち雅味のある書體が出來て行つた。

○それを、ドコで聞いたか、大阪の舊知の某實業家、「是非自分にも一ツ書いてくれ、袱紗を送る」……袱紗ならタイしたところもあるまいと、承知の旨を答へると、不日送つて來た小荷物、開けて見ると……何んと袱紗六百枚！。翁今更ら愕然として、「これア不可ん……ふた月かゝる」

× × ×
○鮮銀支配人古田氏……ツイこの間まで整理課長として、一流の峻烈さで、縦横に腕を揮つた。

○某實業家悲憤骨髄に達し、「ヨシシ、今日こそ彼奴をブン躡ぐつてやらう」と、勢ひ猛に彼の部屋に突進し、いきなりニヒ一ツと拳固を鼻の先へ……。そして、「絞られるだけ絞られて、今はもう骨ばかりぢや。一體骨を絞つて、何が出ます」、スルト相手は、一向平然たるもの、眉毛一本動かさず、「カルシウムがとれます。しかもそのネダンは、なか／＼馬鹿にならぬ」

○蕪度胸の上さには、某實業家も、ホト／＼參つてしまつた。そしてだん／＼胸を割つて話して見ると、なか／＼愉快なところがある。近ごろでは、「ウム、奴か……。奴は思ひの外え」とがある」

蛆がわく

人が巧に値切つて行くのを眺めて切齒扼腕するが値切る事が正しくないと思ふと云ふ觀念が悪いのだ。結局高いものをつかまされたと思ふだ

にしぼりつけたのである。但し其の虎皮は眞の皮ではなく虎の皮の形をおいた朝鮮毛氈であつた。

「参つてしまった。そしてだん／＼胸を割つて話して見ると、なかく愉快なところがある。近ごろでは、『ウム、奴か...。奴は思ひの外えい』とがある」

蛆がわく

野崎眞三

(朝鮮新聞社)

男やもめに蛆が湧く...四月の初から妻が十二支腸虫で赤十字病院に入院した。ホンの一週間か十日の豫定が十二支腸虫驅除後に助膜炎を併發し熱が下らないので退院處でなく注射だレントゲンだと騒ぎ續けて四月も過ぎ五月に入つた。熱は幾分下がつたらしいが二十日になつても退院は出来なそうである。

妻の入院前にオモニイか下女を雇ふと云ふ話もあつたが家庭の中に見ず知らずの他人が入る事は精神的にも氣まづしい經濟的にも無駄が多くなる。殊にいけないと思ふのは他人のエゴな感情の前に三人の子供の弄ばれる事だ。それだけでなくも人一倍イタツラな子供達に母親に變らない真心を抱いて呉れる人などある筈がない。其上に私の所謂獸人的な氣持、他人を警戒して絶へず四角四面であらねばならぬ氣持から他人は雇ふまいと決心して入院當日から三兒の始末は男手でする事とした。朝起きて飯を炊き味噌汁を造り掃除を済まし朝餉の膳に向ふ。辨當を詰めて二兒は學校へ出す、鍋釜の始末をなし十時三時の間食から中食の用意をして老いたる妻の父親に留守を頼んで出社、午後三時か四時には歸宅して温泉を焚き風呂を沸かし晚餐、台所の跡始末をして寢床を敷いて二階の自分の寢床を敷いて腹這ひになつてヤレ〜一

日の仕事が終わつたと思ふ。酔酌も量を減じてゐるので此寢床に腹這ひになつてからジョニウオオカーかオウイト、ホースを二三杯嘗める。そして雜誌類を讀み耽けるのが唯一の慰めとなつてゐる今日此頃である。身邊は勿論何處も彼處も眞白な埃、氣が付いて掃除しても家中は雜然。未だ五月人形も飾つた儘、洗濯ものは風呂のあとでしてゐるが男の子三人の肌着類だから洗濯が間に合ふ筈がない。學校へ行く子供の運動シャツの薄汚れをマザ／＼眺めて泣きたくなる。軍隊生活の体験から身の廻りは手一つで出来ると云ふ自信から元氣で此四十余日を押し通して來たが一家五人の始末に弱つた。男やもめに蛆なぞ湧かすものかと思氣込み續けて來たが運動シャツやハンカチにアイロン迄は當てられぬ。イヤそれどころでなくシャツの縫ひを縫ふのさへ此上もない苦痛だ。堪らなくなつて内地の母を呼ばふかとさへ考へてゐるが悪い時に老いたる母を呼ぶでもないと一身に堪へてゐる。矢張り男やもめには蛆が湧く。

一番弱るのは總菜の胃出した。社から歸つた頃には最う魚屋も野菜屋も來ないので花園町市場へ出て行くが、前日の比較、カロリー値頃、組合せ等に心を遣ふのは私には細か過ぎる。そして値切る事の出来ない私が傍の奥様風の女の

人が巧に値切つて行くのを眺めて切齒扼腕するが値切る事が正しくないと思ふ。觀念が悪いのだ。結局高いものをつかまされたと思ふだけの不快を味はされ續けてゐる。嬉しいのは隣人の親切で、私の前に日の出小學校に出てゐる赤津基氏が居り、近所に煙草會社の廣田氏が居る。兩家の夫人の心盡しには何時も感謝の涙である。或る遠足の日、早起をして海苔巻を造り上げてゐたら兩夫人から子供達へと遠足の辨當やら菓子やらを頂戴した。子供達は三軒分を頂戴と云ふ挿話もあるが遠い親類より近い他人と云ふ言葉の意味を強く感じた。

こんな状態なので諸種の會合は一切遠慮してゐるが特別なものは子供達の晚餐を早く済ませてから出た。出ると酒好きな私は憤んでゐながらも遂々度を過ごし深更俣で歸つた翌朝の台所仕事は辛い啞んだ事のない仁丹が何時の間にかポケットに用意される事となつた。辛い悲しい呪はしい春から初夏を呪ひながら男やもめは蛆に泣いてゐる。

京城雜筆の原稿をと云はれて原稿どころではないと考へたもの、男やもめの泣言なら書けると思つたのが此一篇。

(一九三〇、五、一八)

月刊俳誌

「壺」

發行所 京城
黄金町五ノ七

めぐり合ひ

小川 蕃

(城 大 醫 學 部)

【三】

出すんだからね」

その女人に、もう年をとつたその女人に、私自身が此の京城で逢つたのだ。私は外科醫師として、彼の女は患者として。然し乳房には何の刺青もなかつた。

左柳の其の後については私は知つてゐる。然し書くことはやめにする。

飛行機閑話

金 華 山 人

○朝鮮土地經營會社の末森専務は別嬪で賢夫人の譽れ高き奥さんが、『アナタや！是ればかりは思ひ止まつて下さいな』と切なる諫止も聞かばこそ、『ナニ今頃飛行機を危険視する様では頭が古い！總てがスピード時代じや、お前もモウ少し若返つて呉れんと困るがナ』、そして四月八日の朝悠々と福岡へ飛んだ。

○朝七時汝矣鳴出發と云ふので六時頃から専務の壯學ヲを見送らんと忠實な數千名の社員や貞淑な夫人は汝矣鳴に集つた。あつ暗れ洋行氣分で専務の上々機嫌、頗る御満悦！

○ジャスト七時、飛行機は爆音勇ましく鮮かにスタートを切り、間も無く遙か南方雲間に消え去つた。奥さんは心配しながら家へ歸り、ヤレタ々とお茶を召し上つてゴ坐ると電報が舞込んだ。發信局は福岡、愛する旦那様からだ。『ブジツイタアンシンセヨ』、奥さんもお嬢さんも電報を取り巻いて急に飛行機禮讚。そして、お父うさんを褒めちぎる。『矢ッ張り内のお父ちゃんはい偉い々々』

もうかなり昔の話になる、少年の自分が詩人晩翠を慕つて、わざわざ森の都、仙台二高の試験を受けて、高等學校の生活にはいつた時代の事である。

その頃盛り場であつた東一番町に小さな寄席があつた。その寄席に左柳といふ怪談師がかゝつたと云ふ事、そこには刺青をしてゐる美しい女藝人が一座してゐると云ふ様な評判が、風のたよりに寮舎にも傳はつたのであつた。

それは、試験前の、冬に入る前の寒い頃であつたが、寮生は黒い『マント』に身をつゝんで、寄席に出かけたのであつた。左柳と云ふ男は思つたよりも若い様に思はれた、『パツク』には黒い布が垂れてゐるだけ、そして柳の様な不思議な樹が、一本舞台の左よりに立つてゐる。雨がしとくと降つて居り、蛙の様なものが『ギーギ』泣いてゐるのだ。

その舞台に左柳と云ふまだ余り年をとつてゐない男が素面に出て来て、一寸次ぎの場面の説明の様な道化を云ふのであるが、其の道化には少しも可笑しさを感じなかつた。泣き笑ひと云つた様な感じを受けるのであつた。

彼はよく『金持ち人』『貧しき者』と云ふ様な言葉を使った。

『ボーン』と鐘がなる——編輯に『モーニング』の紳士が柳のある舞台を通る、雨がザーザー強く

なつて来る。ギー／＼泣いてゐた蛙の聲がいやな怖ろしい呻き聲に變つて行く。それが纏て瀬戸物を破る様な冷たい笑ひ聲になつたりするのだ。紳士が通つてしまつてみすほらしい百姓が同じ舞台をとぼ／＼と通る。蛙の聲がだん／＼細くなり啜り泣に變つて行く。雨がしとくと降る。こんなのが彼の舞台であつた。いつも一人二役をとるのが彼の常であつた。

彼は怪談師と云ふ看板であつたけれど、誰も彼から怪談を聞いたものはなかつた。ともすると、あいつは社會主義者かも知れない。寮生の間に評判になつた。

それからいつも最後に舞臺に現はれて義太夫を語る若い美しい女人の乳房に編蝨がはつてあると云ふ事をもつと／＼大きな評判になつた。寮生の幾人かは試験も忘れて舞臺裏の室に彼等をたづねた。

左柳は學生達と色々な話をしたリープクネヒト、ローザなんか云ふ名を彼から初めてきた學生も多かつた。

彼奴は社會主義者よりもつと怖ろしい奴だ。

寮の學生はよく話し合つた。怪談師左柳は舞臺裏で學生達に話す事があつた。

『あれの乳房には美しい編蝨がほつてゐるのです。乳房に血が通ふ様になると、それが青黒く光り

東京飛行記

一つぐらゐは出て来やうではないか。そこで失禮を願みず首の根の力を抜いてゴクリ／＼をやつたも

者」と云ふ様な言葉を使つた。
「ボーン」と鐘がなる——絹帽
に「モーニング」の紳士が柳のあ
る舞台を通る、雨がザーザー強く

話す事があつた。
「あれの乳房には美しい蝙蝠が
ほつてあるのです。乳房に血が通
ふ様になると、それが青黒く光り

んもお嬢さんも電報を取り巻いて
急に飛行機禮讀。そして、お父
さんを褒めちぎる。「矢ッ張り内
のお父ウちゃんはいいヌヌ」

京

城

雑

筆

東京飛行記

笠神志都延

(京城日報社)

東京へ飛行機で飛んで行つた。
朝の六時に京城を立つて夕方の六
時には東京に着いた。自宅から
宿屋まで十二時間しかかからぬ。
大阪から電報を打つてシートを買
つて貰つて置いてその夜は東京劇
場で芝居見物だ。京城日報學藝面
によると待合で一ぱい押し召す決
心の臍を固めて行つたやうに書い
てあるがそれは誣告だ。歸りに銀
ブラをやつてカクテルに有り付い
た位のこととは事實有根でないこと
もない。

宿屋に着くと女中が且那お荷物
は？といひやがる。荷物？荷物は
これだといつて握り太なる籐のス
テッキを逆しまにして象牙の握り
を突き出してやつた。ヘエーとお
どろいて居る。驚ろくがものがあ
るか。荷物がなないと宿屋に泊めぬ
警視廳令はまだない筈だ。宿料さ
へ拂つたらそれでいいだらうその
宿料なら……といふので内かくし
の紙入を觀念の臺上に載せ來ると
さアしまつた。空中には朝鮮銀行
も釜山兩替場もないんだから内容
はすべて總裁加藤敏三郎發行する
ところのそれだ。加藤總裁はもと
鬼總裁といはれる。鬼なら地獄だ
地獄の沙汰も金次第といふが通用
せぬ金でけ仕方がない。それにし
てもよくぞまアこれまで気が付か
ずにやつて來られたものである。
鳥飛線を直徑といふ。飛行機は
あくまでこの直徑をたどる。汝矣

島から太刀洗まで一直線だ。幾何
學的に一直線だ。脇目もふらずに
一直線に行く。蔚山を過ぎると玄
海洋だ。玄海洋は四海被極めてお
だやかなものだ。見て居ると汽船
が通つて居るのが分る。まことに
可憐なる浮遊動物だ。黒い煙を吐
いて白い泡を立てて乙に氣取つた
ところが滑稽そのものである。

小ざかしげに煙など吐きいも蟲
のはふごとなる二千トンかな
沖の島から九州の空に入ると菜種
の花の芳香が鼻を衝く。いはば香
水の霧の中を行くやうなもの。將
來はこのへんきツと香の名所にな
る。目を以て見る名所は機上から
すれば千萬無数でいづれを吉野と
も立田とも定めがたいのだから、
これからは香の名所が發達するや
うになる。空輸會社も心得たもの
で某線の空は昨今鈴蘭の香氣由々
しくてとか某山の上を巡回すれば
ライラツクの香り今を盛りとか宣
傳し來るに相違ない。

汝矣島から太刀洗まで三時間、
太刀洗から木津川まで二時間半、
木津川から立川まで二時間二十分
大阪から東京までタツタ二時間二
十分、ヘエ早いものですねといふ
うべなりまことに早いものには相
違ないけれども二時間二十分は何
いつても二時間二十分、一時間
以上同じ焼ケ岳を見せられたり更
らにそれ以上も端嚴なる富士山の
前にすわらされると大たい欠伸の

一つぐらゐるは出て來やうではない
か。そこで失禮を顧みず首の根の
力を抜いてコクリ／＼をやつたも
のだが、それを同乗の客が買ひか
ぶり、立川から東京までの自動車
中であなたはこれに度々お乗りで
せうなアとやられたには微笑さ
せられた。ロクに動きもせぬ機上
に十時間も無言の行をつゞけて居
ればその人が病狂でない限りねむ
たくなるはずである。いはんや名
所だらけ勝地だらけの上を飛ぶの
だから少しは退屈するのがあたり
まへでなければならぬ。

機上で談話が出来ないといふが
出来ない事はない、官廳學校へ行
つたよりは遙に立派な會話が出来
る。木津川尻から飛び上つて大和
から伊勢へかゝると雪をかぶつた
圓錐形の富嶽が左前の窓に見える
指の先がまづその窓わくに動いて
そうして隣の客の目の中へこちら
の目から？を射込む。すると隣の
の客は案内記か何か膝の上でしば
ぢくまざくつて居たつけ。こちら
を向いてヤ、キ、ガ、ダ、ケと舌
唇しきりに動く。焼ケ岳オーライ
こちらの顔の先が大きく二ツ三ツ
おのれのタイを打つ。これで會話
は終了するがお互ひはそうして絶
大なる満足なる感情を全身的に表
現してしまふのである。

飛行機の旅行といつてまアこん
なもの、妻子と水盃をやつて出掛
けたり保險證書を改めて細君に渡
して家を捨てたりしたといふは、
いふに罪はないけれどもひそかに
これを思へば虚飾にあらざれば誇
張、ヨタにあらざればペテンであ
る。病狂者にあらざるよりは考へ
ても見られぬやうな手品である。
この記事を讀まんほどのもの、必
ず飛行機に召したまへ。

公明なる社會を造れ

渡邊 信治

(京城師範學校長)

一 專制政治の下には兎角陰險政治が行はれる、強制と束縛のある社會には、暢達自由の生活はなく、共榮共存もあり得ない。かくの如き治下にある國民生活は陰鬱にして暗黒である。

二 國家は歴史の精髓を尊び、且つ各個性の發達を重んずる事によつて、合理的の發展が行はれるのである。これを外にして社會改造の道はなく、共榮共存の理想はない我等の祖先は多年武門政治の壓迫の中にあつて、暗黒政治を續けて來たのであつた。然るに星羅り時代り、畏くも 明治天皇陛下御即位に際して五ヶ條の誓文を發せられた、その一章に『舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし』と宣はせられた、宏大な大御心のほど誠に感激の至りに堪えない。

三 世に處する道は、あくまでも天地の公道に基かなければならぬ。政治に於ても、經濟に於ても、教育に於ても、總てが公道によつて處理されねばならぬ。立憲自治の政治は畢竟公道の政治に外ならぬ。然るに我が憲法發布以來茲に四十年、兎角政治に公明を缺き易く、社會は何となく不安で落ち付かない。人心は動搖し、情實は到

る處に纏綿し、裏面的な策謀は隨所に跳梁を極め、世は益々俗化せんとする状態である。この點に關し我が朝鮮内に於ても將來大に反省を要すべきものも少なくないと思ふ。

四 我々は維新の宏願に則り、舊來の陋習を破り、天地の公道に基いて社會を公明に導かねばならぬ。予は外遊中、歐米人の社會が如何にも陽氣であり明るい零團氣内に生活してゐる有様を見て、眞に羨望に堪えなかつた。

予がロンドンに滞在中、『米國繁榮之秘訣』(Secret of American Prosperity) といふ一書を英人から見せられた事があつたが、これは或る一英人が米國に渡り、『何故に米國は繁榮するか』を洞察して書いたものであつて、『米國には情實が極めて豊し』と云ふのが書中の要旨であつた。由來英國の國民は性情に走りず、頗る沈着で然も割合に合理的である。其の英人をしてかく言はしめた、彼等米人の生活たるや、意外にも良い所があると思つた。『情實を少くするところに繁榮の基が開かれる』と論斷せられたのは、實に同感を禁ずることが出来なかつた。

五 合理的の社會には天才も出で、

【二四】

大智大徳の人が重んぜられるが、情實の社會には小人鼠輩が跋扈する。然る我が國情に觀るに政治界の裏面といはず、實業界にも、教育界にも、あらゆる幾多の社會を擧げて情實の奴隸たるの感がある。偶々天才正義の人が出ても、眞面目なる求道の士があつても遂には失意孤憤の境遇に泣かざるを得ぬと云ふ状態で、眞に深憂に堪えない。

六 吾人はよろしく純理純情を尊び常に天地の公道に頼りて邁進すべく努めなければならぬ。同黨異伐を好み名利權勢を争ひ、主義もなく主張もない盲目的感情の抗争を事とするが如き醜態の至りである。

七 吾人は最も正しく、最も明るく最も強く所謂公明なる社會建設に向つて最善の努力を致さねばならぬ。

◆集會所閑話

三木 一彦

○銀行集會所では、この頃珍らしく將棋がハズむさうだ。
○鮮銀の色部理事が強いし、十八銀行の井上支店長が、またなかくやる。漢銀の堤事務も、一方の旗頭とある。
○それに加藤鮮銀總裁が、將棋に趣味をもつてゐるし、一方有實殖銀頭取は、將棋もまた、峻烈無双の手法をもつてゐる。
○これらのお歴々の對局——殊に傍觀者の騷次は、頗る非常に振つたものだらうな。

◆江湖聞見記

北漢山人

い。然るに我が憲法發布以來茲に
四十年、兎角政治に公明を欲き易
く、社會は何となく不安で落ち付
かない。人心は動搖し、情實は到

つた。
五
合理的の社會には天才も出で、

双の手法をもつてゐる。
○これらのお歴々の對局——殊
に傍觀者の彌次は、頗る非常に振
つたものだからな。

童話

濱口良光

(敬新學校)

私の近頃よんで面白いと思つた童話

外國の大黒様であるドモウオイ：あるドモウオイが
金持の穴倉に住んでゐて澤山の金を蓄へましたが、或
時一寸長い旅に出なければならぬ事になりました。

ドモウオイは差當り金の藏し場所に困りました。
あそこもいけない、こゝもあぶない。では番人を。だ
が信用すべき者が無い。ふとドモウオイはいふ事を考
へました。それは有金全部をこゝの主人にやつてしま
ふことです。ドモウオイは早速主人の前に出て、今度
長い旅に出るについては有金全部をあなたに差上げた
い。だがそれについて一つ御願ひしたいことはもしあ
なたが死んだならば又その金(若しあつたら)を返し
て貰ひたいと云ひました。この話をきいた主人の喜び
やうつたらありません。ドモウオイの手を幾度か振り
果てはキツスさへして無事に行つて來なさいと云ひま
した。

ドモウオイは水々と旅をつづけて幾年振りかかて歸つ
て來ました。主人の家のドアには錠がしつかりとかゝ
つて居ました。ドモウオイは勝手手のわかつてゐる裏口
からはいつて行きました。ホコリだらけの座敷の隅の
大きい金箱の上に獨り者の主人は白骨となつて横つて
りました。金箱の中のドモウオイの金は一厘も減つて
りませんでした。ドモウオイは忠實な番人に幾度も感
謝しました。

日當りのいゝ小鳥屋の店先の金網の箱の中でリスは
朝から晩まで一所懸命に車を廻してゐました。それを
山雀がのぞき込んで、『リス君、君は朝から晩までど
うしてそんなに一所懸命に走つてゐるのかね』とき
ました。するとリス君はなほも走りながら『君なんか
にや分らないさ。僕はさる王子様の密使で急いでゐる
んだ』と云ひました。

江湖聞見記

北漢山人

○全北内務部長の安藤巖一氏
は、人物が出來てゐる割に、一向
浮ばない。實に氣の毒だといふ評
がある。

○禪をやつた人で、寡黙沈深、
思慮もあり、力量もある。それに
最後の體劇に於ても、敢て人後に
落ちぬ腕ッ節を持つてゐる。

○ツイこの間のことだ。何とか
いふ記者先生が、一杯機嫌で、ド
テラを羽織つて、道廳へ乗り込み
氏を捉えて、何とか彼とかゴ記を
並べる。いゝ加減にあしらつて、
知事室へ行くと、ソコにまた顔を
を出して、知事を捉えて、グズ
くいふ。流石にムツとした安藤
氏いきなり首筋をとらえて吊り上
げ、片手でドアをあけて、ポーン
と廊下に放り出した。何をと起き
直つて、懸つて來るのを、も一度
つまみ上げて、ドスン。

○下僚が驚いて、驅けつけると
『何、何んでもない。今豚が二匹
コ、へ迷ひ込んだでナ』

○城大衛生學の大塚藤吉博士の
部屋には、いつ行つても、何とか
いふ立派な愛犬が、先生の側にチ
ヤンと鎮座してゐる。

○この犬は、どんな醫でも仕込
んであるが、就中恐れ入るのは、
約三ヶ國語に通じてゐることだ。
といふのは、博士は、何んでも獨
逸語をやつてのける。奥様は、英
語を使はれる。女中は、日本語で
交際する。で先生三ヶ國語を心得
注文に應じて、お座り、這い
お出で……何んでもやる。

金融界の名物男

古田と淺川

別府八百吉

(京城日日新聞社)

【二六】

性を鮮銀に永引かしてゐるのは後者のためでないかい』

△「横暴か?、誰だつたか、古田と秘書課長の河口を副總裁格?に見立てたといふが、少しはそんな氣味もあるだらうよ。古田は今の總裁に見出され、瀋陽の支那人から、入つて本店の重要な整理課長につき、實際相當以上の事功を擧げてゐる。親玉の信頼があつて、その信頼があつたために親玉と彼の間に介在する理事を有意か、無意か行務簡捷のためか、省いたらしい事も無いではないやうだ。自分で副總裁格?などと自惚れてはゐないだらう、が、彼は理事の松原や、松田とは、多年友人つきあいで、以前は呼びすての仲だつた。従つて一から十までヘイコラ、でハンコを捺してもらひ所管行務の説明をしないといふ點もあつたらうネ。又何しろ圖体は大きくても、全身神經といふやうに鋭い感受性と、多年行務に銀へ上げ、老來益々その頭は冴へてゐる、なま若い行員などは、テンから馬鹿に見へて仕方がないらしい。そんな事から部下などをビシ／＼やつつける——と云つたやうな點から起つた蔭口だらう、それにどうも毒舌だ、飛行機のプロペラのやうに舌が舞ふ。然し中々事の分つた溫情の一面ももつて居り、随分配下の面倒は見えてやるやうだよ。次にきん玉をつかむといふのは女性的の男のやうに聞ゆるがさうではない。彼にその種の批評あるは、全身神經といふ彼の細心がすべてに氣を配らすからさ。氣がつくのさ。態度と思ひ合はせての見方だらう。彼

×「本店に轉任した、十八銀行の西村が、もう一年京城にゐて、鮮銀の古田對一銀淺川の噛み合ひを見たい、と君に話したさうでないか」

△「僕は、西村と永年昵懇で、遠慮なく語り合つてゐた仲だし、そんな意味の事を云ふてはゐた然し冗談半分さ、唯深刻な皮肉味を藏する西村として又齒に衣を着せぬ彼として口外しさうな事ではあるよ」

×「そんなに、古田と淺川は仲がわるいのかネ」

△「犬と猿ではない、又生前からの仇敵全志ではあるまい。唯、二人ともに我が強い、口が達者だ、云ひたい事は曰はねば虫のをさまらぬ性格だ。鮮銀と一銀を背景に——刀士にしても幕内位の力量のありさうな二人の堂々たる體格の取組、何につけても意見をもつてゐる二人、從來銀行集會所の中心勢力たりし淺川、そこに鮮銀支配人として古田が新しく進出して來た事情、兩人の縁の太い存在——夫等が相反撥し、組み合つた事は事實らしい。有形に無形に二つ三つ兩頭の衝突があつたらしい、と云ふてつまらぬ噂に上るのは、上品ぶる紳士階級の銀行家として、不得策と考へ直した形勢も

あるし、古田としては總裁や理事の思惑もあり淺川は又本店の氣受けも考へねばなるまいからグツと尻の穴をしめて、云ひたい事も控へてゐるらしいし、双方遠慮氣味もあるやうだ」

×「古田はすぐれた男だらうか」

△「非凡な材幹を有してゐるとは僕も思はぬ。彼とは多年僕も知つてゐるし、西村十八なぞよりもズツと遠慮ない口を僕は利いてゐる、彼は行外に敵が多いやうに行内にも敵はある、早い話しがやめた理事の井内なぞは、随分彼から喰つてかかられたものさ、然し、然しだ、何回かの鮮銀の地震に彼は無事だ、無事だけでなく、ズン／＼頭角を現はして來た。之れたしかに彼のドコにか、人にすぐれた力量のある事を示したものと見て差支へないと思つてゐる」

×「内外にアンチ古田熱のある事は、古田の人物を語つてゐると見るのは、乃公も全感だ、古田が平々凡々の男ならば世評に上らず、問題にもなるまい、○○の様な男なら、一銀の支配人にだてをつくり如き事はせぬにきまつてゐるからネ。が、どうも内部の人は横暴とか云ふて批難してゐる、一面又きん玉をよく掴む男ともいふてゐる。彼が生存

が學玉をつかむ流の女性的の男なら、横暴とかいふ評語は出ぬ筈だよ」

上品なる紳士階級の銀行家として、不得策と考へ直した形勢も

てゐる、一面又きん玉をよく纏む男ともいふてゐる。彼が生存

からさき、氣がつくのさ、愈更と思ひ合はせての見方だらう。彼

が學玉をつかむ流の女性的の男なら、横暴とかいふ評語は出ぬ筈だよ」

△「さうかも知れない、所であの口のわるい男が、總裁には心酔し切つてゐるさうだネ」

△「それはをかしい位心酔してゐるよ、僕は時にひやかした事もある位だ、元來非學閥の古田は官學閥全盛の時代から、鮮銀の行員として、實際實力以下の仕事をさせられてゐた。彼の不満はそこにあつたのだらう。が彼の強味も亦そこにあつた事は争はれぬ。夫れを加藤は見出して實力相當の椅子を彼に與へた。感受性の強い彼が感動したのは當然の事だらう。豈一人古田のみならんやで、誰だつてさうさ元山や遠隔の支配人、本店の課長次席、無用の検査役、さう云つたやうな日蔭から、一躍鮮銀の本店幹部に拔かれ難局の整理事務を濡れ紙をばくやうに手際よく片づけて行つた。手ぎはよくといふのは鮮銀のためであつて、債務者にとつては随分容赦のない整理課長であつた、その整理上の手腕を發揮するについで、全身神經の注意力を働らかして立案したのが、加藤の前に持つて行くと、常に少からぬ欠點をも指摘され、八分方白くなつた頭髪を掻いたらしい、親玉はエライと彼れは思つた。仕事の上に於て、兎に角加藤といふ人は超凡の頭腦をもつてゐるらしい。口がよくない連中は鬼なんか云ふが、あれで中々涙があるさうだ。鬼の目に涙といふと變に聞けるが、之れは事實のやうだ。その點に古田は大に敬服してゐる。加藤も亦古田は相當

蘭陵美酒鬱金香
玉碗盛來琥珀光
但使主人能醉客
不知何處是他鄉

(李太白)

支那料理(洋食)

泰明軒

(東京衆議院そば)

使へるし、役に立つと信任してゐる。整理課長より支配人にぬいたなどは、その信任の程度を語つてゐる。古田の支配人抜擢には可なり異議もあつたやうに聞いてゐる。然しそんな事を排除して辭令を與へ、鮮銀本店營業の革新に當らしてゐる。然し又中々總裁と議論もやるさうだ加藤もボロ糞に古田をやつつける事もある様子だよ。然し云ふだけ云ふと、二人の中には相通じてゐるものがあるためか、光風が吹き通すらしい」

×「支配人としての古田は、相當やつてのけるかね」

△「相當以上にやるだらう、鮮銀の本店は破綻曝露以來、手も足

も出さぬ酒極ぶりだつた。鮮銀に縁の近い官廳方面さへ、取引を袖にした實例もある。すべての事がひまどつて抄々しく行かなかつた、これではいかぬと加藤が思つて、古田に旨を含めてゐると僕は信じてゐる。鮮銀の子銀行が殖銀へ走つたといふ實例さへあるではないか、一言にして曰へば鮮銀本店は余りに不勉強で、余りにお高くとまり先年の失敗にこりすぎた、此弊風を破るのは新支配人の古田だ。而して古田のやり方は、何れ金融界の論議をかますだらう」

×「淺川と君は懇意かね、どうも彼はつきがわるいとも云ふが」

△「よく會つてはゐるよ、銀行家

としては朱點を打てぬだらう
そしてよく種々の問題を研究立
論する。よく談ずる方だし。つ
きのわるいといふ感じはあるか
も知れない。然しつきのよい人
よりも、却つてハラは善人かも
分らぬぞ』

×『今業者の受けは余りぞつとせ
ぬやうに聞いてゐるがどうだい
新聞記者からよく曰はれぬやう
な噂もあるし、古田の浅川對抗
はその邊から來てゐはせぬか』

△『浅川は函館で組合銀行の委員
長をして、函館金融界を完全に
リードしてゐたらしい。京城で
も彼は有賀加藤と共に集會所の
理事だ、他の理事が旅行や何か
で多く不在であるため、浅川一
人で仕事をやつてゐる。彼を出
張りのやうにいふのは誤まつ
てゐる。彼は性格が仕事すぎで
あり、世話すぎなのだ、彼は發
言者であり、又裁決者たる事を
以て自任してゐる。彼は自説を
主張するに勇敢である。彼は議
論がすぎらしい、而して異論を
叩きつけるに痛快感を一倍感
ずるらしい。他の銀行の人が彼
をよくいはぬのは事實のやうだ
然し彼が働らいてゐる口を曰は
れてゐるので引合はぬわけだ。
夫れといふのが一銀は朝鮮で最
も古い銀行だが、何といふても
支店銀行だ、京城の集會所は土
地の銀行の人が中心になつて仕
事をするが順當でなければなら
ぬ、そこに彼の釘の出方が目に
つくといふものだらう。そんな
事で前年の銀行大會で、つまら
ぬ新聞記事や、忠告者があつた
りして、浅川も大分鋒芒を包む
事になりつくありはせぬかネ』

×『新聞記事とは？』

◆龜若翁の死

三木一彦

○五月一日の夜、黄金町黄金遊
園附近から出火し、約二十戸ばか
りを焼き拂つた。

○燒死者が一名あつた。

○それが藤井龜若翁であつたの
は、實に意外であつた。

○藤井君の詳しい経歴などは知
らぬが、我々は、一個の蒐集家と
して、君を知つてゐる。たとへば
京城の日刊新聞などは、漢城新報
の昔から、一葉も残さず保存して
ゐる。重なる雑誌もその通りだ。
園藝に興味があつて、あらゆる書

籍を集め、その方の新聞雑誌の切
抜きだけでも、タイしたものであ
つた。

○多分それらのものは、本人の
焼死と共に、悉く灰燼に歸したの
であらう。

○丸々とした、色艶のいゝ、福
々しい好々爺であつたが、斯うい
ふ奇禍で死なうとは思はなかつた
○傷ましい、氣持もするし、一面
人相なんていふものも、餘り當り
にはならんと思ふ。

× ×
○これは、たつた今聞いたこと
であるが、藤井君の細君は、昨年
病死し、以來孤獨の君は、『俺も
死にたい〜』と時々ゴボシしてゐ
たさうな。哀れである。

△『僕の知つてゐる者はさうわる
くも曰はぬよ、昨秋銀行大會に
浅川が頭張つて新聞記者の入場
を喜ばなかつた。又懇親宴にも
記者連をよばなかつた。土地の
銀行の頭株は、その頃連續した
色々な大會が新聞記者を歓迎し
たし、新聞疎外は不利だといふ
たさうだが、内地の例をたてに
して彼が記者連を疎外した。心
ある記者は呼ばぬ所には行かぬ
で好いさと軽く見て居た、若い
連中の中にアンチ浅川の氣分旺
盛の者もあつて、随分彼はわる
く曰はれたやうだ。二三の連中
があつせんだりしたので、浅
川不信の聲は餘り大きくならな
んだが、あの頃の雲行きでは、
浅川も言論界からひどい目にあ
いさうだつた。元來内地の例を
ばかりいふのはどうかネ。郷に
入つては郷に従ふがよし、秘密

會でないものを閉戸するのは愚
だ。餘り高くとまるのは考へ物
だらう』
×『が、金融界では、浅川も有力
な存在だらう』
△『何んといふても、一銀の支店
長だからネ、銀行が古いし、よ
い得意があるし、ヤハリ重役格
に扱はれ、何かと曰へば代表の
一人に立つてゐるし、自任もし
てゐるらしいよ』
×『古田對浅川も此邊でケリにし
やうか。二人とも目立つて角を
立てて突き合ひもしまし』
△『前に云つた通り、上役の思惑
もあるしネ、大した事はなから
う。十八銀行の西村がゐたこと
で、面白い場面の展開は見れな
かつたかも知れない。唯二人と
も京城金融界では名物男さ、繰
返していふやうだが線の太い存
在だよ、好い取組さ』

者は九百五十尺の地下迄往復して
炭軍二臺を揚げて來るのに、一分

りして、浅川も大分鐘を包む事になりつゝありはせぬかネ」
×「新聞記事とは？」

いさうだった。元來内地の例をばかりいふのはどうかネ。郷に入つては郷に従ふがよし、秘密

も京坂金屋街で各物見返して、いふやうだが、縁の太い存在だよ、好い取組さ」

君萬歳

高橋昇

(三菱載寧鐵山)

最近親友Kと久振に會つて、所謂四方山の話をして居る内に、お互の學生時代の思出話になつた。

K「此間長崎でSに會つた時も話した事だが……思はずも君萬歳を唱へけり……とやつたのを覚えて居るか」

と問はれ一寸考へ出せずに居た。K「熊本の驛前で飲んだ時よ」の説明で拾數年前の記憶が蘇つて來た。

『實際あの時は盛んなものだったね、人吉ではSが僕を嚴らした……』

K「○科の△君ネ、△の評だが君等のクラスは最も猛烈な豪傑揃であつた、シカシ個人として却つて僕等の方が餘程あはれて居たのだが、君等は個人しては乙名しいが、集ると騒ぐので評判が大きかつた。と言つて居た、實際だね」

と言ふ様な話になつた。實は其君萬歳の狂歌をKに言はれて、そんな事もあつた當時のいろ／＼を思ひ出し、此機會に綴つて見る。

事は福岡時代、一年の一學期試験も終つて——當時一學期の終りは年末であつた——最初の見學旅行に、三池炭坑から鹿兒嶋縣の金山廻りに行く時である。

先づ三池に着き發電所に行つた時、その役員の方が機械を指しては何呉れと懇切に説明して呉れ

られた。一行三十名位、機械の周圍に集り、引率して居られたT先生も數人を隔て、居られ、僕は丁度其方の直ぐ隣りに、T先生と反對側に居たので、工場の騒々しいにも不拘、一語残さず説明を聞き取る事が出來た。特に機械と僕の顔をチャンボンに見てけ説明せられたので、大に恐縮した。

と言ふのは、一行中鼻下に髯を貯へて居たのは、T先生と僕だけであつた。先生はまだ若々しい貴公子然たる方であつたに引換へ、僕は無骨な、シカモ年輪よりけウソトふけて見える顔をして居たので僕を引率者と誤認して説明し居らるゝらしいと氣が付いたからである。

ソデコソツソリ其方の側を離れた。其後見學に行つた時は、説明される方の近くに行かぬ事にした。此事は此見學旅行の終りに、T先生にも話して、お互に苦笑した次第であつた。

翌日坑内見學。借用の坑内着に着換へ、片手に安全燈、片手に二尺足らずの棒……ステッキと言ひ度いが立つて居てはステッキには短かい……を持つた所は、義士の討入姿を偲ばせるものがあつた。

堅坑のケージ……ビルデングのエレベーターと全く同じ目的のものに乗つた。そこは萬田坑と言ひ石炭巻揚専用の人及用品を運搬するものと二つの堅坑がある。前

者は九百五十尺の地下迄往復して炭車二臺を揚げて來るのに、一分かゝらぬと言ふ超スピードであつたが、後者はそんなに速くは危険だから、それより餘程ノロイのである。それでもケージが降り始めると、身体がフーッと宙に浮ぶ様な……丁度船が動揺する時の更に強いのを感ぜさせられた位で、又坑底に達して止まる時には身體が上に持上げらるゝ様に感ずる。

坑内見學を終つて、堅坑で上りあかるみへ出た時、友達二人で論をし居る。

『何だシガミ付たぢや無いか』
『お前がシガミ付いた癖に……』
坑内の炭粉や煤煙で汚れた顔も自分のは解らず他人のばかり見えて、おかしい所へ、此珍論争は、ケージが降り始めた時に、其二人のどちらかがビツクリして、今一人の方にシガミ付いた事実は確かである。

三池の見學を終つてから其日の内に入吉迄着いて居れば良いと言ふ事になつた。そこで僕等のクラスの数人は、熊本下車、市内汽動車を見たりして、夕食には驛前の牛鍋屋に入つた。そこに君ちやんとと言ふ女中のレットテル第一號が頗る一同の御機嫌にかなひ、特にKが「君ちやん！」と呼んだら、「ハイ！」と返事をしたので、一同「萬歳ッ君ちやん萬歳ッ」と歡聲を揚げる。Kが君ちやんの手を取つてニワカダンスを始めてからは、踊る躍ると大亂痴奇になり其間に僕が

思はずも君萬歳を唱へけり神ヤ佛も笑ひ給けん
とやつたので一同益々喜ぶ。
『時間だ』と出發に一騒ぎだ、君ちやん其他に送られて砂車

する時に、車窓とプラットホームと相呼應して『萬歳』『君ちやん萬歳』

さて車中に誰れが用意したか、酒に盃迄特込んで居る、八代で補充するなどこゝで又賑つた。

汽車は暗を突いて球磨川の谷を氣息奄々として上つて行く頃には一同飲み疲れ、騒ぎ疲れて静かになつて居た。

窓々人吉に着いたのは十一時頃であつたらう。皆下り様といふ時にSがまだ眠つて居る……それも腰掛から床に落ちて。抱き起して

歩かせ様とするが、トテモ言ふ事を聞かぬので、僕がおんぶし三人介添えして漸く歩き出さうといふのに、長大な体軀で眠りからまだ覺め無いSがあはれる。始末におへぬので兩腕を僕の肩に乗せた

所が其儘拳固を振り廻し、僕は肩間を殴られた。幸に鼻血も出なかつたが、たまらぬので外の者に委せ、一足先きに出て漸く人力車を

一臺見付け宿へ運んだ次第。此旅行の續きは改めて書く事とし、君萬歳を唱へて一先づ筆を擱く(五、五、五)

人蔘劑では
一も二もなく

總督府
專賣局

精製の蔘精
に限ります

發賣元
貴生堂藥品店

京城本町二丁目
(電本二三八番)
振替七六一番

◆風流人閑話

北 漢 山 人

○稻葉君山氏が、竹添町の山縣邸の連翹の盛んなのを見て、大浦貫道師を訪ひ、『あなたの發旋でアレを五六株買いたいのだ』といふ。『よろしい』といふので、一週間ほど経つてから、東京へ書面を出す。スルト東京(山縣)では餘り重大事でもないで、これ

も十日ほどして、『承知いたしました。御入用なだけ、どうぞ勝手にお持ち下さい』、この返事を、受けてから四五日して、君山氏に手交する。

○喜んだのは、當の君山氏、早速入夫を連れて、山縣邸へ乗り込んで見ると、流石呑氣もの、春も遠うの昔旅立ちをし、連翹などは影も形も見へない。先生入夫と一緒に、愾然として、『ホイ……これア〜』

【三〇】

◆うわさ雑記

漢 江 漁 郎

○鮮銀仁川支店長の岸氏は、弘前中學の出身で、十八歳の時、東京へ出て、第一高等學校に這入つた。

○寄宿舎の同じ部屋にゐたもので、名を成したのは、何んといつても谷崎潤一郎が第一人者で、外ものはマダ〜前途遠……
○ところで、この御兩所は、その頃から文學青年で、共に回覽雜誌の編輯をやつた關係で、今もズイツと親密な交際をして居る。

○面白いのは、一高の入學試験の時、谷崎氏は、頭から三番でパスし、岸氏は、尻から三番で通つた。ところが、それから一年、二年級に進級する時には、今度は、岸氏が頭から三番、谷崎氏はビツから三番。『オイ、どうだい』、『フフツ、面白くなえや……』

○朝鮮通信社の伊藤藤堂氏は、近年益々肥滿する傾向があるといふので、當の御本人よりも、知己友人が、心配して、『君、大丈夫か……たしかかネ』

○ところで、この伊藤氏の肥滿を、最も苦にしてゐるのは、平壤の青木政三氏。『どうも困つたものだ。あ、肥滿しちゃ……實に憂慮に堪えぬ』

○ソコで、或る人、おかしさを堪えながら、『時にあなたは一體どれ位(體重)おありです』、答えて曰く、『それがさ君、段々腹せてネ。目下漸やく廿四貫さ。我輩心細いよ』

人間不成

は偽信、若くは深信、誤信に導いて仕舞つたので相當の智識階級の

一週間はど經つてから、東京(書面を出す。スルト東京(山縣)では餘り重大事でもないの、これ

影も形も見えない。先生人夫と一緒に、懐然として、『ホイ……これア〜』

えて曰く、『それがさ君、段々度せてネ。目下漸やく廿四貫さ。我輩心細いよ』

人間不滅

牧野 二 郎

(明 治 町)

は偽信、若くは迷信、誤信に導いて仕舞つたので相當の智識階級の人達迄も『宗教的信仰には理屈は禁物』とか、『理性からは信仰は絶対に得られないもの』など誤りをなさしめたのである。

不滅の信念と

その倫理觀念

我々の靈は死後肉体を去り靈界に安住する、即ち極めて幸福なる境界に置かれる。

而して我々の死の苦痛は未だ死せざる間に想像する様な苦難なく却つて安樂なる靈の境遇の轉換であることは、出生の時の状態と大差なきものである。

斯く觀じ來る時は死は少しも苦難ではなく人世豫定の進歩の一階段に過ぎないものである。

又一面我々人世に於て、理論上苦痛と快樂とは相平均若くは相殺するが原則ではあるが、實際に於ては快樂の負債を返済する時の苦痛が餘り深刻に脳裡を襲ふて堪え切れないなど、悲鳴を擧げさせるのである。此悲鳴を擧げさせるは誰でも間違ひであることは能く判つて居りながら不遇をかこつのである。さて此人世の苦痛と感ずることは最後迄頼むと死に到達する。元來危険とか恐怖とか云ふ感じも之を極度に押し詰めると死に到達する。要するに苦難とか危険とか恐怖とかは結局死から免れたいからの感であつて、人世死其ものが前言の通り豫定の進境であり又案する程の苦しみでもないならば決して避け逃れるべきものでもなく所謂從容死に就く大覺悟が確立し、従つて、人世に於て苦もなく恐怖もなく、如何なる事件に逢着するも天空快調、平靜裡に

凡そ人間の胸中に存する普遍的確實な向上心、死せる靈魂に對する崇敬の念、消えざる思ひ出、人間と生れて自然に有つて居る動ずべからざる正義の觀念、吾等の良心や智的材能の起す所謂感情、宇宙を支配する數學的法則に比べて慘めな程矛盾の多い人間の運命、上は星夜の天空に漲る無限永劫の觀念、下は地上に潜む人間の千種萬様の思想、腦髓中の物質は絶へず變化しても尙存する自我と云ふ存在、凡て慙ふした事柄は皆吾人に靈魂の存在を教へ、たとひ肉体は破滅しても靈魂は永遠に不滅である事を深刻に確信せしめる。

けれども、是等の事實に就ては未だ會て科學的説明は試みられて居なかつた、反つて生物學者達や理化學者達は單なる腦の作用に過ぎない事で思想、感情、自我の念なども死と共に皆消えて了ふのだと教へ又は考へて居たのだ。

茲に人間性の高遠な理想と所謂實證科學との間には著しい矛盾があつたのである。

古來宗教家及哲學者は人の靈魂の不滅を想定して立論推論して來たが、我々科學的に基礎付けられたる社會には誠實なる實驗と的確なる驗證から斷せられたのでなければ信を措いて首肯出来なかつたのである。

而して近時佛國の世界的天文學者カミニ、フラマリオン氏及英國

の物理學の大家パーミンガム大學總長サー、オリバー、ロツヂ氏、其他世界で著名な科學者等により實驗科學の方法を應用して、今日迄一般に物語りの世界、超自然の世界に祭り込められて居た現象を比較解剖して、夫等の現象が、未だ吾人に知られて居ない他の自然の世界——吾々の五官に感じ得るものとは全く異つた——に在る靈なる力に由つて生じたものだ云ふことを確實に證明し、進んで人間靈魂の不滅なることをも科學的に立證せられたのである。(邦譯『人の永生』『レイモンド』『死と其神祕』『不可思議の世界』に就て見るべし)

私は例證を列挙してくどく書ることが下手であるから、前記各邦譯書並びに日本の心靈研究學會員諸氏の著になる『心靈不滅』、心靈問題叢書に就て證驗を得られたし。

我々の心靈不滅なることは確實なりと證明せられたのである。三千年の昔釋尊が説かれた輪廻説も、キリストの稱へし天國説も、茲に其一部分は科學的に立證せられたのである。

そして何れの宗教も此靈の永生を根本義として教を立てたのであるが、其後の教徒(僧、教師、寺院、教會)は其存在の爲めに著しく方便に墮して、難行苦行を積み初めて悟道の域に達するか、又

處理應答が出来、誠にノンビリした調達な気分て定命を送ることが出来るのである。

西郷南州が曾て人に訓へるのに『世の中で命も入らぬ名も入らぬ者が一番仕末に困る。仕末に終へぬ人でなければ事を共にするに足らん』と云はれたとの事である味ふべきである。

皆人が死は苦痛でなく、又死後は興味を暖る様な幸福な靈界が展開して居ると知れば、差詰め氣の弱い悲觀家、厭世家は早速自殺を思ひ立つて來はせぬかと思はるゝも、自殺は罪惡である、天命の反逆者であつて又現世に於ては極めて卑怯者であつて、靈界に行つても他の靈に顔合せが出来ないで下積みになりて小さくなりて居らなければならぬ筈である。決して思ひ違ひしてはならない。

さて此の自我の靈が機縁に因り此肉体に宿りたのであるから與へられた常識と學問と習慣との正しき指針——良心——の判斷通りに此肉体の機能を充分發揮することに終生努力するのが即ち天與の使命である。斯くすれば人界にありては御互に秘密は保たれるから、罪惡を犯して居りても(假令自身自身の心の内に自責の念に苦しめられて居りても)判らずに済む事もあるが、靈界に至りては總て各靈間に秘密がありさうな筈がないから、所謂『顔に書いてある』から他靈との社界交りの出来ない者となり下積となりて小さくなりて居らなければならぬ。之が取りも直さず地獄に墮したのである。

故に前述の如く自己の心に正しき善なりと信する行爲をのみ終生するのを以て宗教の根本信條とするならば神にも佛にも頼むに及ば

ず、死を人世の一進境と觀する強き堅き、そして寫實な自我に生き度いものだ。

思ふに是からの宗教は科學的になり、心靈的事實の知識の上に其基礎を確立するであらう。従つて科學の宗教は以前の宗教に驚くべき利益——統一を與へるであらう今日の新教徒は聖母や、聖徒の信條を承認しないし、回教徒は基督の犬を嫌ひ惡み、そして佛教徒は西洋の教理を排斥するけれども心靈現象の科學的解決の上に建てられた宗教には何の分派も憎惡も消滅すであらう。又凡ゆる迷信、謬信も跡を絶つことになるであらう。

◆無駄ばなし

北 漢 山 人

○先月の中ごろ、平壤の松井民次郎氏の夫人が、同地から京城まで、飛行機で初旅をした。

○夫人は、もとく關釜連絡船に乗つても、少し長い汽車の旅をしても、スグ半病人になるので、今度飛行機で、京城へ行くといひ出すと、先づ『それア本氣の沙汰か』と、ビツクリしたのは、御良人の松井さん……『悪いことは、いはぬ。お前それだけは、よしなさい』、熱誠面にあふれてこんく忠諫を試みるが、夫人は更に御採納の色はない。

○『アンタも、存外古いのネ、今はスピード時代よ』、論鋒新鮮にして、且つ峻嶒。尻目にかけて悠々と御乗機——

越前永平寺の開祖である道元禪師は『加持祈禱は俗家の世渡りに劣りてあさましい。念佛讀經などで功德を得んとするは云はぶやうない間違た』と喝破し正しき信仰を傳へて居られる。釋迦も基督もマホメットも共に正しき信條を體得して説かれたのであつた筈だが、後世の傳道者が方便の末に囚とせられ、又生きんが爲めに心にもなき脱線を敢てしたのを末世では唯一の信條と誤傳したものだろ。達摩大士でさへも面壁九年もせねば大悟徹底がむつかしかつたとは今から思はば誠に御氣の毒であつた。

○だが、松井さんにして見ると何分にも心配でたまらぬ。ソコで懇親な徳野さんなどへ、早速打電『カナイヒコウキデキチユク、ヨロシクオセワタノム』

○人のいゝ徳野さんは、『ヤーこれはぢつとして居られぬ。オイ俺は迎へに行く。お前は、床をかつて、スグ寝られるやうにしなさい。水枕なども無論用意してネ』奥さんに命令すると、スグその足で汝矣鳴へ……。松井夫人さだめてウんく唸つてると思ひきや、『アラ濟みません……徳野さん……飛行機は、とてもいゝワ。私スツカリ陶酔しちゃつてネ』、徳野さん茫然として、『へへー』

○その晩松井夫人は徳野氏宅で盛んに長唄をやつたさうです。報告せずんばあるべからずと、徳野氏これを平壤へ打電すると、松井さん、『ナ、何んだと……長唄……ウフッ、長唄……』

朝
鮮運送●株式會
社

き善なりと信する行爲をのみ終生
するのを以て宗教の根本信條とす
るならば神にも佛にも頼むに及ば

今はスピード時代よ、論鋒新鮮
にして、且つ峻練。尻目にかけて
悠々と御乗機——

氏これを平穩へお導くと、私手
さん、「ナ、何んだと……長唄……
……ウフッ、長唄？……」

茶いろいろ
茶器いろいろ
青々園茶舗
京成本町二丁目
(電話本局二二二番)

外科 皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸 潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

内科 小兒科
中島病院
明治町二ノ七七
(電話本局三七八番)

お二人で一つの保険に
はいれる然も保険料は二人保険
普通の一人分餘です
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期配當の外、不老保險
に普通配當がつきます

M式巻上日覆
ホロ形日覆
各種テント
諸車用雨覆
非常に強
フットン製
其他帆布製
製作販賣
京城中
前 西
會商ト
八四八二本電

京城永樂町二

酒井婦人病院

院長 酒井一郎

(電話本局一八番)

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三

電話本局二五六二番

內科
小兒科

木村醫院

院長 木村文三郎

京城府吉野町九一

(電話本局七二五番)

京城本町二丁目

一番瀨醫院

院長 一番瀨慶次郎

(電話本局四〇〇五番)

明治町二ノ七五

利根川齒科

院長 利根川清治郎

(電話本局二八六七番)

誰でも直ぐ使へる

大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用 ○鞆 に入れて携行自由 ○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

手
三
弘
と

彷徨した。

或日、私は鏡の中の耳を凝視め

耳と私と

附 田 巽
(京城日日新聞社)

いままでの私の環境——正確に云へば二十六年間の私の生活が、殆んど例外なしに私自身の耳によつて規定された。といふと余りにすばらしいお話で、恰度芥川龍之介が犬を恐怖がつて自殺したといふラヂオ・ジャーナリズムと變りがないかも知れない。

が、しかし……

× ×
一等最初に私が『耳』を認識したのは、確か尋常五六年生頃だったとおもふ。函館で一二と云はれる或お金持のお産から歸つた母(その頃父は不在だった。で、母が自然私等家族、と云つても母子二人ぎりの小さい生計ではあつたが、それを支へる爲に産婆をしてゐた)が宛も偉い發見でもしたかのように斯う語つたものだった。

『今日行つたおうちの旦那さんの耳つたら、そりやデカイの上、まるできくらげみたい……』まさか、母が戀人の注意深さで觀察した譯でもあるまいから、その際旦那さんの耳は勿論母の『無意識』へ飛込んだ。それだけに又、それ自身存在價值を有つ、乾度不足まじい代物だったのであらう。聞きながら、私は大黒さんの耳など想像してゐた。

×
それ以來、私等母子は『耳』に對して敏感だった。幸せな人と大きい耳とは、何か有機的な繋がり

に在るんぢやないか、と考へ始めた。そして、その筆法でお互を比較研究し、周囲の人々をも批評した。と、不思議なことにそれは、曾て一度として私等の觀察を裏切ることをしなかつた。

父のない家庭——とかく立志傳中の母子を空想し勝な私等にとつて『耳』は體かに重大な役割を演じたのである。

× ×
その頃の私の耳は大きかつた。級友達と比較して何時も私は遜色を見出さなかつたものである。こゝと程左様に幸福だつたかどうかは幸福そのものにハッキリした標準がないので寔に遺憾だが、若しも小さい同僚たちの羨望を浴びてゐたといふ事實を幸福の反映と見るならば、成績がよくて教師や母に可愛がられてゐたといふ精神的な條件からも又、氣の利いた服装や學用品等々(産婆の子にちよつと不似合な話だが)の物質的な條件からも、恐らく私は恵まれた存在は妙かつたように記憶する。序に蛇足を敢して貰へるならば、私もく私は美少年だつた。

×
中學へ行くようになつてから『耳』は私を離れた。否、私が五年間『生活』を忘れてゐたのかも知れない。

×
中學を卒へて四年、私は東京で

彷徨した。

或日、私は鏡の中の耳を凝視してゐた。と、なんと貧弱な耳が其處に縮まつてゐたことか!

その時から再び、私は『耳』の虜となつたのである。が勿論、それはもとの幸せな客觀狀勢を齎しはしなかつた。郷里からの學費が杜絶えて、間もなく歸郷を余儀なくされるまでは、毎日『耳』は私を憂鬱にした。

×
果てしない就職難の後母は云つた。

『おまへの耳が小さくなつたものね……』

が、その時の私けもうもとのデータ—ミンストではなかつた。で私は云つた。

『母さん、私たちは今まで余りに弱過ぎたんです。人間の不幸が耳のせいだなんて、そんな馬鹿らしい話があるもんですか!……私は朝辭へ行きます。そして私の運命を拓きませう』

×
かくて私は京城へ來た。

耳と私と……果して孰れが勝つか???

『耳』は徐かに垂んでゐる——
(五年五月五日)

鰻	五拾錢
お壽司	定評あり
	先づ御試
	食願上候
本町五丁目	
阿波文	
(電本一八三七)	

天才の夭折

— 畫友の思出 —

山田新一

(洋 畫 家)

〔三八〕

振で故國の土を踏んだ僕は、其十三日の午後、ひた降る雨にびしょ濡れになって大阪の町を歩いていた。

そして不鮮明な記憶をたどつて佐々木慶太郎の實家を訪ねあぐんだ僕は、何か重大な忘れものでもしたかのやうな氣持で、翌朝大阪を出發した。

越えて二月十九日、佐々木は、佻しい轉地先に、愛しい妻と四人の愛兒達と、そして母一人、子一人の慈愛の母に護られて死んだのである。

思へば、彼病に臥すとは知らずして、日本へ歸つた僕が、平常餘り文通もしなかつた、彼の母堂を訪ねやうとしたのも、何かの因縁であつたのかも判らない。

彼は飄逸の人であつた。本人がどんなに眞面目な時でも、傍の人には何か可笑しかつた。

美術學校を卒業して生活の爲め三省堂に入社してから、彼は社内信望を一身に集め、殊に大御所神保氏は、彼の飾らざる飄逸の中に、細事にも忠實なる一面を見抜いて、悉く信頼、愛護してやまなかつた。

彼は頻繁に顧問室に呼びつけられた、彼、顧問の前には鞠躬如として、いつも熱誠面に溢れるのであつた。

然し彼の過度の熱誠は同時に彼の狼狽でもあつた。顧問室附のタイピストの全部が、彼の所作の前に曇發せんとする笑を押えるに苦心して、タイプライターが打てなかつた。

彼は飄逸であつた。然し彼位心中寂しくて、友情に泣く男もなかつた。

山田新一が初戀に破れて(笑つ

1 佐伯祐三

自分の友人の中で、一番天才的な男は佐伯であつた。

大正十五年の二科會に、十八點の作品を特別陳列されて、眠れる我國洋畫壇に、一大爆彈を投じた彼は。

二度目の渡歐をして、僅に一年其間二百數十枚の驚べき多作、然も一枚一枚が火の玉のやうに燃えてるやうな遺作に取圍まれ……全くもう製作慾に燃え狂つて死んだ。

一九二八年八月十六日巴里郊外の瘋癲病院の一室に、三十一年の眼瞼を閉ぢた。

彼は乞食のやうな風采で、自然の奇行家であつたけれ共、一面人情には非常な潔癖家であつた。

無口で、女嫌ひで、變物の彼が一年半に亘る激しいプラトニックラブの後に、今の未亡人と許婚になつて嬉しさに僕の家(東京時代)を訪ねて来た時、僕が妻を呼ぶのに、『オーイッ』と呼ぶことを聞きとがめて、非常な立腹であつた。

眞剣に怒つた。

僕と、僕の妻と、彼の未來の妻とを前に置いて大立腹の彼の言草が振つてゐた。

『自分が好きで貰つた嫁はんは世界一や、それを『オーイ』なんて呼んだら罰があたる……』と云ふのである。

實に完全な理屈のやうであり、又極めて不完全な説教のやうでもあり、佐伯達が歸つたあとで僕達夫婦は笑つた。

佐伯夫人も、其時から戀人佐伯の立派な理解者ではあつたが是も判つたやうな、判らぬやうな、それでゐて嬉しいやうな、顔を眞赤にして、きたならしい、然も勝はこつた如く大威張の未來の夫に追つ眼いて歸つて行つた。

だが成程、結婚後八年、既に一兒の父となつた彼が、胸の病に倒れ、おまけに氣が變になつて来て友人を殴り、醫師に亂暴を働く程になつてからも、矢張妻君の名を『さん』づけで呼んでゐた。

或夜、病床に昏々と眠る彼を前に、僕は未亡人に云つた。

『佐伯君は今でも、貴女を『さん』づけで呼びますね……』とそしたら未亡人がしく／＼泣き出した。

つい口をすべらした僕も、こらえ切れずに泣いた。

2 佐々木慶太郎

一月十日朝、敦賀に上陸、二年

てはいけません)幾度か自殺を計畫した時(十九才の冬です、若かつたのです、笑はないで下さい)數日の間を僕の下宿に泊り込み

過日我々の恩師小林眞吾先生が鮮展の審査に來られた時、ホテルの一室で前田君の思出話を花を咲かせた。

肺病にもなかく／＼なれさうになく、肉腫など、仲々志願通りに出來さうにもない僕は、親しい、尊敬する友人達の、天才的な死に先

とる前に置いて大立腹の彼の言葉が振つてゐた。

てはいけません）幾度か自殺を計畫した時（十九才の多です、若かつたのです、笑はないで下さい）數日の間を僕の宿に泊り込み身をもつて看視の任にあたり。離涙もつて説諭してくれたのは彼であつた。
帝展入選五回、平和博、櫻樹社展に受賞し漸く畫壇の中堅に重きをなさんとして。

3 前田寛治

先立ち行く先輩友人の、相繼ぐ悲しみの中に、前田君の死位、最近の畫壇にセイセイショナルな死は無かつた。
大正十年の美術學校卒業で、僕より二年の先輩であるが、數ある雜誌新聞の追悼文の中には、僕の名前も引合に出されてゐたのもあるやうに。

池袋時代には、里見、西村、中山、佐伯の諸君等と畫壇乗出の戰鬪準備を共にした。

我々は、朝は學校に（みんな研究室に籠を持つてゐた）午后は、風景か人物の寫生に、そして夜は里見の家に集つて靜物か人物の研究をした。

我々の戰鬪同盟は實に堅かつた連中みんなが一月も人浴しないこともあつた。

夜更けて、空腹に耐え兼ね、共同出資の燒芋に、又勉強を續けるやうなことも多かつた。

血のにじむやうな、互の激勵の中に、言ひ知れぬ骨肉を感じた。

後年里見君は二科會會員となり前田君は新しい寫實主義を確立し、三十五才にして、帝展審査委員となり、忽焉として、稀しい不治の病、口頭肉腫に倒れた。

一月十日朝、敦賀に上陸、二年 山田新一が初戀に破れて（笑つ

過日我々の恩師小林眞吾先生が辭展の審査に來られた時、ホテルの一室で前田君の思出話を花を咲かせた。
だが「肉腫は、肺病よりも、もつと天才病で、殊に口頭などに出來た場合、非常に頭腦が鋭敏になるさうだ」と帝大教授の受賞も淋しかつた。
肺病にもなかくなれさうになく、肉腫など、仲々志願通りに出來さうにもない僕は、親しい、尊敬する友人達の、天才的な死に先立たれて、近來無性に淋しい。
友人達の前には實に恥しい、自分の鈍才に頼つて、徐々に進む道を選ぶ外は無い。
（一九三〇、五、一五）

鰯の香

角田不案

肉ふとの身を若葉していと清き空氣のなかを山のほりける。
若葉さす山の道へに工夫等は晝餉するとして火をもやしるぬ。
晝餉すと道路工夫は山の道に乏しき火にて乾鰯あぶりつ。
汚れなく山の空氣はすみてあれば乾鰯やく香のその匂ひとき。
のほり極め山の上なる右に立ち身をうちそらし手をあげにけり。
五月空松の新芽の尺あまり鉾立つ丘に眞晝輝やか踏み行けばふみゆくところ松の丘の松の新芽の悉く長し。
何氣なく折りて遊びけむさしいだす子の掌の松の芽のはひ。
松の芽のやにのはのかににはふ手に芝生に座はり握飯食うべる（五、五、一〇）
前號「桐の若幹」の歌中第二首を『葉あとしるく残れる桐の若幹のいただきの芽の太くすこやか』第二首を『皮肌にいぬち漲り青みつつたくましき芽を桐はふきぬる』と訂正す

山の犠牲

津田常男

(週信局)

【四〇】

て、之が無事成功して歸着して居れば、それは本人の満足とその周囲の専門家に誇示されるレコードに終るのであり、廣く市井の問題とはならないのである。想像するにさういふ成功の實例が、次に於ける本人及び後進の計畫、行動の刺戟となつて居るのであらう。

飛行機に乗る實際の機會といふものは今尙何人にもさう澤山はないのであらうが、漠然と考へた飛行機といふものには、まだ墜落の危険を慎慮せずには措かない。しかし、事實に於ては、昨年から開始された旅客飛行機の如きは、絶對的にとつてもいい程何等の不祥事を惹起して居ないのである

之に反して、人間が自分の脚で大地を踏んで居乍ら、生命を犠牲に供した實例が屢演せられた。それけ言ふまでもなく、登山者の遭難である。本年一月に於ける土屋侍従の令息等の死、最近に於ける三高學生たる川村曼舟君伯の令息等の死等は登山スポーツが飛行機に乗ることよりも遙かに危険なことを物語つて居る。

登山スポーツは何時頃から始つたかといへば確かなことは忘れたが、凡そ明治四十年前後である。日本アルプスといふ名稱が何時となく附せられるやうになつたのは外人ウエストン氏の稱したことに始るやうに記憶する。小嶋島水氏などが脚と筆との力によつて盛に日本アルプスを紹介し開拓したのはその當時に始る。爾來、陸地測量部員の職業的踏査と少數の獵師の涉獵と、限られた特殊の山岳に對する信仰的な登山の外は顧られなかつた登山といふものが、廣く一般的な趣味となるやうになつた最初の目的は寧ろ實質剛健の氣象

を養ふとか、身體を鍛錬するとかいふことが、その目的のやうに解されたが、後に至つてはさういふ間接的な標語には甘じられないで登山は、一の純然たるスポーツ化したのである。之は登山そのものを正當に理解して當然の歸結と肯ける。

登山熱、登山スポーツは年毎に盛になる。山の設備も完備すれば之に對する職業的機關も増える。日本アルプスには處女地がなくなつた。私の學生時代には、まだ登山の時期といふものは、大体に於て暑中休暇中土用を中心としたその前後の時期に限られて居たものであるが、之がこの儘守されて居たなら、今の様な遭難事件が頻發する筈がなかつたと思はれる。

けれどもスポーツは尖鋭化するをその本則とする。場所に於て開拓の餘地がなくなれば岩壁の登攀とか、峡谷の探險とか手段に於て尖鋭化する。時期に於ても、夏季の登山は平凡化してつた。登山スポーツの尖端を行かんとするものは、秋季、春季、冬季に於て、その特殊なる山の變化に應じて特殊なる登山を試みるに至つた。之が最近に於ける實例に徴しても土屋氏等の冬季登山の遭難、三高學生の春季登山の遭難に該當するのである。我々が新聞紙上に於て事件を知るの右の如き不祥事の發生した場合に限られるのであつ

登山スポーツの享樂者はその大部分が學生であるといつても過言でなからう。それは遭難の犠牲者が殆んど學生若くは學窓を距つて極めて間もない人に多いことによつても證される。之を冷靜に批判して、その無學、無分別を咎めることは何人も直ちに出来ることである。學將に成らうとし、或は成つてこれから社會有爲の材として活躍せんとするとき、一登山スポーツの爲に可惜一命を葬るのであるから、その親、兄弟等の嘆などは想像するに餘りある。けれども、敢てその見解に同意すると如何に拘はらず、青年學生が登山スポーツに屢々生命の危険を冒してまで突入せんとする氣分には十分の同情が持てるのである。凡そ斯くの如きことは、純眞なる青年にして始めて出來得るのである、その氣持だけを抽象して考へるならば、そこには尊敬以外の何ものもない。山を愛する氣持種純なるものが又他にあらうかといふことは、少くとも私の過去に於ける極めて僅かの經驗からしてでも斷言するを憚らないのである。青年容氣の無學は飽くまで之を戒めなければならぬが、青年にこの意氣この熱のあることば悦ぶに値する

今後四時の登山に對する科學的研究も益進んで、恐らくは過去の犠牲者もその勞が無駄でなかつた事を明にする時も來るであらう。

旅から旅に

長谷井市松

(朝 鮮 銀 行)

港 の 夜

恵まれたる天候に狂喜しつゝ、我今旅に在り、旅の子は所詮旅を旅すべきにて候なり。

明朝は此地の用務を終り、海を喻えて耶馬の奇勝を探り、夜は別府に泊して思ふさま温泉の状景を味ふべく候。

宿の直下は海潮漫々として帆船林立す、門司小倉の燈影眼前に明滅致居候、旅なるかな、旅なるかな、汽笛の音忙しく且つ淋し(五二七下闕にて)

耶馬探勝(其二)

昨午後四時半舊耶馬の景勝羅漢寺驛に來り、自動車を買して羅漢寺の絶景を攀ぢ、歸驛直ちに深耶馬の勝を探るべく、黄昏雨を肩して此地に來り、甲屋旅館に投じ居候。

偶ま投客稀にして雨聲孤り蕭々水聲漸く涼々として青蛙頻りに群鳴す、山峽幽邃の氣身に迫りて孤影寂寥、山驛空しきの感一入痛切に御座候。

明朝夙に起きて深耶馬、奥耶馬裏耶馬の幽寂を極め、夕べは別府に去つて、長途の勞を慰せん事を思ひ居候。一寸此地より一筆(五一九深耶馬驛前の甲屋にて)

耶馬溪探勝(其二)

抑耶馬の溪勝は、柿坂村を東行

なかつた登山といふものか、廣く一般的な趣味となるやうになつた最初の目的は寧ろ實質剛健の氣象

のである、我々の旅に於て、事件を知るのには右の如き不祥事の發生した場合に限られるのであつ

犠牲者もその勞が無駄でなかつた事を明にする時も来るであらう。

ば到底十指に盡きざるべきも、舊

來所謂五大地獄と稱するものは八

幡、血の池、十萬、坊主、海地獄

等にして、更に大正十三年六月三

日の噴出にかゝると云ふ鶴見地獄

や紺屋、鐵輪、湯の花地獄等を加

ふれば、實に枚擧に遑あらざるも

のあり、然れども其噴煙噴湯の雄

大にして豪壯なる、其噴湧出の爆

音の高くて凄慘なるの點に於て

は、鶴見地獄を以て最となすべく

碧湯漫々として沸々たる海潮の碧

よりも深みありて、透徹コバルト

色を帯ぶるの美觀は、蓋し海地獄

特有の長と被存候。

前者は華氏百五十度とやら、後

者は二百度を算す、水深に於て前

者は三百二十尺と云ひ、後者は四

百二十尺と稱せらる、何れにして

も天下の奇觀、一遊の價値充分と

被存候。

我等今や現世に於て地獄廻りの

事を果し候へば、後世に於ては極

樂淨土に參して、常寂光の蓮の臺

に至幸至福の境地を見出し候こと

萬疑ある可らず候。

別府温泉より

只今宿の自動車を買つて、當地

唯一の名所たる地獄廻りを試み申

候、當地獄の数一々にして算すれ

ば到底十指に盡きざるべきも、舊

來所謂五大地獄と稱するものは八

幡、血の池、十萬、坊主、海地獄

等にして、更に大正十三年六月三

日の噴出にかゝると云ふ鶴見地獄

や紺屋、鐵輪、湯の花地獄等を加

ふれば、實に枚擧に遑あらざるも

のあり、然れども其噴煙噴湯の雄

大にして豪壯なる、其噴湧出の爆

音の高くて凄慘なるの點に於て

は、鶴見地獄を以て最となすべく

碧湯漫々として沸々たる海潮の碧

よりも深みありて、透徹コバルト

色を帯ぶるの美觀は、蓋し海地獄

特有の長と被存候。

前者は華氏百五十度とやら、後

者は二百度を算す、水深に於て前

者は三百二十尺と云ひ、後者は四

百二十尺と稱せらる、何れにして

も天下の奇觀、一遊の價値充分と

宮島より

只今(午後三時十分)彌山丸に

搭して宮嶋に來り、嚴島神社に賽

し、それより日本三景の二と稱せ

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

らるゝお彌山登攀を試み申候、此山海抜千八百尺、登高廿四丁と記され、概ね石階に候、我輩山麓に於て來り隠むる一寫眞師の御布施の爲にもと、此處にても記念撮影を餘儀なくせられ、四時十五分急遽登高を初め申候。但お彌山上下の行程は二時間半と稱せられ居り山麓より六丁目迄は頗る急勾配にて、氣息奄々たるものあり、茶亭に就てラムネ二本、力餅數個を平らげ、勇を鼓して一氣に山頂に達し申候。

此山往昔弘法大師唐より歸朝の途次、錫を留むる一百餘日と稱する處、大師以來千百有餘年、消えたことのないと云はるゝ『不消の火』と云ふもの、今尙お開持堂に焰々致居候、偶ま白衣の一老僧あり、就て聞くに『必ず深夜に一度は起きて火の絶えない様に致しますので』と、頗る敬虔の言動、その感入り申候。

登覽すれば則ち沙灣曲折し、巖岩峻秀一望百里、瀬戸内海の風光を集め、脚下は殿閣樓影潮水に浮動致居り誠に美觀に御座候、我等長く低徊願望の時を有せず、仍て慌しく回顧し、俯瞰し、殆ど驢足にて下山の途につき申候、蓋六時三分船發すればなり。山を下りて磯橋に向ふに、驛長と水夫と皆茶を待てり、時六時五分に及べり、即ち勇躍して舟に上り、瀧の如く流るゝ汗押し拭ふてホット一息致候。此行二時間半と云ふに、殆ど一時間半にして上下致候こと素より成功と稱すべきも、思ふに今次旅程の中、最大難關の一たるを痛感罷在候。

若夫れ一日の閑を得て『安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比壽』と稱せらるゝ島廻りを爲さん

か、更に興會の盡きざるもの可有之、要するに人工の美と自然の諧調と、互に融合する處に宮島の特長を認むべく候。

六時三十一分宮島發廣島に至りて、アイスクリーム二、サイドー茶一罐を呑み盡して、漸くお彌山登高の疲勞と、渴を醫し候ことに御座候。

京都驛にて

午前六時三十分京都着、八時濱田行の汽車を待つ間を、山陰線待合室に過ごし候、午前七時十五分國部行と云ふに、何れの女學校に通ふやらん、京の子の三々五々件れだち來る、和裝のもの、洋裝のもの、いづれも都びたる風情なるが、而も其言語の何ぞそれ優なるや、『あ、そや〜』『どこへ行きやはずたらう』など、之を前日九州女學生の一團の『あのナア

おもひ出草

漢江 瀧 郎

○鐘路の濱洋服店主は、京城の洋服界の元老で、今のところに店舗を開いてからでも、三十餘年になつていふことである。

○この人は、故人李完用伯から絶大の信託を得、病中であらうと食事中であらうと、殆ど姻戚以上に自由に、伯の居間に入出したものである。

○どういふ關係で、伯の揮毫なども、殆んど無數に所藏し、『もう少し長壽してゐてもらいたかつた』と、しみ／＼故伯の温情を偲んでゐる。

○一体どういふ動機から、そん

(四二)

一、何シチヨルの『梅もきつチヨッタなあ』などに比するに、對照の妙甚だしきものあり、如此をも情趣無限と可申か(五、二三午 前七時一〇分)

八時半濱田行に塔じて綾部に向ふ、途上偶ま保津の清瀨を臨む、水石娟美、殿上杜鵑花の紅を點す風光繪よりも美なり、卯朝は我此川を下るべし、遊蕩勃々たるもの有之申候。

十一時五十分綾部にて舞鶴行に乘換へ、碧水汪洋たる由良川を渡り、白砂青松の丹波由良、栗田を過ぎ、昔に名高き宮津に着き申候一境海に沿ふて海水體かに、好風光の地に候、汽車山峽の田野を過ぐる時雉子の雛五六羽、親鳥に牽ひられて、チヨ〜と遊ぶが見え申候、此間の幽趣到底人賞のものに無之候。

なに伯の信託を得たかといふと、往年伯が今のフランス教會の構内で刺客のために、背後から二太刀まで、刺し貫かれ。その場に昏倒した時、丁度濱氏は、現場に居合せ、人がアレ〜と唯だ立ち騒ぐ中で(その時伯の車夫や、護衛は、唯だ啞然とするばかりで、何の役にも立たなかつた)奮然として兇漢に躍りかかり、獲物を打ち落して、これを組み伏せた。そして最初に、人々に注意して、醫師を呼ばせた。い〜の行爲が沈着で用意周到であつたといふので伯はその後多大の謝意を表し、以來たび／＼揮毫を需めて『アンタは、私の命の恩人ぢやからな』と、伯は笑ひ／＼幾枚でも、喜んで書いたものである。

若夫れ一日の閑を得て「安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比壽」と稱せらるゝ島廻りを爲さん

た」と、しみく「故作の滑稽を促んでゐる。〇一体どういふ動機から、そん

と、伯は笑ひく「幾枚でも、喜んで書いたものである。

傑作縮尻漫筆

廣江澤次郎

(大和町)

て笑ひ出した。Fさんは大真面目で早くメタとせき立てる。十數分後女將は新調大型越中褌を恭しくFさんに献上した。Fさんは早速風呂に飛び込み、ヤレメタと胸なで下ろして一ト安心。

社長恐縮

釜山の迫間大人と共に産米百萬石増收計劃樹立に奔走せし私は、丁度半年前に京城に舞ひ戻つた。旅行中の和歌一首

もみぢ葉の紅む頃はい家を出で梅はころも未だ歸れず

歸城後早速雜筆社を訪問した、松本社長は大に悦んで呉れた。ドゥもあんたが京城に居らんといかんワイ、此頃仁川へ今村さんや徳野さん等全人連と行つたが、桑野さんもあんたのことを聞いて居た。

『新羅榮華史觀』はヨク纏まつて居り面白かつた。古顔がチド馬力かけて書いて呉れんといかん等々、お茶菓子代りに、盛り澤山のゴ愛嬌、拙者少々面喰つて目をパチクリ!

歡談數刻後社長は肅然態を正し膝一段乗出し、聲を密め額に八字を寄せ、實は留守中に一大事が出来たのじや、と先づ私の下胆を抜き。ヤララ雜筆四月號を取出し、XX銀行のTさんの縮尻話の記事を示して曰

『人の批評につきては甚深の注意を拂ふて居たのじやが、弘法も筆の誤り猿も木からの諭の如く○○○○のFさんのいたづら書きを其のまゝコシツブ材料にしたのさ。TさんとFさんは親友の間柄故、一種のゴ愛嬌——茶番に過ぎぬのだが、Tさんを

カンメタに怒らせ、到底小型の蒸氣ポンプでは鎮火しさうも無い、同人連鳩首漫議の結果大和町の大型ポンプを出動させる事に一決して居るが、イヤハヤ大いに手古摺つてネー!

陳謝特派大使—光榮至極に存し奉る、併し社長とFさんと私の縮尻珍話をゴ披露に及び、誌上でTさんの諒解も求め、而して使命を簡単に果さんと智慧を絞る。但し社長の縮尻は前述の如し。

實彈射撃

事は舊聞に屬す、華聖頓會議の後であつた、白髮童顔のFさん夕方散歩か宴會への道すがらか、京城郵便局の前まで来た處で、突然巨砲一發ブツ放した。路傍に居眠りして居たテゲクンは吃驚仰天して逃げ出し、通りがりの幼稚園の小供はヒヤヒツと悲鳴を揚げると云ふ騒ぎ。Fさん左顧右盼し少し驚勢じやつたのうと云ふ表情然るにアラ不思議!其刹那からFさんの腰附と歩みぶりに異變を來した。Fさんは京喜久に飛び込んだ。玄關に迎へた女中は鼻をヒコツかせ乍ら妙な顔してFさんをお座敷に通さんとすれば、Fさんは手を振り乍ら、オイ女將さんと呼べ女將をとせき立てる。女將は何事ならんと飛んで出れば、實は斯くメタと耳に口を當てヒソメメ話し。女將はアラメタと腹を抱へ

笑聲爆發

數年前の或朝私は五時半に飛び起き、六時半の列車で仁川に行つた。仁川で朝めしを喰はんとした時、ハーツと入歯を自宅の洗面場に忘れて來た事に気が附いた。小供か女中が何の氣なしに捨てたら南無三大變だ、新調すれば約百圓と十數日間の不便を忍ばねばならぬ。千思萬考の結果愚妻に宛て親展の密電を飛ばした。其電文に曰『イレバユドノサガセ』仁川から自宅に歸つたのは夕刻であつた。只今ツと大腔張り上げ玄關の扉をあければ、お歸りなさいと愚息ども一勝隊玄關に整列し『イレバユドノサガセ』と節面白く合唱を始め、合唱が終ると、ウワーツと喊聲を擧げ、座敷に殺到し、茲でも笑聲爆發!、極秘のつもりが既に露現!拙者の周章狼狽

は予想像に任す事とし、敗亡の私は早速書齋に逃げ込んだが、母も愚妻も抱腹絶倒、イヤハヤ飛んだ大失策をやつた。秘密漏洩の罪輕からずと其晩愚妻に誹責謝罪せしめようとするは、濱口ライオン首相が議會で野黨の面々の質問を取扱ふよりも簡単に、だつてもサーと笑ひ崩れて相手にしない。イヤハヤ重ね々々散々の敗亡に、萬策

盡き蒲團引ツかぶつて余儀なくグー、グー。而して此事は秘中の秘として口にも筆にもしなかつたのであるが、雜筆愛に燃ゆる私は茲に之れを發表する。

此漫筆により必ずやTさんも釋然水解し、偶には面白い原稿を寄せて下さる事と信じます。イヤ………お願申上ます(五、五、四日)

が飲監でせう。
相場はシンガポールを中心市場とし内地物は大阪で支配して居る様です。
値段は先年よりも二割安くなりました。

カーテン
一般に藍系統が一番出る様です。近年人造絹糸の發達につれ織地が下つて來ました。
カーテンだけは採光、間取、嗜好を多分に加味しますから私の方として何とも申上げ様が無いようです。流行はやはり外人を標準としませうか。

本場銘仙
毛糸各種

ち、ぶ、や

本町二丁目
(電話五〇五番)

夏物の話

藤木商店談

夏帽子
日毎に夏めき行きて、街頭のストローハットが目に見えて増して來た。

藤木商店を訪へば
流行?……京城ではマダ早過ぎますよ。併し一体に頭の高さが少し高く縁が狭くなつた様です。リボンはやはり黒がトップを切り、紺や茶、縞といふ變つた所もあります。
価格は昨年より二割安く八十

錢位から二圓位迄で、まづ一圓内外が普通でせう。

ネクタイ。

これだけは人の趣味、嗜好によりますからね。併し無理に云へば、縞物でモダン味のある柄でせう。

實行はやはり國産品が主で、フランス物が流行の中心を握つてゐる様です。

価格は上物が八圓見當で國産品は一圓二三十錢位です。

藤椅子

年々モダン味のある型へ、即ち實質よりも型的に清新化されて來た事は事實です。

品物は南洋、印度、臺灣から參りますが、南洋物が一番良く、臺灣物は堅牢ですが黒い艶のある事

近年住宅の増築と共に年々の賣高が多くなる事は喜ばしい事ですが品物は京物が多く英獨等からも參ります。獨逸物は少し派手味で三〇年型にふさわしい様です。
価格は一窓二十五圓見當で二百五十圓位迄でせう。

史話第六編

三木一彦

○松田學鶴先生の『日鮮史話』第六編は、全巻悉く朝鮮の大儒李退溪に關する記述であつて、益を享するところ頗る多かつた。

○巻頭の『陶山書院の追憶』などは、まのあたりこの大儒の隱栖地を目睹するが如く山容水態鬱鬱として、眼前にある。

○『日本にて翻刻せる退溪の著書』、『日本朱子學者の退溪觀』、『退溪の學流を顧みて』などの諸項目は、流石に精博周到を極め、隨所啓發せらるゝところが多い。

○掲出の寫眞版、いづれも鮮明殊に記述の老成、平淡、懇切なのは、深く敬意を表すべきである。

ばならぬ。そこで始めて幽玄なる人間社會を体得することが來て安

紺や茶、縞といふ變つた所もあり
ます。
価格は昨年より一二割安く八十

品物は南洋、印度、臺灣から参
ります。南洋物が一番長く、臺灣
物は堅牢ですが黒い艶のある事

は、深く敬意を表すべきである。

眼いろいろ

山本吉久

(校洞公立普通)

やりたいのである。

更に人間を造るべく第一線にあ

る教育者の眼は、どんなのである

か。やるべき仕事は随分多い、語

方や算術、地理や歴史や理科と數

へ來つたら兩方の指では足りない

程である。近來は社會的事象の要

求として幼少の初等學校兒童に職

業科までが増設せられる事になつ

た。此の間口の廣い學科を平押し

に押しつけて行つてゐるのが今日

の教育者ではあるまいか。之等の

教育者の眼は最右翼から最左翼ま

で萬遍なく配られてゐる。實に教

材の研究に教授様式の練達に感心

する外はないのである。併し斯る

科學萬能の教育眼は教育の一面を

見てゐるので、決してその全体を

見てゐるとは見えない。なぜならば

科學に依つて出來た要蘊は科學に

依つて破壊せらるゝ様に、科學に

固まつた人格は科學の爲に破壊せ

られないとも限らない。だからこ

んな教育眼に眠んでゐる教育者は

如何に手腕があつても世間態に評

判がよかつてもそれはやはり亂視

者、近視者といふ外はないのであ

る。これ等は要するに世間を平面

的に眺めてゐるので、そんな觀察

なら三つ子にでも出來ることであ

る。そしてそんな幼稚の眺め方は

往々にして誤り易いばかりでなく

動き易く又動かされ易いのである

それで教育者は世間の立体型を把

捉することの出来る慧眼を有たね

ばならぬ。そこで始めて幽玄なる
人間社會を体得することが來て安
養の世界に通ずる一道を見出すの
である。天の實體を掴まないで天
の道を説くことは出來ないやうに
社會の幽玄性を認められない眼に
はほんとうの人格への教育を建設
することは出來ない。動き易い、移
り易い眼、それは矢張り教育者の
斜視であり亂視である。

中央風聞記

千獸山房

○最近威北の農場を視察して歸
つた湯山一郎君、『農場に入ると
朝鮮人の小作やその子供等が大勢
出迎へに來てくれるし、それに記
念品まで贈られて見ると、非常に
懐し味がある。僕は政治をやめた
らあそこへいつて、朝鮮人の小作
人と一緒になつて百姓になるつも
りだ』と御大層な御満悦。

○さすがの宇垣陸相も、一ヶ月
餘の病床呻吟はよほどこたへたと
見え、斗酒なほ辭せぬ大酒豪が、
今後は一滴も飲まぬといふ誓をた
て、本多秘書官にも禁酒を命じた
スルト本多中佐、コンと一ツ頭を
下げて、『ハア、閣下！私も六十
三歳になりましたら、閣下の命を
奉じます』

○松田拓相は生れ故郷の大方が
フグの産地なので、小さい時から
命知らずのフグを食つたものだが
最近は一切食はなくなり、宴席な
どでフグの料理が出やうものなら
『君、フグだけはよしたまへ』と
うらめしさうに忠告してゐる。口
の悪いの曰く、『大臣になりや、
それですく命が惜しいさ』

眼には複眼もあれば單眼もある
同じ人間の眼にも老眼もあれば近
視もある。たまには斜視、亂視も
ある。吾人の如きはその亂視のた
めに苦んで居る一人である。併し
眼といへば普通には正視であるや
うだ。だが近來は書物の文字が細
かになつたり精巧な機械をいじ
やうになつて近視眼が増加したと
いつて、醫者や教育者仲間には相
當心配の種となつてゐるのである
併しこの何れの眼も悉く外界の刺
激を受け込んで之を神經中樞に移
換して形態や色彩を認識する生理
的機能は同一である。今茲に吾人
の述べやうとするのは、こんな眼
と、こんな機能ではない。近視で
も遠くが見へ亂視でも正視するこ
との出來るその眼とその機能であ
る。

世間には金に眼のくれる人、色
に溺るゝ眼、食ふことに飽かない
眼、など色々なものがある。こん
な眼は吾人の見解を以てすれば亂
視ならざれば近視である。どう見
ても正視の所有者とはいひ得ない
のである。唯物觀や自然主義者の
多い現代には止むなき事とはいひ
ながら實に慨はしい事である。又
經濟生活に追はれて居るものには
世間の廣さは眼につくが、その深
さの測定が出來ないから我利主義
に墮落するのである。こんな人は
生理的にはよし正視の持主と誇つ
ても吾人は亂視だ近視だといつて

金佛笑ふ

大浦貫道

(心の友社)

日向の馬鈴薯のやうな禿頭をべたんとたゞいた。一座は又哄然として笑つた。もちろん、金佛さんも顔をあげて笑つた。

山北邊で兩陛下の御還幸に遭つて、車窓に向つて一同最敬禮をした。窓から金山雲に、まられた富士が見へると、島村どんが又、

『おいどんが、地理を習ひはじめた時、ヒマラヤといふ山は富士よりも、ずつと高い山と聞いて、そぎやん馬鹿んこつあるもんかと、大に奮慨して、先生に喰つてかゝり申したもんぢや』金佛さん又大いに笑つた。その後新聞に雑誌に、加藤さんの記事が出る、そのたびごとに『例の通りになりきつて』と前置されてあるが、自分はそれを見るたびに、島村さんの口もとを見ながら、他愛もなく、笑つた。あつた剛堂宰相の顔が思ひ浮べられてならぬ。

◆御尤もな話

三木一章

○これは、府内の某小學であつたこと……受持の先生が、生徒に向ひ、『今日は皆さんの中から、級長をきめます。ついでには皆さんは、この中で、誰か一等級長になつたらいいか、銘々紙に書いて、コ、へ持つて来て下さい』——一同は大に考へた。そして最適任と思ふ人名を認めて、先生の手許へ出した。

○先生は、いちくそれを調べたが、先づ『ウーン』と一つ唸つて、『ナール程、イヤ御尤も……』、どうしてさうかといふとその殆んど大部分が、『先生、それは、私に限ると思ひます』

あなたは、年中汽車の中で暮してゐるで、ずいぶん道中で、面白いことを見聞なさるでせうなあ、といふお訊ねに、しばしばあつか

る。そのたびごと、微笑されるのは、笑はぬことにかけては、今のライオン首相より、一段上手のむつり屋との評をうけた、かの金佛首相の加藤高明さんが、汽車中でガラ／＼と笑つた顔が、まぎ／＼と憶ひ浮ぶ。

——年も月も忘れたが、今から一ト昔ばかり前の、ちやうど青葉の頃であつた。たれに著つて貰つたか、これも忘れたが、たしかに自前ではなかつた。東京から京都に一等の切符を買つて貰つて乗つたことがある。こゝもと貧僧齋を得て、落ちつかぬ尻を無理に落ちつけやうとしてゐる時であつた。

ドカドカと乗りこんで来たのは、新聞の似顔でのみ拜見してゐる、加藤高明子には、前の大蔵大臣若槻禮次郎閣下、それに、日露戦争實記といふ博文館発行の雑誌によつて、少年時代深く頭の底にやきつけられてゐるところの、島村加藤の兩大将であつた。他に陣笠と思はるゝ代議士が一兩名である。

こいつは偉い奴と、乗り合せたものだと、新聞も雑誌もほりすてゝ、眼を光らせてかたづを呑んだ加藤さんと若槻さんは、こいつ辻散な曲者と睨んだかどうか、しきりに聲をひそめて密談をはじめた

大方時局の話らしい。兩提督は新聞に目を通してござる。これでは仕方がないと、こちらも、新聞を手にした。

横濱あたりを過ぎた頃であつた若槻さんが、突然、加藤さん——友三郎大將に、

『あなたは、近頃、お孫さんが出来たさうですか』

と、祝詞とも、質問ともつかぬ問を出す、傍の島村大將が、

『ハハ、孫たちゆと、氣に入らぬさうぢや、娘の兒たちゆののだ、僕の知つちよる男が、孫がお祖父さんと云ふだのに、大いに抗議を申し込んだちゆうからな。なんでもお母さんの、お父さんいふのださうな。アッハハ、』

一同思はず吹き出した、この時ひよいと、やかましやの加藤さんは如何にと見れば、太い眉毛を下げて、相好をくづして御座る。やあ評判の金佛さんが、笑つてるぞと思ふと、笑ひ上戸の筆者は、可笑しくならなかつた。すると、又若槻さんが、

『島村さんは、何時見ても同じことですか、なか／＼お若けえ……』

とやつた。島村どん、
『そげえこつあるもんか、帽子をとつたら、こん通り一大事ぢや……』

と云ひながら、當の帽子を脱つて

散な曲者と腕んだかどうか、しきりに聲をひそめて密談をはじめた

と云ひながら、當の帽子を脱つて

その殆んど大部分が、「先生、それは、私に頼ると思ひます」

やまと歌

國風會京城支部

野遊

○ 足立丈次郎
若草のもえたつ野邊に伏しなから
そらに雲雀の聲を聞くかな

○ 西田 明松
草をつみ花を折りつゝ日もすから
ひはりなく野に遊ひくらしつ

○ 工藤 武城
うなる等のさふかまゝに野へに
いてゝ草をしとねに蝶を見るかな

○ 田中秀一郎
もゝ鳥もわかため歌ふ心地してう
たけ樂しき春の野邊かな

○ 佐々木杏造
すみれさく野邊なつかしみ千等つ
れて若草むしろしきて遊ひつ

○ 安東都天子
草さき早蕨もゆる春の野にいてゝ
一日をあそびくらしつ

○ 淺井佐一郎
すみれさく野邊にうかれて春の日
の暮るゝもしらす遊ふ樂しさ

○ 安東貞一郎
みやひをの友打つれであくかれむ
すみれ浦公英匂ふ春野に

○ 今村 雲嶺
雲雀なく野邊にすみれをつみはや
しいへ路忘れてけふもくらしつ

○ 同人
春風に心の塵をはらはせてのへに
一日を遊ひくらしつ

○ 濱野鍾太郎
なかき日も飽かて遊へり春の野に

暮るゝもしらす若菜つみつゝ、
○ 松寺 竹雄
うかれゆく胡蝶にも似て日もすか
ら花より花に廣野たとりつ

○ 中島 貞信
うから等と雲雀なく野に花すみれ
つみてわりこをひらく樂しさ

○ 工藤 武城
ことしけき世にあきはてしわれな
れや鷗を友にとしをすこさん

○ 田中秀一郎
こきつれてつり舟かへる夕ぐれの
波の上白くとふ鷗かな

○ 西田 明松
廣々とはれ渡りたる湖にこゝろの
とけく鷗うかへり

○ 足立丈次郎
いそ崎によせてくたくる白波と見
しは鷗のみたれとふなり

○ 安東都天子
あら波にゆられくてさたかには
數もしられす鷗うきたり

○ 淺井佐一郎
朝なきの波にうかへりかもめとり
さしくる汐に心まかせて

○ 佐々木杏造
わたつみのひろきこゝろにならふ
らん波間のとかに眠る鷗は

○ 中島 貞信
ことゝはん波にうきねの鷗にも足
にひまなきおもひありやと

○ 松寺 竹雄

和歌の浦や風もしつげき松かけの
なみに鷗のむれ遊ふ見ゆ

○ 今村 雲嶺
ことしけきうきよをさけて海原を
こゝろひろくも鷗とひかふ

○ 安東貞一郎
波枕いかにのけき夢や見む浮世
の風をしらぬ鷗は

○ 濱野鍾太郎
あたたけき波を枕に眠りつゝ鷗は
夢に何を見るらん

行路花

○ 濱野鍾太郎
のとけさに都を出てゝ一人旅行く
手の花をわか友として

○ 安東貞一郎
分け行けは袖もにほひて山かけの
路には花の吹雪してけり

○ 今村 雲嶺
うら／＼と霞こめたる岡越のみち
の櫻をしはしなかめむ

○ 松寺 竹雄
うら／＼と心のけき野路かな行
くさき／＼の花盛りにて

○ 中島 貞信
春にのみもうくる鷗かあかた路の
かたへに匂ふ花の盛りは

○ 佐々木杏造
道の邊に若草むしろしきはへて咲
きこそ匂へ花の一本

○ 淺井佐一郎
たちとまり見てや行かまし山櫻後
嵐ふかはちりもこそすれ

○ 安東都天子
道の邊に咲きつゝきたる櫻花まつ
杖とめてあふき見るかな

○ 足立丈次郎
かへり路の花の木かけにたちよれ
は折から月も匂ひ出たり

○ 田中秀一郎
咲きつゝく花の木かけをすきゆけ
はつゝれのそても香に匂ひつゝ

資本家にお辭儀の仕様考へる

横山巷頭子

(南山吟社)

【四八】

上つたらしい。
其處でKは或日異常な拔擢榮進の選に入り、此頃何處かの支店支那人とかをしてゐるそうである。なんとお辭儀の効用の偉大なることを見逃しては不可ない。

◆夜のお祈り

北漢山人

○何代か前の逓信局長持地六三郎氏の夫人は、有名なクリスチャンであつた。

○この人には、朝夕のお祈りの外にも、二つ夜中のお祈りといふのがあつて、御良人でも旅行されるとき、きまつて夜中に、お子さん達を叩き起される。「お母ア様、今は夜中ぢやありませんか」「判つてゐますよ。さア、これからお父り様のために、皆で夜中のお祈りを致しませう」——同緊張——ソコで、「ア、神様、旅行中不慮の出来事のないやうに、別して有らゆる誘惑に對して、夫が勇敢でありますやうに」

○龍山瑞龍寺の和尚……評判の變り物である。

○お経は、たつた一ツしか知らぬ。「和尚、いつも同じお経ですナ」、「ウーン、その一ツも、ワシにはよく判らん」

○一日、井戸の底で、井戸浚えをする中、和尚窒息した。上では大騒ぎをしてゐると、ものゝ三十分位——井戸の底から、「ヨイ生き返つた」

○武田範之和尚の紀念寺です。

掲題は或る洋服細民の詠んだ川柳である。ブルジョアに御辭儀を強ひられてゐるプロレタリアの悲痛な叫びであり、自嘲である。

雑筆社のF君は長身巨軀。實に美事な体格の所有者である、ガツシ／＼と靴踏みしめて事務室へ押通る姿は偉觀である。ロイド眼鏡にオールバック、机の前へ直立不動、姿勢正しく立たれた時には些か恐れを爲す。張りとはされさうな懸念に襲はれるが、安心させるものに同君の眼がある。在外眼がおとなしい。

そして彼の長軀を二つに折つて御辭儀をする事を知つてゐるから可愛い。仲々原稿を頂戴するのに骨が折れます。新しい靴でも二三ヶ月履けば駄目になる程靴けまはるんです。こちらなんかいゝんですが蒙り人の處へ行けば相手にまして呉れません、比較的學校の先生方は可愛がつて呉れますから助かります。

一片の菓子屑に麥酒樽大の足を屈して最敬禮をいとはぬ動物園の籠兒、象クンにも劣らぬ、お辭儀の百萬遍を繰返しても二三枚の駄文を得んとする原稿督促子の努力同情に價するものがある。

有閑階級の名士諸氏、書けるものならば潔きよく督促子の爲に書いてやつて頂きたい。それからF

君は、なんぼう腹が立つてもお辭儀を忘れては不可ない。

昔こんな話がある。Kと云ふ男が學校を出ると直ぐ第一銀行本店へ採用された。行員は何人居るか知らないが頗る大勢である、そして其の行員の中には豪い實業家のぼんちや名士の紹介で入社した羽振りのいゝのが、うよ／＼してゐる。月給なにか物の數ではない出動も手俵と云ふすまじさ、到底Kなんか存在を認めらるべき資格を持たさないのである。

處が此の男に妙な癖があつたのだ、癖と書いて可笑しければ習慣である。毎朝銀行へ出勤すると、必ず重役室を二巡して廻るのだ。それも只廻る丈ではない、ゴツン／＼と靴音高く堂々と二巡するのがある、そして團を排しては。お早う御さいますと挨拶をする、相手が居らうが居るまいがベコンとお辭儀を残しては次の部屋へ行くこれが殆んど毎日の日課であつたのだ。

初めの一月程は重役も、彼奴新參だから位ひに思つて氣にも止めなかつた、處が一月が二月、半年一年たつても例の通り堂々めぐりの御辭儀を止めそうにもない。

鈍感の重役諸公も、やうやく頭をかしげ出した。彼奴面白い奴だ鳥渡見どころがあると食堂會議に

のならば、深きよく、癡子の爲に、書を
なかにし、出した、
鳥渡見どころがある、と食學會議に

○武田龍之和尙の紀念寺です。

易の新境地

(承前)

岡村介石

(明治町小唄坂)

若し兩子が云ふ如く一方のもの
であるとしたら、人間の性なるも
のは、宇宙の眞理が根元でありま
すから、假りに性が善なるものと
すれば、宇宙それ自體も、善なる
ものと觀なければならん、然らば
宇宙全体は常に晝ばかりあると全
時に、お天氣ばかりで無ければな
らず、又、惡なるものとすれば、
雨天ばかりであると全時に、常に
夜ばかりで無ければならぬ勘定と
なります。

果して然らば、この人間は、男
ばかりであるか又は、女ばかりで
なければならぬ。夫れでは晝夜も
無ければ春夏秋冬もなく無論男女
の對照が無いから心中もない。そ
んなら淨りのお半長右工門の心
中は、在り得べからざることを近
松門左工門さんが空想したので根
も葉も無い嘘八百だと云ふこと
になります。さうすると近松門左工
門さんは地獄に墜ちて、遠うの昔
に舌を抜かれて御座る筈で、辯解
の言葉が出ますまいから、お氣の
毒なことで御座います。淨りりの
虚實け兎に角として、此現實を如
何にしますか？。

晝夜があり、春夏秋冬があり、
早魃があり暴風雨があり、男女が
あり兒が出来て、遂にサンガリ夫
人の産兒制限法を、日本でも採用
しなければ、逆も政府でこの次第
に殖へる窮民の救済は仕切れんと
云ふので、目下その筋で、之が適

法の詮議中だと云ふことでありま
す。反之してイタリーでは人口が
著しく減るので、産めよ〜と猫
でも杓子でも産んだものには政府
がウメ〜褒美を出したり、多産者
には税金までも免除して、獎勵實
にイタリー盡せりである。夫れに
年々減る。日本は褒美も出さず罰
金も取らんのに年々殖へて政府が
困る、これが本統の産害即ち産の
害と云ふので御座いますしやう。

この事實から見ましても人間が
人間を自由に産めるもので無く、
その國の風土が有つ、自然の作用
が、人間を産むものであることが
判ります。この自然の事實に徴し
て人の性は純善でもなく、純惡で
もなく、勿論宇宙の眞理は一元で
ないから、人間は如何に聖人の様
な風格を装ふても、本來善惡兩性
を兼有してゐるもので、唯善的素
質を多量に有つと、有たぬに因つ
て、又その境遇の伴せなると、伴
せならぬ由つて善性を發揮するも
のと惡性を發揮するものとあるの
であります。

元來自然の眞理は善でも無く、
惡でも無く積極と消極の混合であ
るから、人間に純粹の男性もなけ
れば純粹の女性も無く、男子が女
性の幾分を含み、婦人が男性の幾
分を含んで男女兩方共通融合性を
持つてゐる者でありますから、夫
婦合性の完全な結婚は、男女を交
互に分毓するものであります。男

性の陰囊が二つあり女性のランソ
ウが二つあるのは、明に男女兩性
を具備してゐる證據であります。
以上の如く人間は善となり惡と
なる共通の氣質性因を兼ねて居ま
すから、平素の修養法は不絶善的
習慣を強くして、惡心や不機嫌を
挑發する、大氣の誘惑に打勝つや
う堅い道念を持つことが肝要であ
ります。

基本的氣質に就きまして茲に愉
快なことがあります。夫れは昨年
一昨年如き、特殊の陽性大氣年
間に生まれた人は、普通の大氣年
間に生れた人と異つて、多くは英
雄豪傑的氣性と、非凡の才能を素
質に稟けてゐることあります。
従つて本年二・三才の子供達が四
十才から七・八十才になる頃、日
本は學術、政治、經濟、軍事その
他各方面に亘つて、非常に多くの
英才巨人を輩出して、帝國の國威
を著しく世界へ發揚することが豫
期されるのであります。

それ程大氣學から觀ました昭和
三四年の氣象は、著しい特徴のあ
る年で、私の推測では斯る大氣の
年は、百二十年か或は二百四十年
振位に廻つて來るものでないかと
思ふほど稀な年であります。

識者が克く時代が人を産むと云
ひますが、夫れは時代が人を着色
するのであつて、人の素質が持つ
運命から申しますと、時代が人を
産むと見るのは、運命の第二次的
現象を非哲學的に識者が觀察した
もので、その時代に出色する偉人
的素質は、それ以前に大氣が産み
付けてゐるのであります。その産
み付けられた偉人的素質が、時運
に際會して當面の花と咲き實と成
るのであります。

さうして又偉人的素質に産み付

ける大氣の流行する年に當つて、丁度母の体内に妊娠するやうになつた、第一次的運命の因縁は、神秘にして人間には解せられませんが偉人になる大氣の年に宿つたが故に、後年適當の時運に際會して國家社會の爲めに、偉人的天賦を發揮して、大功を奏するのは、妊娠當時の大氣作用に原因する、第二次的運命の現象と解せられます。そこで、チト六ケしい注文で御座いますが、男女共に唯年頃に成つたから、大學を卒業したから、結婚したら可いと云ふ、従來の慣例に従ひましたのだけ、良い畑には良いものが出来るが、悪い畑には不良のものが出来て、折角優良の子孫を作らんが爲めの肥料の目的でした、教育の効能が現れず、家庭的には優良の子孫、國家的には優性人種改良の目的を達せられせんから、人間の大氣的素質の優良なる人を選択する事は勿論、且つ偉人的英才、傑物を妊娠する大氣流行の年を狙つて、結婚することを心得ねばなりません。これけ實に國家的の重要問題でありますと同時に人の父母となるもの、深甚に考慮すべき家庭的社會的に意義の深い任務であります。

次に吾々人間は同じ腹から生れた兄弟でも一人／＼異つた素質を持つて生れ、社會の萬人が萬種の氣質を持つてゐるのは皆この妊娠中の陰陽大氣の作用に由るものであります。既に各自の基本的氣質が千種萬種に異つて居りますから日々に自然界を流るゝ大氣の陽性と陰性とに由りまして、持前の氣質に順應したり、或は反逆したりする關係から人の氣持が日々變化して、左したる理由も無いのに時日の約束を變更したり、一旦斷つ

た縁談を復活する氣になつたり、或は係のお醫者に心配させたり安心させたり、その他種々精神的變化、肉体的變調を見るのであります。

以上のように我々人間の氣持が大氣作用の順と逆とに由つて、何時變化するか自分で自分の氣心が保證出來ぬ自然の支配下に措かれてありますから、他人の氣心が當テにならぬのは道理であります。今回の總選舉に於て政友會がその豫期に反した大敗に終りましたも、田中内閣の非政ばかりでなく此節の大氣關係が人心の變化を促進し

◆東京釜線閑話

三木一彦

○四月下旬……例の大洪水のために、京釜線美江島致院間が、列車不通となつてゐた時です。釜山から京城へ入る客は、美江で汽車を捨て、アレから島致院まで、自動車で連絡したものです。

○ところが、數日間の斯うした天災のために、乗客は、殆んどこぼれる程の満員。従つて美江の、自動車の乗り場などは、手を洗ふやうな大混雑。係員も、警察官も汗ダク／＼で、整理に骨を折つてゐる。

○その最中、一名の紳士——乗客は、ツト警察官の方へ歩を運び『どうも君らの整理は、マルデ成つてゐない』といひ出した。警察官は憤慨した。『我々は、誠心誠意でやつてゐる。方法としても、これ以上最良の手段はない。アナ

たことが與つて大に原因して居ります。これに就ては曾て私は本誌上に左の一文を發表いたしました『新藥、自惚くだし』

以上述べました事によつて大氣の作用が人間生活に重要な關係あることは、大體御判りになりました。然らうと存じますが、以上は標題の通り大氣學の一片を申上げたわけ大氣學の實際作用と効能に就ては未だ大に興味ある資料が數萬件御座いますが本日は時間の關係もあり、その用意を致して居りませんので、また後日機會を得まして、御話申上ることに致します。

タは、何をいはれるのか』、圓らず大論争が始まつた。双方少しも屈しない。とう／＼この喧嘩のために、空しく一時間を費し、自動車は、一台も出ることが出来ぬ。○たまり兼ねた他の乗客は、係員を促し、兎も角も第一台を出發させることにした。『用意！よろしいか』『ヨシシ』『行けッ』、この瞬間まで、警察官をいぢめ抜いてゐた例の紳士、ツト身を翻すと、アバよ……左線なら……ヒラリとその自動車に投乗。アツと驚く喧嘩相手を尻目に、風を切つてスィッ……。

○これを見た數百の取り残され組、啞然として『ウーン、素早い奴ぢや』、『なんとズルイ先生も居るのう』、『イヤ世の中は、アノ手に限る』

○ソコで、たま／＼自動車に乗り合せた一乗客、紀念のために、ソイツとその紳士の鞆の、名刺挾に眼をやると、ナント其處には、麗々として『朝鮮筆素……野口遼』

その政雄君が、近き將來に、この希望の世界から、人生から、去り

郷友

奥永政輝

(鈴木運送店)

その政雄君が、近き将来に、この希望の世界から、人生から、去りゆくのであると思ふ時、一日でも永らへて、神の奇蹟によつてでも『バイブル』にある様な幾多の奇蹟が、政雄君に與へられたならばと、衷心祈らずにはゐられない。

◆法曹風聞記

北漢・山人

○辯護士のKさんが、内地へ發つてしまつたあとで、『あれア君孤兒院出たよ……岡山孤兒院の出身だよ』といふ話を聞いた。

——もと孤兒として拾はれた——といふことを、人生最大の恥辱と考へてゐるかも知れんが、我々は決してさうは考へぬ。孤兒——それは、天に對し、人に對し、少しも恥づるに値ひしないことだ。

のみならず、さうした境遇にありながら、アノ學殖、アノ人格、アノ氣品を養ひ得たK氏は、むしろ一層尊敬に値する人といへやう

○兄弟三人、父母なく、身寄りなく、悄然として、道途に彷徨してゐたのを、アノ岡山孤兒院の創立者石井重次氏が、涙して拾ひ上げたのださうな。しかも學問的天賦の豊かなのを見て、『この千のち必ず世の鹽たるべし』と、大學にまで送つた。今日K氏が、その後半生を、世の中にために捧げんと奮ひ起つたのも、淵源するところが判る。石井先生の御期待の副はんがために——これがアノ人の志であらう。スベテは、我々に大きい感激を與へる——。

一昨日からの五月雨はからりと霽れて、今日は恵まれた日本晴だ。庭一面は新緑につままれて、緑樹や草花が初夏を謳歌してゐる。

今日は朝からのんびりした気分だ、裏の庭を眺めてゐると、サンデー毎日の『夏季特別號』が投げ込まれた。

夏の感覺を充分にそよる表紙畫『綠蔭』の題下に、美人の繪が書かれてゐる。まるで戀人にも會つた時のやうな、心持ちで、一頁一頁繰り擴げて見ると、

池部釣氏のまん畫『別府温泉氣分』が眼に着いた。と急に郷里の近くにある湯の町が戀しくなつた。郷里に居る時は、年に三度位は湯泉町の、氣分に浸つてゐたのと思ふと、遠く離れてゐる自分がうらめしい様に思はれる。

別府は好きだ、俗世間から離れた、ゆつたりした氣分で、湯にしたつて遊べるから好きだ。郷里に歸つたら、湯の町に行つて、こゝろした雰囲気にしたつて、心を靜かに、やすめたい。

かうして、別府の事を思ひ出し又考へてゐると、近くにある郷里の人々の上に思ひは馳せる。

そうそう、この間母からの手紙に『政雄君が病氣だ、到底全快はむつかしかろう、お前の幼き時に一番に仲の良かった友達だから、すくに見舞狀を出しなさい』と云つてよこしてゐたのに、未だに、

見舞狀も書きかけてそのまゝ出してない。政雄君は今頃どうしてゐるだらうか。

自分の運命が、自分の生命が、刻々と刻まれて、死の世界に近づくのも、知らずに生きてゐるのであるらう、再起の出来ないことも知らず、生の希望を捨てずにゐることであらう。幼い時の親しき友の身の上を考へると、一種特別の悲哀を感じてくる。

まだ小學校に通つてゐる時、近くの小川で鰯を掬つたり、鮒を釣つたりして、よく遊んだ。夏になると、學校の歸りに、水泳をやるのが常であつた。僕は未だ泳げないので浅いところで、岸につかまつて、兩足をバタバタやつてゐると、政雄君と外の二人の友達が出来て、いきなり僕の身體を、三人がつかまへて、脊の届かない所に持つて行つて、僕を溺らそうとして

そして僕に水泳の一日も早く出来るやうにして呉れた。そんなことがあつても、矢張り二人は、結ばれたやうに、仲が良かった。今晚僕の家で政雄君が泊ると、その翌晩は、僕が政雄君の家に泊ると云ふ有様で、二人は一刻でも離れる事をいやがつた。

其後僕が東京に立出をする時に一番悲しがり、心から別れを惜しんで呉れたのも、政雄君だつた。幼き日の親友として、僕の脳裡から忘れることの出来なかつた、

行旅雑吟

浅川伯教

扶餘にて

ちぎれ雲水に残して水鳥は山をむれ越す百濟國原

班宮の聖の御子のおさな姿そこら行く子にふと思ひ浮ぶ

山々のうねりを思ひ長閑さの空に浸りて大和思ほゆ

王宮の石と思しき散ばりて橋とも成りぬうすとも成りぬ

百濟塔

見上ぐれば心いつしか上にのび只すがくし百濟の塔

寂しさは千年過ぎし石の塔はるけくも寂しうつゝ心に

うつゝ寢の胸に浮べし百濟塔うつゝはいつか夢と甦れり

鈴賣りの鉄鳴らして過ぎ行くを塔の芝生に呼べばもとりぬ

百濟王陵

大き石の圍む墓に一人入れば死の静けさはごとそと思ひぬ

牛の鈴

なだら山片面暮れて道見ゆるその道遠く牛の鈴なる

離れ牛畑に出づれど里人は日向こぼして追ひも得出でず

松の山

いくつかのなだら赤山打ち並べ小松並木の踊れる如し

松の木をゆりては落葉集む事聞けば優しも見ればかなしも

くねりあへる松にしあれど下枝もまも知られて木下明るき

窯焚き

諸士の器は窯に納められ粟酒くみて清き火切るも

なりあいの細きにも似て窯焚きの煙は太く空に昇るも

焚き出でし煙は空にのび昇るは土塔けよよき玉と成れ

色見穴のぞけば器体とけゆれてばつと光れる『ハイライト』かも

窯たきの濟める朝ゆつかれたる窯は寝ねたりかけろうの立つ

大阪の菊池庫郎氏と別れて二十年或日不意に歌集を贈られて

君なれば大阪に居て歌をよむ『あきまへん』とも云はで歌を詠む

○ おたがひにやからふゆれど生きて居る
二十年過ぎて尙生きて居る

○ はんかちで髯をふく時おだやかに警句
を一つ吐く君にして

壺

紙包み開けば壺のころび出ぬ千等はそ
ろふて『又壺』と云ふ

○ 爲す事の多きを爲さず壺と居て只ほん
やりと一日暮るゝも

ち来る
五月十九日小弟清涼里より苗を持

月見草、ほゝつき、あやめ、とちの苗
此處に其處にと庭掘り歩く

○ ほゝつきをここに〜と姉いへば末の
弟の『シャベル』もて来ぬ

子供

末の子が兄に抱かれて寝たりけり珍じ
き事よ母し居らねば

○ やからだち夕餉につけば寂しくも父と
云ふきに我れも座るか

庭

みづぎの小さき庭にのび勝り葉の手
ひろげて雨を受くるも

○ 桃の種捨てしがいつか木となりぬ雀來
鳴きてあざら虫つく

本町

つり合ひを見せるがに行く二人連れ我
れも後からつり合ひを見る

癩に障る

中島 司

(中央朝鮮協會)

敢てむづかしい譯でもあるまいが、
どうもメートル法といふ奴は癩に障る
敢て慣れやうとしないから、兎角面倒
臭い。宅で家内が米屋の男衆に『十五
キロ屈けて下さい』と言つてるので、
十五キロとはどれだけだと聞いたたら、
一斗ですよと家内が言つた。十五キロ
グラムが一斗とは判つたが、三斗五升
が何キロかは、一寸即座では面倒だ。
一里一哩と云へば、大抵見當がつくが
三キロメートル五キロメートルと云は
れて、一寸まごつかざるを得ない。

今日も今日とて(五月九日)丸ビル
からの歸りがけ、省電の中で讀んだ東
京日々の夕刊に、鐵道省が此の秋から
三等寢台車を運轉するといふ記事に於
て、此の新造車は「寢台の長さは一九
〇〇ミリ、幅は五六〇ミリ」と説明さ
れてあつた。耻かしながら未だメート
ル法に暗い小生には此の説明に依て三
等寢臺の規模が判きりとわからない。
日本の客車の大きさから推して大體の
見當はつくが、單に一九〇〇ミリの長
さほと言はれたのでは、さつぱり想像
がつかない。小生自身の不用意はさる
ことながら、兎に角面倒な世の中にな
つたものだ。五勺の酒と云ふとあたま
にびつたりと来るが、何リットルでは
どうもピンと来ない。

前厄

水谷九一吉

(尼崎伸銅會社)

松本さん

朝鮮を去つて最早や一年になります多年京城雜筆記者兼讀者の末席を汚した手前、且は平素御無沙汰の御託びとして、此機會に退鮮一ヶ年の感想を筆にしなければならぬ責務があります。何しろ昨今は財界の『旋風時代』で龍吉や篤介の様な心身の餘裕もなく閉口して居ます。何れ其内小閑を得たら大阪より見た朝鮮等々の漫文をものにする積りでずから暫く御猶豫を願ひます。小生當年とつて四十一才、正にこれ前厄です。京城では前厄の年の六月一日に朝早くから身を淨めて大神宮に詣で、夕方は知友親戚相集り盛宴を張つて大に厄年の無事息災を祈る慣習があります。現に小生も在鮮當時五六回此宴に列し、殊に小野久太郎さんの時には御本人から神前誓事の數々を披露された様に記憶して居ます。小生も今京城に居れば、差詰め本年六月一日には此厄除け行事を営み知友諸氏と酒盃を交へる所でせうが、合憎と大阪地方では此慣習が全くありません。

そこで當日は、小生も京城へ歸つた氣持になり、遙かに京城神社を禮拜するのは勿論のこと、貴誌六月號を讀み、在鮮知友諸氏に面談した心組で大に盃を擧げようと思ひます。何と妙案ではありませんか。之で無事に厄年をパスしたら、今度こそは京城へ御禮参りに出掛けなければならぬですナ。呵々。

床の牡丹

角田芳子

(南米倉町)

ゆきゆく春の日は照りかきうひの立
てる砂原きわみしらすも
れんぎよりの黄もよろしけれ小川べに
つゝじの紅にさきてむかへば
きそつほみけふきわやかに咲きいで
ぬ學校の庭の一もとまぐら
きわやかに子等よ生ひゆけたらちねの
母がいぬちをかけし汝ゆゑ
戀ゆれどもひたこゆれどもをさなくて
別れまつりし母のおもかげ(亡き母を
こひまつりて)
ずいらんのあえかなる花の一束のいみ
じき香り朝の机に
さ庭べに日はてり照るにあさがほの芽
ぶきあやぶみしば見入るかも
『ウシガキマス』と書きてやあらむ學
校に一年生のわが稻彦は
セルにかへて心すがしくうち對ふ赤の
牡丹の大輪の花
夜のくだち息ぐるしもよ室ぬちをめぐ
りて高き牡丹の香り(五・五・一〇)

將棋風景

溝呂木光治

(東京將棋七段)

「またか！」といふような面持ちで、谷頭六段は相手の顔を偷み見た。

しびれの切れるような、もどかしい相手の指し振だからである。相手といふのは、簗六段。

時は、明治四十一年、某所での對局である。

その頃の棋界には、高段者が至つて少なかつた。八段には關根、井上の兩氏、七段はなくて、六段に川井、簗、谷頭の三氏くらゐなものだ。だから、現今にくらべると、當時の棋界は、非常に振るはなかつたとも云へる。

ところで、棋客の棋風といふものは、よくその人の性格を現はすもので、谷頭六段は、譬へて言へば袋の中の尖鋭な錐だ。だから、見掛けはやんぱりしてゐるようである。その實、觸ればちくりと刺す。つまり穩和な調子のうちにも自らな才氣の閃きが魚の片鱗よりにちらりと光つて……で、その棋風は、輕妙で潑刺として——如何にも氣持ちがよい。然かもこの人、力將棋に侮り難い強さを持ち、その指し口も大體、早い方である。

ところが簗六段は、その反對にちよつと原始的なお百姓向きで……と云ふのは、棋風が牛の眼玉のように鈍重で、何となくおつとりしてゐるからだ。それでめて老練な力士のように、なか／＼ネバ、強いところもあるのだが、少々

思案の長い方である。

思案の長いことは、『黙考は緩りと實行は速かに——』といふ仁丹の金言には、最もよく充て餘まることだつたが——さて、谷頭氏にとつては、些か焦ら立たしい氣持ちにさせられる不快の種である。何故なら、簗といふ人は、自分の局面が優勢であればある程益々落着いて、慎重の態度を持し思案に思案を重ねると云つた風があつたからだ。『勝ち目であつたら何もそう考へる必要はないではないか』とは誰れしも思ふ。『その勢ひでズン／＼進めばわけもなく勝てるのに』と。だが、そこに、人の性格の相違がある。勝つて油断をしないところに、簗氏の面目が、躍如としてゐる。俗に石橋を叩いて渡るといふ奴だ。

だから、谷頭氏は、己れの劣勢にくさ／＼してゐる處へ、ゆつたり構えてゐられるものだから『またか！』といふような顔をして簗氏を偷み見たのである。

が、生憎なことに、簗氏は一向そんなことを氣にはしてゐなかつた。相手の焦れるのも知らないで只ち／＼と盤面に眼を据えての長思案だ。

谷頭氏は、いよ／＼チリ／＼して来た。この上、落ち着いてゐられたのでは、何のことはない、翻られてゐるようなものではないか！一體、勝負事は、何の場合でも

さうだが、相手が勝ち目の癖に、考へ考へゆつたりやられるのが、これが一番觸らぬ。

「ヨソ、先きがさういふ了解なら……」

と谷頭氏は、苦戦の中で辛らくも相手の緩慢には諦めをつけた。そしてその代はりに『今に見ろ！』と唇を噛んだ。網を張る獵師は、氣長に獲物を待たなければならぬ。

——その時である。簗氏の龍玉が五五へ進んで来た。

『そら、来た！ 待てば海路の……』

で、谷頭氏は、小躍りする程の氣持ちをち／＼と抑えて、秘かに北冥笑んだ。獲物が……、それも大きな獲物が、どうやら網にかゝりそうだからだ。

そこで、五九に隠居してゐた自軍の角將をそいつと七七へ進めて澄ましてゐた。それこそ、實に獲物を逃がすまいための恐ろしい鬼！ 而かも、その鬼は、龍玉が逃げると、敵玉の側にズバリと成り込む事が出来る。そうなつては、敵が如何に藻掻いても、一寸軽く防く手がない。まづ、完全な鬼を掛けたのである。

サア、これで、主客はガラリと一轉した。

【四五】

つたわい！と内心、失望の色を隠せなかつたが、口に出しては何とも言はない……。この人、對局中には、決して話をしない癖がある。だから何となく「泣かぬ聲」の氣持ちが、察せられぬでもないが……。

で、まづ、氏は黙つて盤面を睨みながら、腰のあたりを手探りに煙草入れを取り出した。取り出すと撮んだ刻みを、ヤケにグツと雁首に詰めて、ぶかぶりとして服紫の煙りを大きく輪に吐いた。輪はグル／＼と内側に捲くれ込みながらふわり、ふわりと天井へ舞ひ上がった。上がつたと思ふ頃、深呼吸でもするように「フーツ」と溜息を漏らして、再び雁首へ刻みを詰め換えると、亦ぶかぶり……。煙草は詰め換えても、首と眼はぢ、ツと盤面を凝視めたまゝ少しも動かない。無言の行だ。——恰かも雲煙模様として見定めつつかぬ底

深い谷間の中を、山の上から一心に見下ろしてゐるようになり、いつになつたら、その霧が晴れ上がるのか、皆目分らぬ。全く果てしない。だから、氏の姿が、そのまま石に化るのかと思はれるばかりである。

離て、ものゝ二時間も経つたらうか。その時初めて、無明の闇は豁然として開かれた。底知れぬ深い霧が、見る／＼吹き拂はれて、あたりは一時にハッキリした——勢ひよくボーンと煙管の吸殻をはたくと、九五龍玉と逃げた。實に巧く、逃げたのである。

だが、然し、萬事は休したのでない。二時間の長い考慮も、今は凱旋將軍のやうに、意氣軒昂とした谷頭氏の『どんなものだ』と、勝ち誇つた紳々たる餘裕の前には、何の用をも爲さなかつた。そこには、矢張り、角が睨んで

【五六】
みたのだから……。
で、あまりにも苦もなく、谷頭氏にストツと龍玉を取られて、勝敗の決は定まつたのである。

◆東京風聞記

千 歌 山 房

○鬼總監丸山さんを暗殺するか、總監が斬られたとか、物凄いい噂がともうるさい。殊に五月初めの或る朝などは、暴漢に斬られたとの流言が誠にやかに傳へられた。處が御本人の丸山さんは禿頭を叩いて『この通りピン／＼してゐるが、暗殺だとおどかさされるのはこれで二度目だよ』とある。

○その最初は私娼撲滅の際一週間ピストルでねらはれたほんたうの経験があるので、今度の流言などはてんで問題でないといふ元氣とある。

◆明治町異聞

北 漢 山 人

○先年物故した小林藤右工門氏の嫡男采夫氏は、東大出の法學士で、内閣官房に出仕し、今は獨乙に留學中である。

○氏の洋行に旅立つたのは、小林氏が死去する二十日ばかり前のことで、勿論當地にも立寄り、父子對面の上、西伯利亞線をとつて出發したのである。

○ところで、小林氏は、その後俄に發病し、種々の手當も甲斐なく、采夫氏がマダ伯林に着かぬ中幽明境を異に至つた。

○で、遺族間に、この事を知らせるか、どうするかといふ問題も出たが、結局心配させぬ方がい、といふことになつて、その儘にしておくと、不思議や伯林から『死んだのは誰か』と、叔父さんに當る櫻井秀專氏に宛て、電報が飛び込んだ。

○櫻井氏が、『ハテナ、どうして知つたらう』と、驚いたのは勿論、他の人々も、一種奇異の感にうたれた。

○スルト間もなく、電報と一緒に書いた采夫氏の書面が到着。それに依ると、モスクワから伯林へ行く汽車中實に不思議なことがあつた。といふのは、一寸自分がる

た、ねをする、誰とも知らぬいゝ年輩の、白衣の人が来て、いかにも懐かしさうにして自分の前に佇む。ハツとして起き直らうとする、スーツとその人影は消えてしまふ。この夢を、何度もし、引ついで見た。何となく不吉の豫感がする。さて、伯林へ着くと東京の友人から『御不幸を悼む』といふ電報！一體死んだのは、どなたですか……といふ譯。

○櫻井氏が、目を繰つて見るとその夢に白衣の人に會つたといふ日時と、小林氏の臨終と、ピッタリ符節を合せるが如し……今に一族間で、不思議々々といはれてゐる。

幽明境を異にするに至つた。つた。といふのは、一寸自分が

傷

久留米三郎

(山口銀行支店)

その日も澄夫が彼女の家の前を
通り過ぎた後で彼女が近頃の澄夫
の様子について考へさせられずに
は居なかつた。此の夏澄夫の友人
が彼女の家の隣に居つて、澄夫と
彼女との間もまだ親しかつた頃、
澄夫は度々彼女の家の前で立止つ
た事があつた。

そして其の友人が轉宅して暫時
の間澄夫はそのあたりを通らなかつ
た。だが近頃になつて又、澄夫
が彼女の家のあたりを通ることを
一月程前に氣付いた彼女は、その
後毎夜彼の寂しそうな後姿を見せ
られた。そして彼女は、『此の寒
い中をあの人を……』と、そんな
半ば思ひやりのひとりごとをもら
し乍ら、それでも『だつてあの人
は自分をあんなに悪く云つたとい
ふではないか……』と自分の心に
湧いてくる澄夫に對する好感の心
を無理矢理に打消してゐた。

澄夫と彼女とはR信託會社に勤
め、二人は小學校を同じくする點
で多くの社員の中で双方共最も親
しみあつた友達同志だつた。そし
て互に身の上や抱負や果ては不平
なども語りあつたりしてゐた。そ
んな友達としての交際が半年程も
續いた後澄夫の心に彼女を友達と
してよりも他の心で見れる様になり
彼女にも澄夫以外に最も信すべき
別箇の男性の友達が出来たのだつ

た。そして澄夫には寂しい月日が
繰返へされ、彼女には楽しい夢の
日が流れて行つた。けれど彼女の
その楽しい日も永くは續かなかつ
た。彼女に對するその戀人の心が
決して眞面目なもので無い事を知
つた社員の一人が、彼女の前途を
案じその戀人を戒め二人の間を裂
いてしまつたのだつた。彼女は其
戀人の本心をその社員から聞かさ
れた時非常に悲しんだが、結局あ
きらめるより方法はなかつた。だ
が執拗なその戀人はそれが澄夫の
指金であると信じ最後の毒矢を澄
夫にまで向けた。そして有りもせ
ぬ讒言を彼女に與へて澄夫達の
から去つてしまつた。そして彼女
はその澄夫に對する讒言を信じ、
判然たる澄夫の諒解をも聞き入れ
ずして遂に親しかつた二人の間に
大きな溝をこしらへてしまつたの
だつた。だが澄夫は最初と變らぬ
純情さで一貫して來た。けれど如
何に彼が彼女の心を取返すべく努
力してもそれらの努力は總て無駄
だつた。そして最初には自暴自棄
になつた澄夫は彼女にある迫害を
與へたのである。だが澄夫は其の
迫害を與へた後の寂しさをどうし
ようもなく深く彼女の前に罪を謝
したのである。だがかたく成り切
つて居る彼女の心は彼に許しを給
へず澄夫の哀願的な態度を意地悪
い蔑視の目で見返す様になつた。

三

澄夫はもう二月と云ふ長い間毎
夜彼女の家のあたりを彷徨つた。
晝の間會社で顔を合はせて働いて
居り乍ら一言も交してくれない彼
女の心を悲しみ乍ら廿余町の長い
道を毎夜、何んといふ望も無し
に寂しい心で歩く近頃の彼だつた
そして余りにも意氣地ない自分の
心を泣かすには居られなかつた。
だが何時かは彼女が自分のこの寂
しい心を知つて呉れるだらうとい
ふ事をたのみ乍ら彼女の理性を待
つたのだつた。

四

その翌晩は北漢風の吹き荒ぶ寒
い夜だつた。彼女は夕食の跡片づ
けを終つて時計を見た。そして
『今夜は寒いから』と口の中でつ
ぶやき乍ら立ち上つて寒い風の中
を歸湯へと急いだ。と、彼女の前
方から澄夫らしい男がオーバの襟
を立て、うつむき勝な姿勢で彼女
の方へ近づいて來た。そして彼女
とすれ違ひさまに、彼女はそれが
澄夫である事を判然と知る事が出
來た。而し澄夫は彼女には氣付か
なかつたらしかつた。その夜風呂
から歸つた彼女はまんじりとませ
ずに澄夫の事について考へた。そ
して自分の澄夫に對する態度が余
りに卑劣である事をつゝと知
つた。けれど現在となつてはどう
しても自分から謝る事は彼女には
出來なかつた。そして澄夫の心持
の寛大さに對しての自分を悔ひず
には居られなかつた。そして澄夫
が何事でも話しかけてくれれば
自分の一切を謝らうと決心した。

五

その翌日彼女が會社に出た時澄
夫のまわりに二三の社員が集つて
何事かがやゝと話し合つて居た
そして一人の社員が彼女の姿を見

付けると彼女の傍へよつて来て、山野君があの寒い昨夕散歩して御苦勞にもひどく足を怪俄したさうだ」と云つた。そして彼女が澄夫を見た時和服姿の澄夫が彼女を凝視してゐた。その視線を受ける

心が起つた。そしてツーンとして彼の視線から顔をそらした。その後で澄夫がどんなに考へ込んでゐたかと言ふ事は彼女には氣付かなかつた。

【五八】
やうやく血がとめられて氣が靜まつた時、彼女は足を怪俄したと言つてゐた澄夫の事が思ひ出され、澄夫に謝らなかつた事が悔ひられてならなかつた。そして悲しみの爲にか痛みの爲にか流れる涙をこらへ乍ら、「神様！あの人の傷のいたみが激しいのでしたら、どうぞ私の傷口にそのいたみをおうつし下さいませ……」とつぶやく様に祈つた。

漢陽客中

(雜詠 七首)

木本滴翠

(朝鮮 銀行)

- 一 賞春城外石橋邊。 雨後風光野色鮮。
- 移步時無一塵到。 老櫻新柳影相連。
- 二 又逢檉城鬪陽辰。 桃李花開楊柳新。
- 風物感來難結夢。 客窓春思入鄉頻。
- 三 一枕常思臥淡煙。 吟筇何日翠微邊。
- 檉城不恨負花夕。 棋友時來又廢眠。
- 四 寔詩人到賣茶家。 燕々啼々聽不嘩。
- 春色九旬如夢去。 如見隣時走輪車。
- 五 想彼佳人惜晚春。 簾前風色客愁頻。
- 有情兩似無情雨。 一夜擔聲花委塵。
- 六 滿眼風光新樹天。 方知濃綠滿山川。
- 冲融時節尋詩料。 立杖丘邊聽杜鵑。
- 七 客窓新感舊詩眉。 花落花開已二年。
- 一夜社頭松樹月。 南山山角聽啼鵑。

五月の空

徳野鶴子

(櫻井町一丁目)

- × 雀子のありかわかねどなきかはす聲ほがらなり春のあけがた
- 窓ゆ見る空ひといろに春雨のふるともみへくものしつけさ
- 花ぐもるそらのよどみに日の在處どんよりとしてなまあたゝかき
- × らんまんと櫻の花の咲ききそふ御苑のうちに入あふれたり(昌麗苑三首)
- 丹さびし明政門も夜櫻の花の灯に浮きいで見ゆ
- かくはしき御苑の花もめでまさで大妃は深くこもり給ふや
- × そよぎ光る若葉のみどり目にしみてうつ／＼かしらおもたき日なり
- きら／＼と五月のそらの水色の風にまひちる飛行機のピラ
- 遊覧機の低空飛行に喜びてひろ場の子等は手をたゞきよばふ

を連發せられるので、腹を抱へて笑つたことがある。馬土の尋常一

近 詠

新田如氷

牡丹やとさすことなき明政殿
 段下りて牡丹の園を一巡り
 園丁もカメラに入りし牡丹かな
 金屏や牡丹崩るゝばかりなる
 水盤の今朝甕へる牡丹かな

新田時子

春曉やさめて淋しき旅枕
 春曉の加茂の流をうつゝにて
 嵐 郷
 相見てのあとの淋しき櫻かな
 猿澤池
 甲羅干す龜動かざる柳かな
 富士號に富士を仰げる麗かな

拓川集

永樂町人

○ 私の茅屋は、東窓を排すれば、正面に朝鮮神宮の丘を望むことが出来る。今や新樹青々、天晴るれば、所謂薫風が渡るのだが、今年けトカク雨が多い。しかしアノ滿山の茂みに、終日雨が降りこめてゐる光景も、決して悪くはない。

○ 拓川集といふのは、加藤恒忠氏の遺稿を集めたものである。その加藤氏は、明治の末年白耳義の公使をしてゐた。本職は、外交官畑

○ の人である。しかし晩年は、大阪新報社長として、政論に、隨筆に富饒なる才分を見せたやうに、その人間本質は、むしろ一箇の志士であり、一箇の風懷人であつた。

○ 拓川居士といへば、私には忘れ得ぬ思ひ出がある。曾て東都に在住の日、一日福本日南氏に『加藤氏といふは？』と、その人物閱歴を問ふたことがある。スルト福本氏の答へは、斯うであつた。『加藤……ウソ、愉快な男だよ。やつこさん、外務省の飯を食つて外國を歩き廻りながら、屁の研究をしてゐる。今屁の研究では、佛蘭西に某といふ大家がある。それを除けば、アノ加藤だ』——そして司法省法學校以來の關係を語られ、話中屢々『アノ屁博士』

を連發せられるので、腹を抱へて笑つたことがある。居士の尋常一様の士林でないことは、三十年來屁の研究——屁の文獻の蒐集——に没頭したことも判らう。

○ 拓川集を讀むと、居士が唐宋文人と、氣稟を一にした人であることが判る。その樂しむところ、その悲しむところ、その立論し、且つ敘情、敘景するところ、何ぞよく古人と相肖たる。單に文章家としても、居士は、明治の第一流であらう。

○ 集中、面白く思つたのは、居士が二十才の頃、薩長の專横を憤り新聞記者となつて、これを正面から突き崩さんと決心し、同郷の先輩山本忠彰氏に、志を語つた條である。スルト山本氏は、

それア面白くない。維新以前、松山の古老は松山くといふてゐたが、その時は、薩長は既に日本くといふてゐた。また明治初年、松山の連中が目の覺めた如く、日本くといひ出した時、薩長はもう世界に目をつけてゐた。先覺者が、天下を擔當するのは當然のことだ。それはそれとして、君らが、今頃薩長くとは、何事ぞ。明治は何年になる。日本の急務は、そんなことぢやあるまい。

○ これには、居士もグツと參り『余深く恥ぢ、それより一意學問を勵むに至つた』と書いてゐる。

○ この集げ、橋本豊太郎氏の曾し與へられたものである。私は、他の機會に於て、更に橋本氏から、居士の逸事、逸聞を聴かんことを樂んでゐる。

ヨタ吉の習作

宮松夏斗

(城大醫學部)

雜筆社の方からしきりに何か書けと云ふ、忙がしくてやりきれない云つて書かなくても義理が悪い。然し昔書いた戀愛舞踏曲張りのものもどちらも歌派の歌派で變挺子だ。で日誌の上に書きなぐられた断片を無造作に書き綴る事としました。記者の方には約一デシメートル以内の行數に活字を御願すると約したんですが、書いて見るとたよらない、だが木の芽は案外しのびやかに訪れます。で私もそつと雜筆の小活字上で皆様の御顔を拜見する事とします。勿論嘔吐を催さねばいゝかと云ふ心配はもつてゐるうぶさんなんですけど。

× ×

疲れ切つた埃まみれのからだを湯にはこび顔にかみそりが這ひあくる。うつとりとした夢氣分に椅子によりそひ、クリームが心地よい芳香を嗅覺にうつたへ、ペーラムが頭の上で踊りくるふ。素敵な初夏の宵です。ターキシユのゆかしき紫煙がダイアナの金口よりゆるく吐き出され、開けはなれた三階の窓から廣重の繪の様なコバルト色の大空に薄紅色にそまる夕焼が見られる。豊艶な肢体の持主アングリカの姿が精靈の再現アラウネの腫が純真なケツナヘンの従順と熱心さが一種の詩的幻覺となつて頭腦を横ぎる。中樞神經が妙に小説じみた昂奮と状態となりセンチメンタルになつて来る。懷中

が満朝干潮と交替するサラリーマンの月半ば、胃はカクテルの調合を要求するとも不能だ、結局ナツシユの杖が下駄箱の上で深呼吸する。變態的な愛の衝動も交通機關の複雑さに取りまぎれる。でもとてもとても氣持のいい初夏の夕ですと二階からこうして宇宙の星座を——(青磁の体のダイヤモン下)——見ながら深刻な藝術的圈内にゐるやうな結論がする。強いて應酬な態度で落つきない心の動搖をかくし、新鮮味のかけた舊式の沈黙が曖昧な哲學者型となる。何んと云つても夕は一日の疲れを癒やす神の日課だ。淡褐色のホイトストローにまいたネビカットでもくぶらしながら脳味噌に反響のなくなる夕の散歩時をつひやす。

× ×

足がきちやうめん午後五時下宿の二階に歩ぶ段取も二十一日はスペースシャルデーだ。何處にしようかと獨身俱樂部の幹事が相談を晝食時に懇談的に徐々に云ひ出す懷中のふくれ工合と足跡の延長距離が正比例する。二ヶ月の期待がそんなに急にまとまらない。まづ幹事一任でけりがつく。壓搾された一月の生活が反撥しイオン總量が増大する。夜的情緒！そんなものが『ナマヤサシヤ！』と云ひながら深く自動車の中に風船玉の様にころがりこむ。カクテルが咽喉を快活に通過す

【六〇】

るを意識し、甘い空氣の出入が肺臓に認識され、湯然とセーラパンツがペフメントの上を流れる——數刻——超勢級のアルコール注加量が狂体の洪水を生み、尙も鈍い腫が棚の瓶にシユウチヤクする。レコードの回轉につれ喧しいドラ聲が合唱する、汚染した空氣炭酸量の多いカフェーの一室にビールのあわが爆發する。埃塵はリノリユムの上にくつびどく油つけられてゐるとも狂亂の舞踏にはぢき出され記憶が中樞の存在を忘れひよる長いからだだが地球を對照に動搖する。でも下宿のベットに必ず酔体が運ばれる習慣は流石に造物主と人類の有難さに感謝する。

◇お互ひにネ

北 漢 山 人

○工藤操雪氏は、性孝行であつて、時々夫人を奉じて、保養に出かけます。

○尤も、その孝行は、三申井の食堂位であつて、これをネダシ見積ると、一人前三十五錢位です。

○ツイこの間も、夫人のお供をして、三申井に出かけ、得意の三十五錢の孝行をしてゐると、うしろのテーブルで、フツツと笑ふものがある。振返つて見ると、これもやはり孝行組——青葉町の橋本さんが、奥さんを奉じて、三十五錢をきめ込んでゐる。

○『ヤー、やつてますな』『フツ、お互ひにネー』、見ると双方とも、一寸ほど、首を縮め合つてゐました。

提唱せられる。

濟むであらう。しかも却つて經濟

に小説じみた昂奮と状態となりセンチメンタルになつて来る。懐中

にころがりこむ。カクテルが咽喉を快活に通過す

方とも、一寸ほど、首を締め合つてみました。

ひとり言

永樂町人

死後

基督教の信者は、その臨終の床に於て、靈魂の永遠なることを説き聞かされ、『あなたは、これより主のお側に行くのである。少しも心配することはない』——斯くて、本人も、周囲の人々も、徐ろに讚美歌を唱へ。満座法悦の裡に終に瞑目合掌するといふことである。

今私は、丁度それと反對の考へをもつてゐる。私は死は、萬事の終滅であつて、その瞬間以後は、この肉體も、この靈性も、悉く一切空に歸する故——それ故死は、人間にとりて、最大無上の安住境であると思ふてゐる。若し人間死んだ後も、尙ほ靈魂といふものがあつて、我々はドコ〜までも、意識的に、感覺的に、衝撃せられ遂に寂滅安定するの機がないとしたら、これは實に、災難の最も大なるものではあるまいか。

現世の生活に於ては、我々は、親子の仲、夫婦の仲、兄弟の仲と雖も、なか〜しつくりとは行かぬ。況んや對世間の交渉、交友に至つては、喜びよりも、むしろ反對のことが多い。何人も生涯の中心度や二度は、死を思ふであらうそして死は、一切空、絶對滅盡の聯想の下に、始めて我々に、相當のなつかし味を有つのである。

國立公園

國立公園といふことが、頻りに

提唱せられる。

内地では、瀬戸内海乃至富士山を中心とする一帯の地方を、國立公園にせよといふのである。また朝鮮では、金剛山を、國家の財用に於て、大々的に設備經營せよといふのである。

それには、いち〜論據がある我々は、決して反對するものではない。唯だそれらの首唱者の口吻には、或る共通した一ツのおかし味がある。我々は、それを非常に殘念に思ふのである。

曰く、『さうすれば、物好きの外人が、續々到來し、必ず巨額の金を落して行くであらう。これは即ち我が國益である』と。

國益が主か、國立公園が主か。我々は、しばらく方向に迷はねばならぬ。

若し金剛山や、富士山が、餘程氣の早い男であつたら、『我々一統のものは、お國に忠ならんことは、豫ね〜心懸けて居ります。されど、我々は、何分にも男性なれば、煙草屋の看板娘だけは、平に御容赦相成度し』——嘆願書を出すことであらう。

洗濯物

隣家の若い夫婦が、相争うて居る。洗濯物のことらしい。

良人は曰く、『これ式のものをお前洗つたらいいぢやないか』、『忙しいのよ、洗濯屋にやつたつて、五錢か六錢で済むぢやないの』、彼等は、しばらく雙方で、ブツ〜いひ合つてゐた。

その晩、良人は、私のところへ來た序に、『内の奴らは、どうも斯うもなりませぬ』と、コボしてゐた。

洗濯屋にやれば、五錢か六錢で

済むであらう。しかも却つて經濟

かも知れぬ。但し今の若い女性に女性らしい家婦の仕事興味の、全く失はれてゐる事は事實らしい。

問題は、五錢や六錢でなく、彼女の心の『おき處』の問題である。これは、近くに住む或る技術者の話である。一夜、私のところに來て、自己が信仰を得た動機、經過をこま〜と語る。さういへば近來顔色も良く、健康も益々佳良なやうに見へる。

私は、不幸にして、彼と同じく神の存在を信することは出來ぬ。むしろそれを迷信する彼を、氣の毒にさ〜思ふ。但し或ること、或るもの、或る信念に、いさゝかの疑念さ〜もたす。いとやす〜と、これを尊信し、安養し得るその人の眞率さには、何となく頭の下る氣持がした。

宴會

支那料理は、世界第一の盛饌であるといふ。

古來支那人位、料理の研究をしたものはないといふ。

極めて古い時代に、『食譜』などといふ、驚くべき大著の出でゐることでも、それは、想像に餘りある。

彼の國の王侯貴紳は、何千年來宴遊に次ぐに、宴遊を以てしたのであらう。

近頃日本でも、政治家や實業家は夜に日に『宴會々々』である。

或る人曰く、『曾國藩は、卅二歳の時から、夜門を出なかつた。若し今の日本の政治家や、實業家が、これを夜だけでも慎めば、もう少し日本から大人物が出るであらう』と。



一、一杯の「福迎」にて終日の勞苦を忘る。

二、これを三杯して明日活動の勇氣を得。

三、日々「福迎」を愛飲すれば、長壽と家庭圓滿とはつゆ疑ふ可らず。

四、幣場新製の「リットル」をお勧め申上げます。いかに文句多き酒客でも、これなら「ムーン」と唸らるゝこと確實。

五、「リットル」は今燎原の火の如く上流社會に争つて愛用せられてゐます。

京城本町電車終點

難波酒造場

電話 本局二四六一番
光化門二四五番

夏服

既成品

廉價無比何卒
御來店を乞ふ

特別仕立

新地着荷

御注文に依り
入念調製仕候

京城府鐘路一丁目


濱洋服店

電話光化門二四四

三十年來
おなじみの
最上醬油

香味
佳絶

お上品な
料理に
淡口醬油

ホシ大ソーヌ

京クカ 京クカ

油醬口淡 油醬最上

永登大 浦登大

内 科
婦 人 科

今本醫院

院長 今本義胤

(京城旭町二丁目)

毒 大浦貫道

刊 月 心の友

京城南米倉町
心の友發行所

社長 福田有造

木浦新報

光州日報

(紙面全く一新)

昭和四年五月廿五日印刷
昭和五年六月一日發行

本誌定價

一ヶ月(部) 四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇

發行兼 松本武正
編輯人 石川利夫
印刷所 京城日報社

京城府和泉町一七〇
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

京報日報

每日申報

!! 季好の勝探が今

翠綠鮮やかな半島の山水美

上代文化の粹を誇る舊蹟遺趾

探るべき景勝は●●●●●

金剛山

……内、外金剛行共便利となり、特に内金剛へは京城から日歸りの旅が出来る外、毎土曜日、休日の前後には京城から三等急車を直通す。

金剛山探勝割引乗車券

單獨 三割引
團體 五割引

慶州

……大邱から汽車二時間餘、新羅一千年の榮華の遺跡を一日にして視察することが出来るがある。(論山驛より自動車約四里)

扶餘

……百濟の舊都、附近八景の情趣掬すべきものがある。高麗歴代の遺跡、滿月臺、善竹橋等訪ふべき個所が多い、尙近郊には朴淵瀑布、大興山城址の勝景がある。

開城

煉龍窟

……未だ世に知られない東洋有數の大鍾乳洞、雄大、神秘なること母地中の金剛山の如くである。(价川驛より自動車七里)

朝鮮總督府

鐵道局